
一色素のブルー

有村ひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一色素のブルー

【Nコード】

N6676L

【作者名】

有村ひつじ

【あらすじ】

雲の上、空の果て。近くて一番遠いところにあるふたり。『シーグル』政府軍副將軍の地位にある高遠宗司と、彼の“ただの秘書”である凜のお話。

1・契約された命（1）

双頭の鷹を象ったその紋章は力と生命を示す。

右の青い頭には誰も見ることはない雄大な海を。

左の白い頭には絶え間なく注ぐ光を。

父親はこの国の兵として、一年のほとんどを外の国で過ごした。

母親は毎日忙しく街に働きに出ていたため朝から晩までひとりで過ごしてきた。兄弟はおらず、近所に年齢の近い友達もいない。

貧しい家だから学校にも行けず、昔、父親が使っていたという教科書を読み返して字を覚えた。

固く干からびたパンを千切り、街にひとつしかない井戸から汲んできた水で喉に押し込む。それが朝昼晩と続き、たまに野菜を分けてもらってはスープを作り口にする。それが食事だった。

それでも、生活は楽しかった。

新しい字を覚えるのはひとつ成長したようであらしかったし、種から育てた野菜が実った時は嬉しくて、慣れないスープ作りもしてみた。

それはいつもと同じ朝。

「また招集がかけられた。今度はシーグルとだそうだ」

渋い声がまだベットで横になっていた自分の耳へと届いた。久しぶりに聞く声に慌てて目を開けると木戸を開く。

「長くなりそうなの？」

どうやら起きた気配に気付くことのないやせ細った女が心配そうに声を潜めて言う。

そして存在に気付いたらしい男は大きく目を見開いて、そして柔らかな瞳を向けた。

刹那。

眩い光は視界からすべてを拭い去るように消していた。

「——え？」

耳に届くのは、すでに遠いところになった爆撃音。そして近くから響く叫び声。

視界に映るすべては粉々になった木々や煉瓦の山で、あちらこちらから煙と火が上がり、さっきまで目に当たっていた柔らかな太陽の光は鈍く重い灰色の雲に覆われ、まるで闇が訪れたように薄暗く

なっていた。

それがどこから襲撃を受けたと悟ったのは、いやに鼻につく焦げた匂いと、生臭い臭気が辺りに流れていたからだだった。

そしてなによりもそれが決定的だったのは、

目の前に突き出た二本の腕が視界に入ってからだった。

「おと……」

深い緑色の袖は今朝方父親が着ていた服に似ていた。

「おか……」

その腕にしがみつくように伸びたやせ細った手。腕に巻かれた組紐は父親からのプレゼントだと、まだ幼い自分に嬉しそうに言わなかったか。

立ち上がる。

足の筋肉は無に等しい力しか発揮せず、数秒でその場に尻餅をついた。

何故だ。

生きるのにぎりぎりの生活をしてきた自分たちが何故このような仕打ちを受けなければいけないのか。瞬間的に喉を焼かれたのか、泣き声さえでなかった。

瓦礫の山に埋もれた二本の腕は微動だにせず、同じように昔、家だったものの上に座り込み、立ち上がることも動くこともできない自分の耳にも、いくら待っても切望した声は聞こえてこなかった。

「お嬢ちゃん！早く逃げな！」

叫ぶ聞きなれない声にそつと顔を上げると、片手に赤ん坊を抱え、持てるだけ家財を持ったのか重そうに荷物を持ったまだ若い女が立っていた。

「あつ……」

二本の腕に気がついたのか、青ざめた表情で女は口を閉ざした。

それでも声が出なかった。

意識も遠いところになっていた。

それでもいいと思っていた。

「とにかくっ！お嬢ちゃんっ、早くしないとシーグル政府軍がっ……」

その悲痛な声も遠いところとなっていく。

いいのだ。

これで。

暗い暗い闇の中に引き摺り込まれたのはあっという間のことだった。

1・契約された命（1）（後書き）

残酷描写になるのかな。暗いですね。ええ、最初だけです。たぶん。契約された命（2）も続けてアップします。引き続きよろしくおねがいします。あ、天井宇宙もよろしくおねがいします。

2・契約された命(2)

こんな歴史にいてもいなくても全く支障がないわたしがこの世界から消えないのは、

それでも自分の命が消えなかったのは――

腰まで伸びた黒い長い髪は焼け焦げ、縮れているところもある。取り除きたいのは山々だが、無残になり果てたこの場所ではどうしようもない。

「――あ」

掠れた声しかいまだ出ないし、実は足は爆風に飛ばされたときに傷ついていたのだろう、今更ながらに膨れた脹脛が痛みを増している。両足ともそんな状態で、動くにも動けない状態だった。

あれから二日も経っていた。

空腹は気にもならない。

ただ、目の前の二本の腕は徐々に細く爛れていく、それだけが心を痛めた。

街の生きていた人々はほとんど逃げてしまったのだろう。たまに近くを徘徊する人間は元々浮浪者だったもののようだ。何かを掘り起こしては衣服に詰め、たまに倒れている自分の元に近寄ってくる者は、それでも哀れみの目を向け、どこからか掘り起こしたのだろう無事な瓶入りの水やパンの欠片を投げていった。

食べる気は起きなかったが、水は飲んだ。

煤と泥に塗れ、元々ふくよかという言葉は無縁だった両手は骨ばかりが目立つようになっていて。
そうしても水は飲んだ。

耳に届いた無数の足音も自分には関係なかった。だから、背後で気配がしても振り向かなかった。

きつとまた浮浪者だと。

もしくは死神か。

自国の兵が間に合わなかったことへの罪滅ぼしでもしに偵察にきたのかもしれない。

けれども。

どの考えもどうでもいいことだったのに。

目に触れた、目の前に立ったその姿に、何もかも忘れていた。

「キミはなぜここにいる」

まだあどけなさを残す声。けれども恍惚とするくらい綺麗な声。それはどこか驚いたように発せられた。

「ああ、足をやられたのか」

顔は見えないが、その言葉で自分の両足を見ているのだと思った。確か、爆撃があつたとき着ていたワンピースのネグリジェはほとんどボロボロになっていなかっただろうか、そんなことが悠長にも脳裏に浮かび、急に恥ずかしさが込み上げた。

「名前は」

自分に聞かれただろう問いに返す声がなかった。ゆっくりと首を横に振る。久しぶりの動作にぎこちなく首が反応した。

「わたしは——これは、お前の両親なのか？」

さらに驚いたように続ける。

「お前は泣かないのか」

どこか痛みを堪えたような声だった。思わずさらに顔を上げて、驚いたのは自分の方だった。

ああ。

銀色の髪は落ちかけた夕日に染まり橙色に輝いていた。薄っすらと青みがかつた目はじっと見つめている。

今までみたことのない人間がそこに立っていた。同じ歳くらいの少年だった。少年は徐に両手を伸ばす。

「え？」

「声、出るんじゃないか。無視するな。まあ、仕方ない」

その言葉と同時にふたりの距離はなかった。

言葉に反してやさしく包み込むように少年の身体は自分に重なっていた。

「二日間も泣けなかったのか？痛かっただろう、目の前で両親があんな姿でいるのに」

最初何を言っているのか検討もつかなかった。

「泣いていいから」

理解した。

ああ、そうか。

「わたしが……いや、オレがここに来てよかった。泣いていいぞ。終わるまで何日かかってもいてやるから」

トントン、と軽く背中を叩かれたのがタイミングだったかのよう

「あ……あ……おかあ……おとさあ……あああああ
あああああああ……！！！！！！！！！！」

涙が止まらなかった。

あまりにその両手が優しくて。

あまりに彼の中が心地よくて。

いつか闇の中に二本の腕を見ることはなくなっていた。

両目に映る琥珀色の月。いつの間にか夜になっていた。

「さむい……」

呟いて、違和感のある両足に手を触れる。

「え？」

何かを切り裂いた布が両足に巻きつけてあった。慌ててあたりを見回す。

ザワリ。

そんな音がして見上げると、朝まではなかった木々に囲まれていることがわかった。もちろん辺りに二本の腕はない。

「……」

「起きたか」

端的な声には聞き覚えがあった。

「寒いな、お前、二日間も野ざらしで夜を越して寒かっただろう」
明らかに呆れた声が目の前に移動する。

銀の髪、覗き込んだのは青い目。

「ブルーアイズ……」

「悪いが期待には添えない。この目にはそんな力はないから」

軽くすれる音がして目の前が急に明るくなった。すぐに湿気を飛ばす音が強まり、身体を温めるような橙の明かりが大きくなる。

「軍に戻ってきたが、あんまり持ってこれなかった。偵察程度のつもりで陣を張っているから、まあ、ないよりまだろ、食え」

命令とともに振ってきた塊を慌てて両手で受け止める。

「これも」

今度は少年が手を伸ばし、一本の瓶を差し出していた。喉の渇きは止められず、それを半ばひったくるように受け取ると、すぐに口に含んだ。

「全部飲んでいから、ゆっくり飲め。ここはオレがいるから大丈夫だ」

聞こえていたがそれには答えず、とにかく瓶を傾けた。

簡単な食事、それでも果物までついていたのは生まれて初めての経験だったが、それが終わると少年はゆっくりと身体を横にした。

華奢な体つきが着ているものが軍の上着がないからか露になっている。

上着？

はっとして 両足を確認。そして肩にかかったものを慌てて取り除く。

「ごめんなさいっ」

両手で差し出して、長めの制服の裾が形悪く破かれているのが目に入った。無理やり破り、自分の両足に巻いてくれたらしい。

「いや……っていうか、初めて口をきいたと思っただけ謝罪？」

何故かそれが少年のつぼにはまったらしい。彼は顔を緩めた。

「あのっ、ありがとうございます」

「あ、ああ……あのさ」

「はいっ」

どうも緊張感がぬぐえない。同じ歳のようだが、目の前の少年は随分大人びて見える。

「わかってる？」

ため息混じりに尋ねられ首を捻った。

「その制服、軍服だよ？そもそもさっきも軍に戻ったと言った。軍にね」

「軍人さんなんですね？」

今度は苦笑いになった。

「天然ぼけててやつか？よく言われるだろ？」

「え？天然……それはよくわからないですけど、近所に同じ歳頃の子はいなかったのさ」

ああ、そうだ。

掠めた光景を思い出す前に、身体がふわりと浮いた感じを覚えて息を呑む。

「いい。それは、いい」

抱きしめられ、かけられた言葉に肩の力を抜いた。

「キミにはこれからオレがいる。だからそれは忘れていい。ご両親はちゃんと天国に逝けるように葬ってある。だから忘れろ」

「てんごく……わたしもいけるかな」

一呼吸あつて、少年の手は強くなる。

「悪いが……キミがいくのは天国じゃない」

じゃあ、地獄？

会ったばかりの少年に言われる筋合いはない、さすがに反論しようと思ひ口を開く。

「少佐っ！おいつ、いらっしやったぞ！四位さまに連絡しろ！」

急に聞こえたあわただしい男の声に、背中越しに少年が舌打ちしたのがわかった。

何事かと顔を上げる前に、少年はそつと身体を解いた。

見つめる先にある青い目は綺麗だった。

「時間がない。契約をする」

首を傾げる。

「オレはキミを守る。何があつてもその命を守る。その契約条件を述べる。それに同意できないようだったらあいつらが来る前にオレがキミを……殺す。いいね」

全く意味を解せぬまま、威圧感に押され頷いた。

「オレの秘書になれ」

意味がわからなかったわけではない。

命を助けるから秘書をやれ、ということだ。自分の。いや、そんなことだけでいいのかと反論しようと口を開いたとき「手を上げる！」無礼きわまりない叫びが聞こえた。

「答える。時間はない」

命などいらなかった。安い命だ。誰にも支障は出ないし、両親のもとへ早くいけるなら行つて、その身体に抱きつきたい。変わった少年だ。こんな安物の命を自分の大切なはずの配下に置くのだから将来は大成はまずしないだろう。そんなことはどうでもいいけれど、
だけど。

目の前の青い目は心配そうに見ていた。不安そうに。

だから、頷いてしまったのだ。

「その必要はない！」

少年は一瞬、それは嬉しそうに目を細め、身体を抱き上げる。

「えっ……あのっ」

「少佐っ！それを御放してください、敵ですぞっ！」

「ジタバタするな。落ちたらどうする」

「いやっ、あのっ……」

ふと聞きなれない言葉があった。

「少佐っ！」

「しょうさ？」呟いて顔を見上げる。相変わらず端正な綺麗な顔で、銀色の髪はサラサラと風に流されている。

みたところ自分と変わらぬ10歳前後の少年だ。

「名は？今度は言えるだろう。あれだけ飲んだんだ」

数名の男たちが目の前に慌てた様子で佇んでいた。誰もが同じ制服を着ている。

「少佐っ、その子どもをお降ろしてください！四位さまと老師がお待ちです！」

間違いなく、大の大人である彼らのほうが下手だ。

「コレはわたしと契約した」

「契約って！？」

「コレは今からわたしの配下だ。秘書を言いつけた」

「それはアルファの子供でしょう。少佐、申し訳ないが一言言わせ

てもらいます。それは敵の子供。しかも素性が知れない。戦渦に巻かれた戦争孤児です。何を血迷ったことをおっしゃられるのか！」

「ごもつともだ。」

「お、おろしてください……」

消え入りそうな声で、しかもそれだけしか懇願することはできなかった。できれば、おろして、そしてその場でなかったことにし消し去ってもらいたい。すべてを、なにもかも。

少佐、少年が顔を向ける。

「何も怖がることなどない。お前はわたしだから。契約は済んでいる。その名の下に。双頭の鷹を象ったその紋章は力と生命を示す」

身体に掛けられた上着の胸の紋章に目を向けた。立派な刺繍だ。

「右の青い頭には誰も見ることはない雄大な海を」

制服の右半分は真っ青な生地できている。掛けられた上着はあたたかかった。

「左の白い頭には絶え間なく注ぐ光を」

左半分は白い生地。目の前の大の大人たちは慌てふためいているのが目に見える。こんな子供に何を慌てているのか。

「笑ったな」

どうやら少年はわたしのこの行動はお見通しだったのだろう。最初から確信していたとも思えない口調で言う。

「名は」

ああ。では伝えよう。それが本気とわかるなら。

「凜」

少年少佐は目を見開き驚く。

「りん？」

声を漏らし、次の瞬間、少年少佐はふと笑みを零した。

「わたしの名は高遠宗司。シーグル政府軍第一部隊少佐だ」

「しーぐる？」

少年は頷いた。

そうか。だから言ったのだ「わかつてる？」困ったように。敵である自分と向かい合っているのにも関わらず、謝罪と礼を述べる変わった少女に。

目の前の大人たちも、そして掛けられた制服も、青と白はシーグ

ルの色ではなかったか。なぜ今まで気がつかなかったのか全く不明だ。

アルファ、そしてベータ、王龍。誰もが知っている“シーグル”という国。

変わった国だと聞ぐが、今自分をお姫様抱つこのように抱えている少年意外、大人たちは外見はもろともさっき聞いた意見も態度も至って普通だ。

「凜」

囁くように確認するように高遠宗司は言う。
最初に惹かれた声で。

諦めたような表情をした大人たちの前で、耳元にそつと口を寄せると高遠少佐は呟く。

「凜、ふたりのときは宗司と呼べ。契約だ」

わたしたちの契約はそうして始まった。

2・契約された命(2)(後書き)

高遠くんと凜ちゃん。ぜひ、ごひいきに。

3・空虚の所在

琥珀色の月に照らされ高遠少佐は、まるで壊れ物を胸に抱いているかのようにそつと歩みを進めている。隣を歩く老齢な指揮官はそんな高遠の様子を戸惑いを隠せず見つめていた。

「わたしの顔になにかついているか」

「いっいえ……少佐。なぜ、そのような少女を？」

「お前に言う必要のないことだ」

強い目で言われ、老齢な指揮官は口を閉ざした。

しばらく歩くとにわかになにがわめきだった数十名の陣が現れる。高遠が何事もなかったかのように歩を進めていくのを青年たちは好奇の視線を送りながら見ていた。

「少佐っ、どちらへ！」

もうすぐ目的地というところで方向を変えた高遠に慌てて指揮官が走り寄る。

「このまま四位さまのところへ行けというのか？少し待て」

有無を言わず高遠は近場の野営テントの布を掻き揚げ、そのまま奥へと入っていった。仕方なく指揮官はテントの入り口で両腕を組み、待つことにする。無然としない表情を露にしながら。

そつと軽く細い身体を地面に敷いた布の上に横たえ、高遠はそば

に腰を下ろした。
頬を撫ぜる。

「凜」

たったそれだけのことだった。

目を開けるには充分すぎるほど恍惚とした音色が脳裏に届き、意味も忘れたままうっとり目を開けた。

目の前に佇む銀色の髪、薄っすらと青みがかった瞳の少年。

「わたしの名を言ってみろ」

「……宗司、さま」

少年は満足そうに頷いた。

「凜は頭がいいな。すっかり契約は遂行されているようだ」

そうして「なぜ見下ろされているか」ふと疑問に思い、首を傾げる。鼻に届いた湿気を含んだ土の匂いに、地面が近くにあることを知る。

「身体を起こせ、そしてその水を浴びろ。時間がない」

身体を起こせ？

「ここはどこですっ」

咄嗟に叫びながら身体を起こした。

何故かそれにも高遠は満足そうに頷いた。

何故だ。

冷たい水を身体にかけ、泥や埃を流し落とす。現れたのはやせ細り、青白く血管の浮き上がったどこにも魅力を感じない身体だった。

「凜」

「あつ、はい、いま……」

多少気が立っているのか少年の声は端的に冷たい。用意された厚い布で水滴を拭き取り、これも用意された大き目の白いシャツと黒い上下のスーツを身に纏った。両足に巻かれていた青と白の上等な布をそつと撫ぜ、自分の身の置かれた場所を思い出す。

「いいか、あけるぞ」

そう言い切る前に高遠は仕切りとなっていたカーテンを勢い良く開けていた。

「……大きいな。やはりわたしの中では。少し我慢しろ、シーグルに着くまでの間だけだ」

じつと見つめられ、俯く。

「足が痛いのか？」

「いっついえっ……いえ、あのっ……」

どうも緊張する。この威圧感は何んだ。たかが子供、同じ歳の子供なのに。

ただし、軍の少佐だけど。

心の中で付け加えてため息を漏らした。

「……ありがとうございます。こんな上等な服を着たことなどなくて……」

観念したようにそう呟くように言うことしかできなかった。

いつの間にそばにいたのか、その声は耳元に聞こえてきた。

「変わり者だな。敵の罠だとは考えないのか。売り飛ばされるかもしれない、と」

はっとして顔を上げる。

数十センチほどの近い距離にある真剣な青い目と視線が合い、首を横に振った。

「契約を……」

「そうだ。契約をしている、オレたちは。だから何も臆することなどない。凜」

たかが契約、されど契約。今更ながらに自分を今生かしているのはその契約でしかない。もし、少年の気に食わないことでもしたらこの命などないに等しいのだろう。

けれども。

なぜこの少佐はわたしを勇気付けるようなことばかり口にするのか。

どちらでも、なんでもいいことなのかもしれない。

いつなくなってもいい命など。遊ばれているだけかもしれない、

気まぐれなのかもしれない。

暗く憂鬱な考えが脳裏を埋め尽くす頃、高遠は口を開いた。

「――切る」

「はいっ！？なにをっ！？腹！？」

少年は何を切ると言ったのだ？慌てて顔を上げる。楽しそうに、けれども声を殺して笑う高遠の姿があった。

「絶対、天然ボケって言われてたぞ。凜。切るのは」

区切って、そっと手を伸ばす。

しつとりと濡れた長い黒髪に指を入れ梳いた。

「これだ。天然少女」

何も惜しいことなどなかった。

アルファを捨てる自分に思い出はいらない。

母親譲りのストレートの長い髪も、父親譲りの黒い目も。

鋏を手にしてからも高遠は何度も長い髪を指ですくっては梳いた。そっと、そっと。

パサリと乾いた音が何度も耳に入る。

目を瞑った先に見える光景は何もない。薄暗いテントの中で見える先は真っ暗な闇だけだ。

「凜」

「……はい？」

「契約をする」

「はい」

「これから先、お前は髪を伸ばしてはいけない」

示された三つ目の契約は不可解ながらも、そんなことでいいのか、と疑いたくなるようなことだった。

「あの、あの、あのっ」

「いいからいろ。どうせ足が痛くて立てないのだろう。それよりもジタバタするな。落とすぞ」

聞きなおしたい。落ちるのではなく、故意的に……落とすぞ？

仕方なくその両腕の中に納まったまま、行く先を見つめる。

軽くなった髪に風が吹き込み、真夜中で気温も下がったせいかな寒気がし肩を縮めた。

「もう少しだ」

そばに付き添っていた老齢の指揮官が足を止め、高遠に向け一礼をした。同じように付き添ってきた青年たちはその場で足を止める。どうやらその先に進めるのは高遠だけのようだった。動いているのは高遠だけだ。

「高遠宗司戻りました」

リンと音が鳴ったように張り詰めた声。

「うん」

返された言葉はなんだか弱弱しく、抜けている。

片手で一瞬、入り口の布を掛け上げる。そしてその頭を下げる。綺麗な銀色の髪が顔に落ち、胸が苦しくなった。下げた顔、その数センチ先で当たる視線と視線。

目を……瞑ってしまいたい。

けれども捕らえられた獲物のようにそれはできない。視線を伏せ、そらす。

「それは？」

心臓が飛び跳ねた。

高遠はそっと地面に凜を立たせると、手を肩に回し倒れないように支える。久しぶりに付けた両足はまるで初めて地面に立ったかのようにおぼつかず、力が入らなかった。震える両足は力がなかったのか、それとも、隣に立つ高遠が一瞬、一瞬だが震えたからだろうか。

目の前に胡坐を掻いて座っている綺麗な青年に。

「凜、です。わたしの秘書です」

一応紹介されたのか、頭を下げる。軽くなった髪の先が喉もとに掛かった。

「ふうん……宗ちゃん、趣味悪い」

顔が火照るのがわかった。

「……あ……」

背中をトン、と軽く押された。
顔を上げると高遠が見ていた。

「凜、こちらは四位さま。四位大佐だ。今回のアルファの任務について
は隊長でおられる。四位さま」

金色のやわらかそうな髪的青年が「ん？」やる気なさそうに顔を
上げる。

「凜を下げますが、それともこのまま続けますか」

「どっちでも。回線、つなげて」

高遠は一礼するとその場に先に腰を下ろし、凜の手をとると隣に
座らせる。足を曲げるときに鈍い痛みが走ったが、顔に出さないよ
うに気をつけながら高遠の少し後ろに腰を下ろした。

目の前の空虚に突如、真っ黒なローブに身を包んだ老人が現れた。
といっても、巨大なモニターが出現し映し出したただけなのだが、
初めて見るその光景に口を開けたまま見入ってしまう。

「老師、およびですか？」

四位が笑顔をその老人に向けると、老人は一気に画面いっぱい
に近付き大きく口を開いた。

『馬鹿者——————！おぬしは何時間待たせれば気が済む
んじゃないっ！』

「あはは。そんなに怒ると血圧上がりますよー」

『誰のせいじゃっ！実継！！』

「半分は僕のせいですかねえ……ちゃんと花くらいは手向けますから」

そんな調子で始まった大佐と老師の会話は終わることを知らない。そしてそれを止める素振りを全く高遠は見ないどころか、涼しい顔で傍観さえしている。

「あ、茶菓子も付けますよ」

『死んどらんわっ！！』

呆氣にとられていると、ふとモニターの中の老人の目がこちらを向いて止まった。

そのタイミングを確実に逃すことなく高遠は先に口を開く。

「わたしの秘書です」

老人の目が次第に見開かれていく。

それを何事かと察した四位は口を閉ざし、振り返る。

『……名は……』

どこか恐ろしいものを見たかのような空ろな視線を返す。老師は呟くように再度「名は」言う。

「老師様。すでに契約済みです。シーグル政府軍の名のものに」
高遠の的を得ない返事にいささか老師は声を荒げる。

『名はなんと言うー！』

「凜」

なぜ。

そればかりだ。

アルファに、せめて平和だった貧しい暮らしの中に突如として爆撃され、孤児になり。死を待つだけの身のはずだった。

なのに、こうしてわたしは敵地で生きている。

なぜかこんな上等な男物のシーグルの制服であろう真っ黒なスーツを着込んで。

なぜ。

そんな驚愕した表情でモニターに映った老師が固まったかなんてわかるわけもない。

いや。

思い出そうとしなかっただけだ。

一家にとってひとつだけ秘密があった。『忘れたことにしなければいけない』という秘密が。

あのときから口に出さなかったのだ。

そもそもわたしはそれを知らない。生まれる前のことだ。せいぜ

い、タンスの奥にしまいこまれた、捨てるに捨てきれない一枚の写真とその裏に書かれた言葉を記憶の隅に存在させておくことくらいしかできない。

その秘密は確実に両親との尺度が違う。

『――凛様……』

搾り出した老師の声はしわがれ、掠れていた。

「老師。凛はわたしの秘書です。そちらに連れて帰りますので。四位さま」

「ん？」

「凛はここのところ身体を休めておりません。申し訳ございませんが凛を連れて戻らせていただこうと思いますが……明日はこのまま帰還ですね？」

「そ。ここには何も得るものはなかったが。宗ちゃんは違うか。老師？老師――……まあ、いつか。回線切って」

老師の顔はその瞬間、目の前から消え去った。
待たされた拳句、強制終了。凛にはなんだか不憫に思える。

「老師は何か知っていたようだね、宗ちゃん」

「そのようですね」

「宗ちゃんは何も説明してくれる気はないようだけど……知ってるね？僕は部下が秘密を持つのを快く認めている上司だけれど、たまにね、たまーに強制的に秘密を探ることがあるからそれだけは覚えておくといいよ。それとキミ」

何気なく話の流れで話しかけられ、あたふたと背筋を伸ばす。

「高遠宗司と契約したのなら、それ相応に知識を身に付けなさい。甘えたことは許さない。いいか、キミはキミであって、これから先は高遠宗司のものだ。なにがあってもキミは高遠宗司の影でなくてはならない。知識を身につけ、そして戦いにさえ赴けるように力をつける。それは最低限のことだ。血の滲むような努力を困難だと思わず、受け入れること。そしてなにがあっても高遠宗司を守る。キミが死のうと誰も知ったこっちゃない」

その言葉は紛れもなく、さっきまで瓦礫の山に座りつくしていた孤児であるわたしに向けられたものだった。

「シーグルはアルファとは違う。全く国の景色も形態も違う。キミはアルファを忘れる。シーグル政府軍の軍人の隣に立つのだから、覚悟をすること。待ち受けているものも、追ってくるものも全てキミの困難でしかない。宗ちゃん」

「はい」

「シーグルに帰還したらこの子を一ヶ月貸しなさい」

「……ひつような……」

「宗ちゃん。いいかい、宗司。軍人の隣に立つために、ただの秘書

という立場でさえ、誰もが何千人という人間を蹴り落しながらやってくるんだ。それにくらべ、この子には何も無い。宗司は自分という存在を甘く見すぎているよ」

四位はため息を落とすと前髪を無造作に掻き揚げ「まったく」呆れたように言う。

「本来、面倒なのは性に合わないんだよ」

「四位大佐！政府から回線です！」

若い青年が声を大にして叫ぶ。隣の部屋にずっとスタンバイしていたのだらう。布が開けられると青と白の制服が目についた。

「はいはい、やっと我に返ったか狸ジジイ。宗司、その子連れていつて。今日はもういいから。その子、怪我ひどそうだから医療班に見せること！これ以上ヒドイのキミのそばに立たせたくないからね」

「四位さま」

「……高遠宗司が初めて契約した子だ。少しは見込みがあると信じているよ」

初めて微笑んだ気がした。

「凜といったね。先に言っておく。高遠宗司はそう遠くない未来、五人議会の一員になる」

「えっ……」

「少佐で止めておくわけないでしょ。わざとおどろいた顔してもだめだよ、宗ちゃん。必ず引つ張り上げる。あの場所まで」

怖いくらい低い声で言い、四位は睨みつけるように目を向けた。

「凜。キミはシーグルで右に出るものがないほどの右腕になるんだ。そうでなければ——命はないと思え。今はキミの場所など空虚に近い。宗司がいて初めてキミの姿形が僕の前に輪郭として存在するくらいなものだ。宗司の隣を求めるなら、シーグルで一番の『影』になれ。二番目以降なんていらぬ。必要もない、宗司には」

背筋に悪寒が走った。

怖い。

涙は出ないが、恐ろしすぎて声さえでない。

ふと、そつと背中に力が込められ、ふわりと身体が宙に浮いた。

また抱えられたのだと気付いたが、身を任せた。力を抜き、高遠に身を任せたことにどこかほっとしたように高遠はため息を落とした。

「失礼いたしました」

布が下ろされ、畏怖に包まれた空間から身を出した瞬間、涙が溢れた。

「凜？」

その言葉はとてつもない安堵を生み出すようになっていた。

「泣くな。何も怖いことはないだろう」

「わたしは文字が書けません」

「そうか」

何事でもないように高遠は凜を抱えスタスタと歩く。

「書物も読んだことはないし、読めない字もたくさんあります」

「そんなもの必要なときに必要な程度読めば、読めるようになる。問題はない。わたしがみっちり教えてやる。読みも書きも。そんなことを今から言っていては仕方ないだろう」

半ば呆れたように言い、近くの少し大きめのテントの入り口をくぐった。

テントには二箇所、窓のようなスペースが開いていた。一箇所には琥珀色の月が見え、テント内を弱弱しいながらも安心できる程度の明かりに照らしていた。

「わたしは死ぬものだと思っていました」

「オレは死んでるものだと思ったが」

そつと身体を下ろされ、その隣に高遠が腰を下ろす。沈み込む感覚にそこがベッドの上だと知る。

今までにないようなフカフカの布団。

「足はまだ痛い。結構、腫れていたからな。捻挫だとは思って、冷やすものを持ってこよ……なにをする」

立ち上がった高遠の袖をぎゅっと掴んでいた。

「足は、だいつじょうぶつ……ですつ。しよっしよっ……」
語尾に高遠が鋭い視線を向ける。

「しろう?」

「しよ……」

ひとつめの契約を思い出した。

「そつ……そ、そつじつ、さまつ」

「なに」

その後の嗚咽の混じった声に高遠はあからさまに呆れたため息を吐き「ちよつと待て」さつさと離れる。たまに大きな物音を響かせながら再度登場したときには両手にツンと鼻につく匂いを漂わせた布を持っていた。

何も言わずにベッドに腰掛け、凜の片足を自分の膝の上に乗せ布を巻く。

「好き嫌いはないのか」

この際、骨ばかりのガリガリの足を触つてのことだろう、凜は顔を真っ赤に染め頷く。

片足が終わると左足に同じように布を巻いた。どうもいびつだが、気にはしない。ミントの匂いが鼻を抜け、火照った顔までも冷却していくようだ。

「わたし……オレはナスが嫌いだ。というより意味がわからない。なぜあれが食物なのか。あまり栄養価はないと聞く。あのスカスカ感は今も不明だ」

力説し終えたところで身体を崩す。

高遠は何気なく腰掛けたままの凜の腕を掴むと、力強く引っ張っ

た。

「きつ……」

悲鳴を上げようとして、悲鳴の上げ方などわからなかった。なすがままに高遠の隣に倒れこむ。

「凜は利口だ。老師の前でも臆せず自分の名を告げた。『凜』だと。オレにはまだできない。天下の五人議会のひとりである老師に『凜』と名乗ることは。凜、オレの名前を言って」

薄暗い部屋の中に静かに零れた声は安堵に満ちていた。

「宗司、さま」

彼は嬉しそうに頷く。

「凜。キミはオレとともにある」

琥珀色の満月の朧な光は高遠を柔らかく照らしていた。

「契約と、ともに、ですか」

「ああ」

「わたし、は」

青い目は綺麗だった。その前では何もいえなくなってしまう。

ああ、そうか。それを『美しい』というのか。

眩い光よりも遥かに幻想的な光景。

何かに似ているその色に、吸い込まれていく感覚。どこかで見た色。

「凜？」

じっと見据えるように見つめたままの凜を訝しげに高遠は覗く。

「わたしは、なんだ」

区切られたまま放って置かれ、催促するように急かす。

「生きていることが嬉しいのです」

高遠は驚いたように目を丸めた。

「わたしは、生きて今、あなた……宗司、さま、の隣にすることがとても嬉しいのです。四位さまがおっしゃられたようにわたしはなにもできません。だけど、宗司、さま……」

そつと頭上にのせられた手は自分とさほど変わらぬ大きさだ。高遠はそつと頭を撫で、自分の身体に凜を近づける。

何も言わなかった。

そしてそのまま、無音の世界は閉じていった。

高遠の袖をやせ細った指でしっかりと握り、寝息を立てている。高遠がそれを見ていることなど凜は知ることもない。

「『凜』」

誰にも聞こえないようにそつと口にする。

高遠が呟いた言葉はそれ以上に意味を持つ。高遠はそれを知っている。それが今、最大限自分を守る盾になるだろうことも。

「じゅめん」

自分自身が言った言葉に自分で驚き、そして気付いたとき嘲笑を自分に向けた。

寝返りを打った凜が夢の中で何かを言っている。

せめてそれが幸せな夢であるように、高遠は窓の外で朧に光る本物の月を見て初めて祈った。

4・右に立つもの

その国は砂漠の中にあつた。

それは有名な話で、どの国のひとも幼いながらに記憶に残る国の名前だった。だから、どんな粗末な教育しか受けていないとしても知っていることだった。

「シーグル……」

その呟きに返事はなかった。

数百年前に起こった大戦で星のオゾン層に穴が開き、その傷は現在も悪化の一路を辿っているという。なのにまだ国々間で戦争が起こり続けていることには問題がないのか、畑仕事や家事をしながら幼いながらにそう思った。

人類が結局考え作り出したのは、シールドと呼ばれる無色透明なもので国全体を包み込むということ。それがなかったらもちろん人類はとつくに滅亡していたはずだ。そうして残ったのは大国5国。

『アルファ』、わたしが住んでいた国。

そして、『ベータ』、『ウイザード』、『王龍』、『シーグル』。

特異の環境の中でその国々は独自の政治体系を持ち、それぞれの発展を遂げた。『アルファ』は他のどの国に比べても軍事力があり、負け知らずの国として『ベータ』を配下にした。そしてその手を『シーグル』に伸ばした。

どの国とも全く違う、そう思われ、どの国も見ぬふりをしてきた

国。

『シーグル』。それは『生命』という名をもった国。

そして。

「高遠さま？」

隣に座る高遠宗司は緊張した面持ちで振り返った。その薄く青い瞳はどこか空ろだ。

応接間のフカフカのソファに埋もれるように座っている。体重が軽いからか、どうも居心地が悪い。そわそわしながら高遠の顔を覗くと、高遠もまた違う意味で困ったような表情をしていた。

しかし、高遠宗司は最初に会ったときとは一変し、雰囲気は固くなっていた。

シーグルで一番高いこの建物に入り、青と白のシーグル軍の正装の制服を着たときからその感覚は抜けない。

隣に立つ人は同じ歳くらいだけど、胸に付ける勲章や階級を表す紋からもわかるように一国の『少佐』であるのだと再認識させられる。

「この椅子は座りにくいです」

それを紛らわせるように『わからないふり』をする。

「凜、お前は……」

首を傾げると、高遠は苦笑いしてもとの視線に戻した。その先に続く言葉は、予測できず、仕方なく眼下に広がる緑豊かで整備された町並みを見つめた。

予測していたなによりもその光景は違っていた。

シーグルもまた戦争大国であると聞いていた。アルファと同じように貧富の差が激しく、国のあちこちに焼きの原が広がっている、そう思っていた。

その面影は全くない。

緑は街に溢れ、高層の建物が点在し、なによりも街を歩く人々に陰りは見られない。違いは見た目だけでも充分挙げられる。

——アルファは……

「ここはMOTHERが統治している」

思い、結論付ける一歩手前で掛かった声にハツとして顔を上げる。目の前に立っていたのはどこかであったことのある風貌をした男だった。

考える間もなく、高遠はすかさず立ち上がり、軍独特の敬礼を行う。慌てて隣に立つと、膝が椅子にあたり、思わぬ衝撃音が立ってしまった。

高遠に迷惑をかけてしまう、そう慌てて深々と頭を下げる。

「じっ、じめんなさいっ。あのっ」

「……大丈夫かね」

「はいっ。しっ、失礼いたしました」

痛みに歪む顔を必死に冷静を装わせ、高遠の隣に背筋を伸ばして立ち上がった。

「『凜』と言ったね」

—— ああ。あのモニターに映っていた……ひと。確か……

「はい、老師」

四位という大佐にそう呼ばれていた。そう思い出し、付け加える。予想外に老師が目を見開き両手を伸ばした。そして触れる。

「あ、の？」

殺される、そう覚悟して震えたものの、まるで老師は顔を壊れ物でも触るかのように輪郭をなぞった。強くもなく優しくもなく、触れるか触れないかの距離を保ちながら。

困り果て視線を高遠に向けるが、彼は真正面を向いたまま表情を崩していなかった。

まるで。

それを真似しろ、というように。

だから。

笑った。

「凜、かね。声の——」

幻でもみたかのように、老師は一步慄く。

「こ、え？」

頭を振る。よくわからないが自分とは違うものを指されたような気がした。老師の目に映る自分もまた『そうであって違うもの』のようだ。

「老師。それは凜です。わたしが秘書にとアルファから連れてきました」

高遠の助けだった。

「あ……ああ。そうだった。そう聞いておった」
呟くように言い、力なく応接間のソファに腰をおろした。

「老師、凜を下げましょう。お目通りに呼んだだけです」
老師が慌てて顔を上げたが、高遠は次の言葉が老師から発せられる前に部屋の外で待機するように促す。

高遠に習っていたように一礼すると、凜はそつと部屋を後にした。

扉が軽くしまる音を耳にし、やっこのことで老師は一息つくと、並べられたお茶に口を付けた。

「……高遠少佐。お前の望みはなんだ」
低い声。高遠はそれが何を意図しているのかわからない、そんな様子で首を傾げる。

「あれは、声だろう」

「なんのことでしょうか。凜は凜です。声ではありません、現在の声の名など私を知る由もないと、老師は知っているではありませんか。五人議会しかそれは知らない」と

頭まですっぽり被るようにしていた黒いローブを落とし、老師はやつと顔を露にした。

「高遠、宗司、お前の望みは？どうせ四位大佐……実継の差し金じやろう？あのアンポンタンの」

気のせいかな老師は語尾を強く意思を込め、言い放つ。

「四位大佐はあなたの弟子でしょう。弟子の出方など老師ならお見通しのはず」

「宗司。お前、実継に似てきたぞ」

「それはご勘弁を」

「まあ、どちらにしても五人議会はあの『凜』で大騒ぎじゃろうな」

「そうですね」

高遠も近場に置かれたグラスを手取る。水滴の着いたグラスをそつと傾け冷たい液体を身体の奥まで届くように強制的に流し込む。

「先手を打てということか」

老師の言葉に高遠は何も返答を示さなかった。

「宗司。無言は肯定とみなすぞ」

「エムの回答は出ているのでしょう？わざわざ私にそれを求める必

要もないかと思いますが？そもそも私は一介の少佐です。しかも部隊長でもない。本来なら老師に名前さえ覚えられている存在ではないはずです。そんな配下の者の言うことなどお気になさることもないかと」

「ならば目立つことなどしなければどうだ？」

「それは無理な話です。四位さまの下にいる限り、目立ってしまったて仕方ありません」

ため息混じりに漏らした言葉に、老師は大声をあげて笑い出した。

「宗司、お前がその歳でこのシーグル軍事部に少佐として任命された時点で、お前は誰よりも目立っているぞ！実継がいようがいまいがな。シーグル始まって以来の１５歳での少佐だ誰もが疎み、そして目指す。それとひとつ訂正すべきところがあつたな」

老師の企み顔に高遠は訝しげな表情で「訂正？」返す。

「シーグル軍第一部隊長が空席になった」

「なぜ」

「ここがどこだと思っている」

「エムですか。エムが解任したと？」

「今回の声交代式で臨海線の部隊が壊滅された。どうやらアルファとベータの総攻撃にあつたらしい。尤も、問題はそこだけではないが、今までの臨海線部隊は長いこと勤めてきた。そろそろ限界でもあつた。編成を大部分代えることと決定している」

「昨日の四位さまへの通信も？」

「ああ。あのアンポンタンはさらりと言いのけたがな」

「……さらりと、ですか？」

「五人議會を再結成する。そのメンバーに四位実継が臨海線部隊副將軍として任命される。そう内示をした。そうしたら実継は言った『まあ、そうでしょうね』とな」

臨海線部隊、シーグル軍最強の部隊。一番過酷な他国間との戦いをほぼ毎日繰り広げている、戦いだけのためにある部隊。

「四位さまが……臨海線へ……」

「さすがにショックか？」

「いえ。いつかこうなるだろうと」

老師は頷く。

「離任および着任式は一週間後だ、宗司、お前は四位の推薦もあった第一部隊長・少佐の席に就く。今日呼んだのは、内示もあつてだ。疲れているだろう、今日はさっさと退庁でもして休め」

老師はおもむろに立ち上がると、外していたローブを頭から被りなおす。高遠は足早に扉まで向かい一礼しながら老師を送り出した。

「いいだろう。五人議會は解散しよう」

そう言った老師の視線の先には、居場所がいまだわからず居心地悪そうに立つ凜の姿があった。

「凜」

高遠に呼ばれ、凜は老師に頭を下げる。

「凜」

今度は低い声。老師の声だ。

「高遠宗司につくなら死に物狂いで勉強をしなさい。そして状況把握を瞬時に行うこと。きみはこの国で一番の軍師の右腕にならなければいけない。それも短時間でだ。長時間掛ければ、誰でも努力次第である程度のところまでいけるだろう。だが、それでは遅い。お前は始まりがない。そして終わりもまたない。できることを時間を無駄にすることなく吸収すること。それはお前にかせられた使命だ。かつて、声だった青年が『使命は全うすべき』だと言っていた。死ぬまでがその使命だと」

老師は見つめる。

「お前は努力以上の結果を生み出さなければならない。永遠にこの世界に名を残さぬものとして」

名はすでにない。『凜』など中身を伴わない名前だ。名前に未練はない。一生自分の名前など口にすることもないだろう。

口に出す言葉が見つからず、頷いた。

「そうか。わかった。取り合えず、現五人議会には話を通しておう。高遠少佐」

「はい」

老師は再度、凜を一瞥し、そして床をすべるようにロープをたなびかせながら凜と高遠の視界から消えて行った。

「凜」

安心する声にやっとのことで顔を上げる。

「変な顔しているな」

そう言った高遠の方が、まるで迷子の子猫のような表情だった。

「たつ高遠さま。お、お聞きしたいことがあります」

小さな声にも高遠は「ああ」頷くと、歩き出す。

「あのつ、えつと、どちらへっ」

「私の部屋だ。執務室がある。それといくつか部屋を案内しておく。ここは一度迷子になると、元の位置に戻ってくるのさえらい時間がかかるからな。まず、この建物ないの場所を覚える。それと、いちいちびくびくしないでいいから。せめてオレと話すときは、そんなに緊張しなくていい」

スタスタと歩き出した高遠のあとを小走りに追いかける。やっとのことで高遠のすぐ後ろにタイミング良くつけたことに満足し、胸を撫で下ろす。

中空の建物だった。

ほぼ全面ガラス張りの中空の空間には、太陽の光が燦燦と注がれて、暖かな空気が流れている。

「凜？つて、わっ、止まれ！」

不思議そうな声がして顔を上げると、いつの間にか足を止めて振り返っていた高遠に体当たりしてしまう。

「すっ……失礼しました！」

ふわりと頭の上にかぶさる感触がして、顔を上げようとして……強制的に下を向けられた。

「上げるな。ひとが誉めてやってるんだ、黙って受け取れ」
「誉めて？」

頭にのった手が軽く頭を弾く。

それじゃあ、まるで小さな子があやされているようじゃないか、と一瞬思うが、それでも『誉めて』なんて言葉生まれて初めてだ。嬉しくなる。

しかし、疑問がある。

「あの、高遠さま」

無言。それでも視線がかみ合っているところを見れば、それは続けるということだろう。

「わたしはなにか誉められるようなことはしたんでしょうか」

ドジはしたが、それ以外に主だった行動はしてしまっていない。

「老師を覚えていた」

「それは、昨日、四位大佐が呼んで……」

「藤波元帥老師。この国の政を二番目に決める諮問機関だ。そのメンバーのひとり。ああ、ちなみに元帥はれっきとした名前だから」

「ふじなみげんすい……老師」

「19階へ」

『かしこまりました』

機械的なアナウンスが戻り、いつのまにかついさっき乗った『エレベータ』という機械の箱の中にいることに気付く。四方がガラス張りで、さすがにこの国で一番高い建物だということもあり、随分遠くまで見渡すことができる。

「すごい……」

「綺麗か？」

「はい」

即答に高遠は複雑な笑みを浮かべた。

「そうか……綺麗か」

アルファに比べ物にならないほど。

「シーグルは他の国とは違う体系をとった国だ」

真剣な声に外を眺めるのをやめると、高遠の背中越しの声を聞いた。

「MOTHER、老師が最初に言ったように『MOTHER』というコンピュータがこの国の全てを動かしている。今日越えたシールド第三膜に至るまで、全て『MOTHER』があって初めて機能する。これはどこの国も同じだろうが、たったひとつ明らかに他の国と違うことがある。政治にもMOTHERが関与していることだ。関与、それよりも強い。外との戦いも、そして中の統治も全てMOTHERが演算し、出した答えに沿って、オレたち軍事部が動く。

この国は『MOTHER』が動かす国だ。コンピュータが全てを決める国、それがシーグル」

無音のままエレベーターが止まり、高遠がそのまま歩き出す。何度か中空に吊られた箱のような機械を後ろに見返ししながら、凜は高遠のあとをぴつたりと着いて歩く。

簡単な説明を加えながら『この階は全て少佐の執務室、程度のものだが』ふたりは歩き回り、やっとのことで最後の部屋へと再度エレベーターを使い降りてきた。

「簡易的な客間なんだが、ここだな」

高遠が壁についたプレートに手を翳す。

「あとで凜の指紋照合に変えなければいけないな」

不思議と見とれている間に勢い良く横にスライドしたドアの中へと何の躊躇もせず、高遠は足を踏み入れる。

「あの、こ、こは？」

「凜の部屋」

「え？」

「さつさと入れ、扉がひとを感知して閉まらないだろう」

半ば呆れたように凜の腕を引っ張り中に入る。

「初めて入ったが結構、綺麗な作りだな。オレがすんでもよさそうだ」などと言いながら高遠はシャワールームを開け、収納を勝手に探索し、ふと振り返った。

そこにさっきまでいた凜の姿はない。

「なにをしている」

凜は入り口のところで蹲り両手で頬を押さえていた。

「どこか痛いのか？」

足でも痛むのかと問いかければ無言で首を横に振る。

「なにか気に入らないか？しかし急なことだったからそんなに……
ああ、服か！服は大丈夫だ。軍の秘書官が着る服は凜のサイズに合わせて何着か用意させてある」

それはそれで聞き捨てならない言葉も含まれていたが、凜は顔を上げると再度横に振った。

「なぜそんなに赤い顔を……」

「ね」つ、とでも言おうとした口を凜が立ち上がり塞ぐ。

「こつ、こんな部屋がわたしの部屋なんてつ、あのつ、なにかのまちがいなんじゃないでしょうか」

真剣に、真っ直ぐ見つめられて、高遠は一瞬ののちに、笑い出した。

高遠が表情豊かにするのは凜は初めて見る光景で、どちらかというとその方が驚き、自分がいままで驚いていた光景などすっかり忘れていた。

「りつ、天然少女め。間違いなく凜の部屋だ」

「でもでもあのつ、部屋がたくさんあります！あ、もしかして同じ部屋の方が……」

「いさせるわけないだろう」

高遠はどこか怒った調子で言い切る。

—— いるわけ、ではなく『いさせるわけ』？高遠さまは時々不明……

「それはシャワールーム。そっちは服をしまうクローゼットだ」

謎の言動をさっさと忘れ端的に凜を引っ張りながら部屋の説明と「そのようすとシャワーの利用方法もしらないな」呟きながら機器の説明をする。

「ここがわたしの部屋……」

窓からは光が差ししている。

オフホワイト柔らかな色調のワンルーム。壁際にはどこからみてもフカフカの布団が掛けられたベッド

ドが置かれていた。今まで寝てきた木のベッドとは比べ物にもならない。

「なにか必要なものがあつたら言え」

感嘆の声を漏らしたことに満足したように高遠はいつもの無表情に戻る。

なにかのあたる音がし、凜が音のする方に慌てて振り返ると、高遠が耳に小型の機械を接している。

「高遠です。はい。老師から？ええ、伺いました。えっ！何故で……でも凜はわたしが……はい。はい」

高遠は眉間に皺を寄せ凜の顔を見る。

「これからすぐに地下2階の図書閲覧自習室で凜の勉強を始める。さっき行った図書室の隣だ、場所はわかるな？」

「はい」

小型機械を耳につけながら高遠は凜に「そこへ行きなさい」指示する。

「はい。行つてまいります」

パタパタと軽い足音。扉がスライドし、開く音を高遠は背後で聞き、小型機械——携帯電話に意識を戻す。

「四位さ……」

再度のスライド音に振り返る。

高遠が与えた黒いスーツを身に纏った、どこからどうみても少年がそこに立っていた。

「凜？」

「ありがとうございます！宗司さまっ」

大きな声で言い、凜はくるりと身を翻す。肩上まで切ってしまった黒髪がサラサラと揺れ、それを最後に扉が閉まる。

『宗司？宗ちゃん』

「……四位さま」

『なに？ちゃんと凜はこつちきた？昔、僕についてた先生を呼び起こしといたからねー、大丈夫。きみの隣に立つのにふさわしいのにしてみせるよー』

「四位さま」

『なに？』

「……………いえ」

『んじゃ、あとで五人議会の報告あるから会議室にね』

「……………はい」

強制的に切った。いつも高遠は相手の電話が切れたのを確認してから切ることにしている。それを気付いていない四位ではないだろうから、あとで追求は免れないだろう。

それでもその光景をそれ以上、穢されたくない、そんな風に感じた。

脳裏に残った凜の満面の笑みを。

4・右に立つもの（後書き）

遅くなつてすみません！

5・陰影の月

凜はそつと扉を開けた。

少しあけた扉の隙間からは人の気配も窺えず、唇をキュツと結ぶと足を踏み入れる。

「さつさと座りなさい」

声のする後方を慌てて振り返って、扉を閉める背の低い老人の姿をやつと視界に入れた。

（気配、なかった。）

凜が驚いて立ちつくしているのにも関わらず、老人はさつさと椅子に腰掛ける。

「時間がない。四位様から伺っておる限りだと、お主は高遠様の秘書にはふさわしくない。高遠さまどころの話ではないな。だったらそこらへんにいるシーグルの子供でもつれてきた方が、どれだけ役に立つか。一週間で、秘書試験を受けるものと同じレベルに？寝ずにやっても無理だ。バカにするにもほどがある」

辛らつな言葉と睨むような視線を浴びせられ、凜はその場に下を向いて留まった。

「だが」

一旦、区切る。

「四位様の意図は本来の目的とはずれている。このままでは高遠様とフェアではない」

ため息。

凜が顔を上げると、やはり睨むような視線が突き刺さる。

「お主に猶予をやるう。5秒だ。その間に答えを出せ、簡単だ。高遠様の秘書としてこれから一生、お仕えする気があるか否か。カウントを開始する。5……」

「ありますっ」

カウントを開始して早々、叫んだ。

「あるんですっ」

「その理由は復讐か？」

「……え？」

「お主、戦争孤児だという。先日四位部隊の急襲の時に両親を失ったと聞いたが？違うのか」

「い、いえ。その……そのとおりです」

「四位部隊にいた高遠宗司に恨みをもつのは自然なことだ。もし、高遠宗司を貶めるために秘書になろうとするならばこの場で死ぬがいい」

そう言つて、どこから出てきたのか、老人の左手には短銃が構えられていた。

「それでもシーグル政府軍の人間だったのではな」

圧倒的な威圧感。

恐怖より先に、そしてそれよりも勝るもの。

「あ、あの……」

やっと搾り出したように呟いた言葉は弱々しく、目の前に座る老人にでさえ聞こえたかどうかさえ定かではないくらい小さな声だった。

老人の目が微妙に動き、凜へと意識が向けられる。

向けられた強い意識に言葉を失い、身体を竦める。しかし、老人がこのまま時間を無駄にすごすつもりなどないことはわかっていた。いつの間にか、短銃のロックが外されている。それがなくても、ずっとこのままではいようと凜の脳裏にはそんな考えは毛頭なかった。

（なにもわからない。）

『高遠宗司』。

実際、あの人に会ってまだ二日しか経っていない。あの、荒地で出会い、背負われ、つれてこられた。無理矢理ではない。ちゃんと『契約』を交わした。自分の意識の知るところで。

「ふくしゅう？」

呟いてからその言葉の意味が頭に流れ込む。いままでそんなこと考えたこともなかった。

そういえば。

敵地、と、自分の陣営を高遠は称していた。いままでなかった復讐という感情がこれから芽生えるのだろうか。だったら、この老人にさっさとこの命などここで消してもらったほうがいい。

あのひとがこの世界からいなく……

そこまで考えて凜はふと考えるのを止めた。

これは、なに？

高遠宗司、あのひとが世界からいなくなる……

この、痛みは、なに？

「時間切れた、凜」

「……え、あのっ」

「やるならやるのみ」

再度、ロックをかけると老人は短銃をさっさと懐に戻した。

「復讐など考えていないことはわかっている。だが、どうしても理由がわからなかった。お主にしても、そして高遠様にしても。もし復讐など意識に混ざったら、わたしがすぐにでもお主を殺す、安心しなさい」

殺すから安心しろ、冷徹な表情は誰かに似ていた。

「あ……なぜ……」

「自分で答えを出さないと意味がない理由だ。それもわたしは構わないと思っている。その痛みはな。人間の人生というものだ。このシングルで一番尊重されるべきもの」

短銃の代わりに今度はノートを開く。

「四位様の意図など幼稚なものよ。あわよくば、程度の。四位様にしては手ぬるいやり方だ。のってあげるのもいいかと思ったが、無駄だな。さっさと始めよう」

始める、と言われ、凜は慌てて老人の前の席に着いた。

「着任式までの一週間の間にとりあえず、知識面は固めよう。銃の使い方や戦地での戦法はまだ先でも間に合う。出身地は、アルファと聞いている。文字の読み書きは？」

目の前に置かれていたのはペンと紙の束。

「どうかしたのか」

机上を見つめたまま感嘆を漏らした。

老人は訝しげに尋ねる。

「かつ、紙は貴重なものです。ペンも」

アルファの自宅でさえ、街へ行った帰りに新聞などの切れ端を破り持ち帰ったものを使っていた。ペンでさえもそうだった。それなのに、目の前には光沢のある持ち手の真新しいペンと、真っ白な紙が束で置いてある。凜にとってそれは初めて見るものだった。

「最初に言っておく。心に留め置きなさい」

一瞬おいて、ため息混じりに聞こえた声に、覚悟したように紙とペンから視線を上げる。目の前の老人は目を細め、持っていたノートを机に置いた。

「凜、アルファのことは全て忘れなさい。それは大切なものかもしれない。だが、ここではお主を殺すことでしかない。お主は高遠宗司の秘書、凜。それだけだ」

同じ意味合いのことを最初に四位、老師、そして高遠からも言われていたことを思い出す。

「許される秘書は一人。ここシーグルでは事務作業だけではなく、仕えるものが戦地に立つことになったとき無条件で影として部隊の指示を行うことが許されている。秘書と称しても、どれだけの力量のものが佐官の隣に立つかによって、生死さえわかる。凜、お主はさっきのその瞬間で、わたしにとっては高遠少佐の命そのものになった。わたしは高遠少佐を殺すわけにはいかない」

あのひとの命。

わたしの命を契約した。

こんなちっぽけな命とともにある少佐の命。

「主のその理由が何であれ、今は。そして今、主がその理由に気付かなくとも。それはこのシーグルにとって決定打とも言える高遠少佐の命だ」

「は、はい」

「顔を上げなさい。お主は下ばかりみているな」

「……はい」

顔を上げ、真っ直ぐ老人の顔を見る。自分と同じようにシーグル秘書官の制服を纏った歳をとった男は強い意思のもとに頷いた。

「わたしは五人議会、藤波元帥老師の元秘書官、時雨澤喜三郎^{しぐれわ きざぶろう}。凜、お主は」

その名前を一度、口に出してなぞる。

ついさっきあった老師の元秘書官。この畏怖は、間違いではない。五人議会というシーグル政府の中樞を勤める老師とともに戦地に立った、ブレイン。

「わたしは、凜、です。高遠宗司さまの秘書の凜。それだけです」

ブレのない言葉に時雨澤喜三郎は再度頷いた。

「では、凜。まず、右耳でわたしの話を聞きなさい。右手でこの表の文字を覚えるように書き続けるなさい。文字はしっかり発音も覚えること。アルファと発音が少しだけ違う。わたしはこれからシーグルの歴史と現在の仕組みを話す。この表の文字をわたしが発音したと同時に指で示すから、それで発音を覚えなさい。辞書はまだひけないだろうし引いている時間もない。わからない言葉は自分でわかる文字で構わないから書き出しなさい。30分を一区切りとして10分質問を受け付ける。書き出した文字をシーグルの言葉で話なさい。発音ができるまで質問の答えはない。それと同じ質問は受けない。では始める」

説明だけでも随分、難しいことを言われた気がした。

右耳で歴史を聞きながら、同時に単語もマスターする。

必死にその言葉を追った。

何度も、何度も発音を直され、途中で声が枯れ果てた。やっと水で喉を潤し、単語を反復して練習する。

文字はなんとか順に書けるようになった。

食事時でも時雨澤は一緒にする。マナーを少しでも破ろうものなら、その食事は取り上げられた。食事の材料を過半数以上当てられなければ、逆に量を増やされた。栄養素を答え、お茶の入れ方を習った。

一日はあっという間で、月が真上に昇る頃にやっと時雨澤は退席した。

両腕を伸ばす。

ペンだこなど今までできたこともないものが指にできている。豆になり潰れたところもあった。

「ひりひりする」

呟いて、静けさを増した部屋を見渡す。

自習室は誰もいない。そもそも貸切になっているのか、誰もこの部屋に訪れることはなかった。

「シーグル、生命という名前を持った、唯一、コンピュータにより政治を動かされる国」

遠かった存在は、目の前に、そして自分の周りになっていた。

目を瞑る。

最初に浮かんだのは、青い目だった。

「あの色は……海」

深い深い海の底のような色をした瞳。

「海の色」

色素の薄い銀色の髪は瞳の色が滲み出たかのように青みがかっている。

「高遠宗司さま」

胸の奥に涙が溜まった。

「あのひとのために」

目を開けた。

目の前にはまだ白く掛ける場所の残った紙の束がある。時雨澤が用意してくれたもう一本のペンも、まだ手付かずにある。

「あのひとの隣に立っていたい」

自分のいないところで高遠が危険に晒されていくのは嫌だった。

昨日今日の出会い、それだけ。敵、仇、そんな関係だけのはずなのに。

時雨澤に言われるまで、敵だと、仇だと、そんな区別が頭の中にはなかった。高遠もそれを強調したりしはしなかったし、老師も、そして四位も自分に対してそんなことは言わなかった。経歴は知っているはずなのに。

「あのひとがこの世界からいなくなるのはいや……」

考えただけでも涙が出てきそうだった。

もし、高遠に会わなかったら、こんな思いなどすることはなかっただろう。あのとき、あの場所で、あのまま死んでいたはず。

出会わなかったかもしれない事実など考えたくもなかった。

「わたしは高遠さまの隣に。なにがあっても」

「この命が…… 契約が高遠さまに切られるまで。生き残るのは高遠さまおひとりだけでいい」

単語の反復練習を再開した。

切られるまで、切られては困る。

隣にずっといると誓ってしまったのだから。

5・陰影の月（後書き）

ハガネの蝶 - 連載中です。こちらもよろしく願います。

6・存在意義

一日中、ほとんどの時間を自習室で時雨澤とすごしていた。

実際、高遠が用意してくれた部屋に戻るのは早朝、着替えに戻るくらいで、ベッドにもいまだ横になっていない。

あの予想外のふかふかベットに座ってしまえば、一気に緊張感が解けること、間違いなしだ。

時雨澤の猛特訓、鬼教育のおかげで、背筋を伸ばし、真っ直ぐみえることを覚えた。

もちろん文字の読み書きは2日目にはマスターさせられ、発音も咄嗟に対応するとき以外は、時雨澤のお墨付きも得ることができた。

「なんにしても、まだシーグルの子供程度だ」

厳しい目は変わらず、時雨澤は「今日の分だ」と言って、何回かにわけて書物を運び込んだ。

「はい」

教えられたとおり、無表情のまま返事をし、渡された書物を開いた。

「ああ、凜。今日はわたしは藤波元帥とともに会議出席だ、戻りは夕食頃になるからひとりでやっていなさい。わからないことがあったらそのときに聞く」

「はい」

返事を確認し、扉のロックに手を翳したところで、しまったというように、顔を顰めながら時雨澤は振り返った。

「お主の場合は、『勉強を怠るな』ではなく、『食事をしっかりと摂れ』だな。食堂でひとりでもしっかりと食えること。いつものようにわたしの名前で頼んである」

「はい」

頷いたのを確認すると、時雨澤は急いで部屋を後にした。

時雨澤が食事に関して念を押したのにはわけがある。凜は学ぶことにおいて全て楽しくて仕方ない。時雨澤が目を見れば休まず本を読み続け、食事など忘れて文字を書き続けてしまう。すでにそうして二人は夕食の時間に間に合わず、夜食として夕食を食べ続けているのだった。

いつか、時計の針は昼を指していた。

途端、古式のベルがけたたましく部屋に鳴り響き、熱中して読み進めていた本から、さすがの凜も顔を上げた。

いつのまにか机の上に時計が放置されている。時雨澤が念には念を入れ置いていったのだろう。止めるためのボタンを押し、壁に掛かった大きめの時計に目をやった。

「あ、お昼……」

早朝、時雨澤が念を押していったことを思い出す。ここで食べな

ければ、時雨澤の名前で指示されている分、すぐに時雨澤の知るところとなってしまうだろう。凜は慌ててブックマークをし、部屋を後にした。

ひとりで廊下を歩くのは初めてのようなものだった。

すれ違う青年たちが自分を見てヒソヒソと顔を見合わせる。

「ちっこい秘書だなあ」

「頭も幼稚だったりしてな」

聞こえよがしに言われ、駆け出したくなるのを必死で堪えた。廊下を走るのは緊急時以外厳禁だ。

黒い制服の背広を翻しながら壁際を目立たないように歩みを速める。

「いつから子守もするようになったんだ？」

「そりゃ悪いだろ、政府軍第一部隊長になられる高遠さまの秘書さまに」

クスクスと笑い声。

「秘書さまは秘書試験さえ受けないほど優秀なんだ、オレたちとは出来が違うんだよ」

「受けられないほど、だったたりして!」

数名の笑い声が耳に届いた。

できる事なら、この真っ赤になった顔を下に向け、この場から走って逃げ去りたい。

滲み始めた視界に、溜まりだした涙に、零れそうな雫を必死に上を向いて耐えながら、それでも言われた通り食堂へ向かった。

「ぼくー、一緒に食堂、行つてあげようかあ？」

目の前に突然現れた青年に肩を掴まれる。いやらしい目をしていた。

「おいおいおい、大丈夫かよー。あんまりやると少佐に切られるぜ？」

青年の相方らしき男が隣でニタニタと笑う。

「あのっ、わたしは急いでいますので」

精一杯、シーグル語で話す。

「へえ？ちゃんと喋れるんじゃない？ぼく」

「あつたりまえだろ、お前、バカ？」

「あん？だって、高遠さまの秘書につく奴って奴隷だって聞いてたからさ！」

その返事に二人の目の色が変わった。

背中に流れる冷や汗に、凜は一步後ずさる。トン、と何かにあたり、慌てて振り返る。

「しつ失礼いたしました」

「いや？わたしが前を向いていなかったから。それにしても今時の研修生は暇なのかな、こんなところで随分、楽しそうだね」

17、8歳の眼鏡を掛けた少年が笑みを向け、右手には書類を抱えて立っていた。彼を包む黒い制服は間違いなく『正規の秘書官』であることを現している。

「橘……空さまっ……」

一気に顔色を真つ青に変え、さっきまで凜に絡んでいた青年たちが交互に挨拶を交わし、走り去って行く。その背後に向かって少年、橘空は、一応、全く意識を込めず、その通る声を響かせた。

「緊急時以外は廊下を走るのは厳禁だったはずですが」

無論、皮肉はたっぷりこもっている。

「さてと、あなたが凜ですね？」

ため息をつきながらも頭の上から降ってきた声は、先ほどの青年たちに向けられたものより、随分優しくなっていた。

「はっ、はい。あの、ありがとうございます」

（助けてくれた。）

「いえ、たまたま通りかかっただけですから」

さつきまでヒソヒソと話していた連中たちはそそくさと姿を消していた。

「食堂でしょう？わたしも行くところです。ご一緒してもよろしいですか？」

「は、はいっ、あのっ……本当にありがとうございます。橘…空さま」

隣を歩き出した空は一瞬、驚いたような視線を返す。

「わたしの名前を？」

「はい。さっきの方たちが……あと、時雨澤さまから政府軍関係者の方の顔と名前は覚えるようにと」

「ああ、そうですね。それと、さきほどの者達のことには気になさらずに結構ですよ、ただの癖みです」

橘空は「あはは」と乾いた笑いを付け加えた。

昼食時間も終了間際だからか、食堂の人影はまばらだった。

一番窓に近い席に二人は対面して座ると、食事を始める。

「……黄色野菜。大豆、蛋白」

いつものように凜は呟くように一通りのメニューの素材と栄養素を声に出してから「いただきます」手を合わせる。野菜に至っては栽培状況を口に出し、お茶については一通りブランドを思い浮かべた。

「……いつもそのように？」

不思議そうな声に凜ははっとして顔を上げる。

いつもの癖でやっていたが、相手は時雨澤ではなかった。きっとうるさかったに違いない。

「失礼しました……あの、うるさくしてしまつて」

予想に反してにこやかな笑顔が返ってきた。

「いえ。しかし、さすが四位様の教育官だった時雨澤さまだけあります」

「お知りあいですか？」

言っておいて、当たり前前に気がついた。目の前にいる奎もまた、時雨澤と同じ『正規の秘書官』なのである。

「ええ。わたしのお仕えしている時雨澤さまのおじい様ですから、何度かお目にかかっております」

（……間抜けだ。そういえば橋奎さまの左官は時雨澤忠徳中佐。

時雨澤喜三郎さまの孫。)

「勉強熱心なのですね。いいことです」

ふと、さっきの『奴隷』という言葉が脳裏を掠める。

「わたしは……」

「凜、あなたは高遠さまが直接お連れになった方だと聞きました」

「え？あ……はい」

声はなかったが空は頷いたようだった。時雨澤から、相手の目から視線を外すな。下を見るなど言われてはいたが、この少年の前では自分が恥ずかしい存在であるとは思えてならない。

彼のようなものたちがこの軍にはたくさんいるのだ。遥かに抜き出た人たち。

「さきほどあなたをからかっていたのは、まだ秘書試験も受けられない者たちです。シーグル政府軍は少佐以上の地位につくと、1名のみ自分の指名した『秘書官』をつけることが許されています。『秘書官』は戦地に立ったとき、時と場合により『影の指揮者』として隊を動かす指示権が与えられています。ですから秘書官は佐官たちにとって命そのものです。わたしは、その能力は信用とともにあると考えております。悪口や憎言からは信用は得られません。彼らはそれに気がつかない限り、永遠にあのままでしょう。それと、『秘書官』という地位はシーグルでは結構、倍率が高いんですよ。それに隊が編成しなおされない限りあまり佐官が変わりませんから、秘書官の枠もできません。しかも、あなたは注目の四位部隊の中のさらに注目どころの『高遠少佐』の秘書です」

自分の話題になり、恐る恐る顔を上げた。

橘空は真剣な表情で突き刺すように見つめていた。

「高遠少佐は今までご自分で誰かに関わることを避けていらつしやうたように思います。史上最年少での少佐。高遠様もまたあなたと同じような立場でしたから……尤も、今回の人事で第一部隊長の席につかれれば少しは減るでしょうが。わたしがこんなことを言うのもおかしいかもしれませんが、あなたはこれから相当な難関に立ち向かわなければならなくなるでしょう。だけど、決して、負けないでください」

「え？」

「あなたは秘書官になるべくしてなる」

今まで渦巻いていた何かがその一言によって、消滅した。

橘空は、食事を終え、食堂を後にする際に微笑みながら付け加える。

「わたしの方が秘書としては少し先輩です。時雨澤さまには劣りますが、なにかあったらおっしゃってください。力になれることもあるでしょう。わたしは、どうしてか、あなたに高遠さまの隣に立っていてほしいと願うのです。時雨澤さま……忠徳さまからあなたを高遠さまがご自分でアルファから連れてこられたとおっしゃってか。一度、あなたに会ってみたいと思っていました。今日はあの方々にも感謝しなければなりませんね。それでは失礼いたします」

「あ、は、はいっ。ありがとうございました」

深く頭を下げている間に安定した足音が消えて行った。

思う。

彼のようになろうと。

それでも、涙が溢れたのは、まだ自分が何もできない存在であると確信してしまったから。

（なにもできない。）

「忠徳のときの奎だな」

「はい」

やはり今日も時間外の夕食を摂りながら、顔を思い浮かべるように時雨澤が言った。パンを半分にちぎり口に放り込む。凜はいつも彼の190cmを超える身長、体格がこうして出来上がったのだと納得する。

それでも自分に銃口を向けたときの素早さは、体格に似合わない。時雨澤もまた本物の軍人なのだと思う。

「奎は忠徳にはもったいないくらいの秘書官だ」

普通は逆なのではないかと思うが、どうもこの本物の軍人たちは血縁者だからといって臍盾にはしないようにできているらしい。時雨澤は空を称賛する。

「あいつは忠徳の隣に立つたために秘書官になったんだ。変わり者だな。あれくらいできたら部隊長は与えられるだろうに」

「あれくらい？」

「ああ。シーグル政府軍には五人議会が認定した射撃手がいる。まだ過去にも10人しか認定されてないんだが、空はそれを持っているはずだ。それもまた忠徳のためだと言うが……まったく、何がどうしてあいつがそんなにいいんだか。四位様だったらまだわかるがな」

若干、呆れたように言い、メインを平らげると自分の皿の片隅にのせられた一帯に目を移す。

「お主は食べなさすぎだ」

「す、すみません……」

凜が初日からあまりにも残すので、先に凜が食べられない3分の1は時雨澤の皿にのることになっている。

「それと、チェックしたが、大体、今のところマスターしているようだ。今日は寝ろ」

「えっ……でもっ、まだ今日分の本が残っています！」

呆れたようにため息を吐く。

「休養も必要だ。倒れたら今までの分が無意味だ」

「でも」

「部屋に戻れ、とりあえず、今日は。2日間、徹夜しただろう？あれだけ休憩もはさめと言ったのに」

返す言葉もなく俯く。

「でも……」

「凜」

「……はい。あの、でも……」

「頑固だな……まったく」

昼間の声が脳裏を過ぎる。

言葉も喋られないのではないかと――。

秘書試験さえも受けられないほど何もできないのではないかと――と。

――奴隷ではないかと。

すべてが自分のことで。

情けない。

早く。

早く。

早く。

結局、時雨澤に先を越され、自習室の鍵を閉められてしまい、部屋に戻るしかなくなっていた。

「もっとももっともやらなければいけないのに……」

誰もいない廊下に小さく呟いた声が響いた。

時雨澤の言うことは尤もだ。集中力が微かに欠け始めているのは感じていた。

廊下の壁になるべく沿って歩かないと、自分がすっかり真っ直ぐ歩いているのかもわからなくなってしまうときがあるのも自覚していた。

中空の建物に月の光が注ぐ。

シーグルにある本物の月と、シーグルが作り出した月。ふたつの月の光は臍に廊下を、自分を照らし出す。

いつも服を着替えるためだけに戻る部屋には、無論、貴重品などなく、鍵をかけることはない。いつものようにそのまま部屋へ戻る。カーテンさえも引いていない部屋は薄暗かったが、ふたつの月はし

つかりと優しい光を部屋に入れていた。

「わたしの部屋」

静かだ。

高遠に連れて来られて、すぐに時雨澤との勉強に入ってしまったため、この部屋の中をしっかりと見たこともなかった。

あせる気持ちもある。

けれども、時雨澤に公認された休みを、あのベッドの上ですごせる、そんな誘惑もないわけではない。

できれば、今日起きたことは全て忘れてしまいたかった。

「……どれい、じゃない」

言って、涙がとうとう零れ落ちた。

「つく……ちがうつ……どれいじゃないもつ……んっ……」

小さな嗚咽を漏らしながらベッドへと向かう。

「やっと帰ってきたと思ったら、なぜ泣いている」

「……え」

「なぜ泣く」

「……高遠さっ……」

高遠宗司が、ベッドに腰を下ろし、薄暗い中書類の束に目を落と
していた。

顔を上げる。

月明かりに照らされた薄い青の目が見つめた。

「時雨澤からやっと解放されたか。というより、なぜ泣いている」

青と白のシーグル軍の制服を着たまま、慄然としない表情を高遠
は向けている。

「高遠さまっ、なんでここにっ……」

驚いた拍子に涙は止まっていた。けれども、残った最後の一滴が
目から零れ落ちる。

「鍵が開いていた。無用心だ」

凜は頭を傾げた。

「鍵は掛けたことはありません」

「なに!？」

「あの……扉が閉まるのでそれでいいかと」

「いいわけないだろう！そうだ、あのあと凜の指紋認証にしようとして……ああ、四位さまに呼ばれたままだったから……ああ、明日朝一番で凜の指紋認証にしよう。わたし以外に誰かがこの部屋に入ったらどうするつもりだ、まったく」

高遠が勝手に入れるだけでも問題かとは思うが、凜はとりあえず頷く。

今度は高遠の眉が寄った。

「なぜ、笑う」

笑う？笑う……

このひとに名前を呼ばれたから、だ。その声で。

「さっきまで泣いていたのはなぜだ？言え、凜」

首をもげるんじゃないかと思うくらい横に振った。

高遠がむっとした。と、思った瞬間、頭がぐらりと揺れる。

「り、凜！」

あたたかかった。

そつと目を上げると青い瞳が手に持った資料を見つめている。

トクン、トクンと聞こえる音は自分の音が、それとも彼の胸の音か。

「あまり変わらないな。まだこんなに細いのか……」

ベッドの脇に置かれたサイドテーブルに資料を放ると、高遠は勢い良くそのままベッドに横になった。

「きゃ……」

一瞬、驚いたように高遠は目を丸め、そしてそのまま俯く。

「高遠さま？」

ふたりしてベッドに横になる。背中に回された高遠の腕がぎゅつと締めた。

「まだこんなに細い。食べてないのか？」

高遠は小さく言い、顔を上げた。どこか顔が赤い気がするが、気のせいかな。

「食べてます」

「時雨澤が半分は残すといっていた。無理してでも3分の2は食べることに、契約だ」

「……はい」

「ところで二つ目の契約を忘れてるぞ」

青い目がじっと見つめる。

「宗司、さま」

微笑んだ。綺麗な微笑だった。静かな月の光に包まれ、ぬくもりも暖かく、ベッドの柔らかさも手伝って眠気が急に襲う。

「昼間、奴隷だと言われたそうだな」

眠気が一気に吹っ飛んだ。

もしかして、高遠がそれについて何か言われたのじゃないか、そんなことに思い当たる。自分だけではなく、自分を連れてきたのは高遠だ。

「宗司さまっ！あのっ、わたし！すみません、迷惑をつ」

「連れて来たのはわたしだ。そもそも凜は奴隷なんかじゃないだろう。それはただの癖みだ。自分ができないことの責任を他人に転嫁したいだけのことだ」

高遠は何故か、全てを知っているようだった。頭をポンポンと軽く叩く。

「勝手に言わせておけばいい。お前はわたしの秘書だ。それだけなんだから。文字は書けるようになったか？シーグルの発音でしっかり話せているな」

優しい声に小さく頷く。

「わたしのせいで大変な目に合わせているのはわかっている」

「宗司さま？」

「わかっているんだ……これはわたしの我儘だったということなど
独り言のように言い、髪をすく。くすぐったく、目を細めるとそ
の手は頬に触れた。

「凜、負けないでくれ」

空が言ったことが蘇る。

『きみは秘書になるべくしてなる』と。

ああ。

そんな切なそうな表情をして言わないでほしい。

『負けないでくれ』

それだけで存在意義がある。

7・安住の棲家

一週間。

凜は目の前に立つ、五人議会の重鎮の言葉を聴きながら、思い返していた。

シーグルに来てからそれだけの日が過ぎた。その頃には、自分の置かれた立場が大層なものであることは重々理解できるようになっていた。

一週間。

時雨澤喜三郎はそれだけの時間で確かに四位が示したとおりのことをやってのけていた。

前方に立つ青と白のシーグル軍の正式な制服を纏った銀色の色素の薄い髪 of 少年と、その隣にきつちり背筋を伸ばして立つ華奢な黒い制服の少年を見て、時雨澤は頷いた。

時雨澤は知っている。

秘書官として必要な知識を最短で学べるように組み立てた。だが、どれも膨大な量があり、到底短期間でそれさえもマスターは不可能であった。だから、凜がそれを一週間でやり遂げるには最初から無理があったことを。

橘空に会ったときに言われた言葉を鵜呑みにしたわけではなかった。だが、最初から『もしかしたら』という期待はあった。

受けさせてみた非公式の秘書官試験にほぼ満点で通ったことに時雨澤は少なからず驚いた。

「空といい凜といい、ここの秘書たちは変わり者ばかりだな」
苦笑いに「わたしもか」付け加え、さらに苦笑した。

「これで四位様の嫌味を覚悟しなければいけないこと請け合いだな。
長いからなあ……」
思い出して、その光景に項垂れるしかなかった。

凜はその後、時雨澤の元へ通った。
胸に正式に高遠の秘書としての登録された『印』をつけても、それは凜にとって形式的なものでしかなかった。つきまとうのは相変わらず『焦り』だけだ。

「凜」

背後からかけられた声にはっとして振り返る。

正式な秘書官となっても自分を認めるものは少ない。廊下を歩いていても聞こえてくるのは酷評ばかりだし、ひどいときには高遠の悪口を言うものたちもいた。どれも、なりそこないの秘書だと、時雨澤は笑い飛ばしたが、実際、受けるとなると積み重なれたものは重く、辛い。

久しぶりに自分の名を呼ばれ、それが時雨澤でないものと知って少なからず嬉しかった。

高遠ともあの着任式以来会ってはいない。

「橘空さま」

眼鏡の奥の優しい瞳が覗き込むように体勢を落とした。
さっきまでヒソヒソと話し込んでいた『なりそこない』たちはそ
そくさと姿を消していた。

「滑稽なものです」

姿を消した方向を睨むように一瞥し、再度、空は凜の方へ顔を向
けた。

「お昼ですか？わたしもご一緒してよろしいでしょうか」

「え？」

「おや？嫌ですか？困りましたね」

考え込むような仕草をした空に慌てて凜は首を横に振る。

「そ、そんなっ……」

「それはよかった」

笑顔。

「わたしにそんな気を使わなくて大丈夫ですよ。わたし自身に降り
かかった厄介ごとくらい自分で一蹴いたしますから」

「あはは」と乾いた笑いをいつものように付け加え、凜の前に座
り包みを開けた。

「それに高遠さまも同じです」

いつものように食べる前の一連の作業を繰り返していた凜はその
声に顔を上げる。

「高遠さまの悪口を聞いたところであなたが心を痛める必要などありません。ですから、さきほどのようにご自分と一緒にいるところを見た輩が後々、わたしに『いやがらせ』をするだろうという考えも無慮ですよ。あなたが臆する必要などないのです」

真っ直ぐな目で見つめられ、返す言葉もなく頬を染めた。空はなんでもお見通しのようだ。

そして、いつもきっちり『悩みごと』を抱え込んでいるときに現れる。

その他では彼のほうが忙しすぎて全く出会いもしないというのに。

「高遠さまでしたら、それくらい瞬殺しますよ」

さらりと恐ろしい言葉を言っただけ、「お茶を持ってきましたよ」
空は、凜が立ち上がるのを押さえさっさと席を立ててしまった。

シーグル始まって以来の最年少で政府軍のエリートと呼ばれる最高位の第一部隊の隊長になった、高遠宗司少佐は元々、好奇心な視線で捉えられることは多数あったようだ。高遠宗司は自身、それほど気にもしていないようだから、上に立つ五人議会はそれをわざわざ沈静化しようとしなかった。

しかし、そこにきて、彼は突飛な行動をとった。

敵地、アルファからひとりの子供を連れて帰った。

自分の生死さえも分ける分身の立場に置くために。

それは軍全体を揺るがし、そしてその視線を増徴することに他ならなかった。秘書官試験をクリアしても凜を認めるものは少ない。

ただ、凜もそれを気にしてはいない。

ただ。

「実は時雨澤さまは……ああ、忠徳さまの方ですが、紅茶が好物なんです」

「へ？」

間抜けな声を出してしまったと真つ赤になりながら、目の前に置かれた湯気の立ち上るコップに礼をのべる。

「あんな怖そうな顔と体格をしていながら甘党ですし。ですから、紅茶、しかもアールグレイに砂糖を4つもいれるんですよ」

そう言いながら空は自分のコップに並々と注がれたブラックのコーヒーに口を付けた。

「茶葉も色々ある中でアールグレイが特にお好きなのに、その茶葉の名も覚えられないんです」

「アールグレイ……」

時雨澤忠徳とはいまだ一度も会ったことがない。尤も、他の隊の中佐とそこらじゅうで出会っていたらシーグルも窮地に立たされているとは思えず、それはそれでただ事ではないのだろうが。

「ですから……焦る必要はありません。あなたはあなたが必要としたときに必要なものをひとつひとつしっかりとしたものとして捉え、蓄積していけばいいのです」

「橘さま」

「同じ、秘書官同士です。空、で構いませんよ、凜」

「空、さま……あの、ありがとうございます」

優しい目だった。

彼は頷き「それでは、また」言って、食堂を後にした。

凜もまた食堂を後にし、自習室へと向かう。

自習室へ向かうのに、エレベーターは使わなかった。使ってはいけないことはない。誰もが使用する共用ものだ。けれども、いまだ凜は使うのに躊躇した。時雨澤と一緒に後ろについて使ったが、それは自分にはまだ『吊り合わない』ものだと考えた。だから、いつも食堂から地下にある自習室へ向かうのには階段を利用する。

「……重いけど」

しかし、重厚な装丁をされた本をいつもより多く両手に抱えていた凜は後悔していた。階段を下りる以外身動きが取れない。

狭い視界の中、一段一段慎重に降りる。

背後で気配がし、幅の狭い階段のすれ違いに、凜は咄嗟に横に避けようと移動する。

背中を――。

「……っ――！」

押された。

先に手を離れた本が十数段近くある下へ落下していくのが目に映った。

次に訪れたのは黒い闇で。

無音の中に映ったのはやせ細り、枝のようになった交差する二本の腕だった。

「……っん！」

悲痛な声は誰のもの？

いや、ここには自分しかない。

目をそろそろと開けると、高い天井が映った。隣の中空のスペースには心地よいくらいの日差しが差し込んでいる。視線を移動させるとちらばった数冊の本が目に入った。

「階段から……落ちたんだ……」

呟き、身体を起こそうと力を入れる。背中に走る無数の痛みに顔を歪めた。声には出さず、瞬時に力を

入れる思慮を投げ出した。口から漏れるのは荒れた息だけだ。

「ふう……もう少ししたら動くかな……」

普段からあまり人気のない階段（そもそも高速エレベーターがあるので近くの階であっても使う者はよほどのことがない限りいない）だ。ここに転がっていても誰も気がつかないだろう。そうして余計な心配ごとは切り捨て、辛うじて動いた腕を目に被せた。

「仰向け……背中、打ったんだろうな……。医務室は何階だったけ……」

建物の配置図を思い浮かべ、自習室と同じ地下に存在を思い出す。

再度、力を入れてみる。

「くっ……」

痛い。

それでも引き摺るようにして壁際まで近寄る。

痛い。

壁を頼りにゆっくりと立ち上がる。

「本……そんなに違う場所に散らばらなくても」
自分の余裕とも取れる突っ込みに自嘲する。

見上げると、2階。

「一階分落ちたんだ。医務室はあと一階か……」

とりあえず、本はそのままにする。かがみこむのは到底無理だ。壁伝いにゆっくりと歩みを進めた。身体は軋み、苦痛に顔を歪める。荒い息を繰り返しながらやっとのことで医務室までくると倒れこむように部屋へ入った。

「お前！」

驚いて駆け寄ってきた男に身体を受け止められる。

「どうしたんだよっ！おいっ！」

「あの、医務室の方……」

「ごつい手に支えられながらカーテンの先にあるベッドに座らされる。」

「医務室の方！ハイ！俺！なに、どうしたんだよっ」

顔を上げると、気さくそうな短髪の青年が手を上げていた。

顔を緩める。

「よかった——」

その瞬間、意識を手放していた。

「……か。ああ、高遠さまにはまだ知らせなくていい」
深い声の中に知った言葉があつて、目を開けた。

「……ま」

慌ててカーテンを開ける齒切れの良い音がする。

「凜。聞こえるか、わたしだ。見えるか？」

目の前を何度か大きな皺の手が行き来し、小さく頷いた。

「時雨澤さま」

「ふう……よかった」

安堵の声に我に返る。椅子に座っただろうきしむ音に急いで身体を起こそうとし、軋んだのは自分の身体だったことに気が付き顔を歪めた。

「捻挫、捻挫。とりあえず寝てな、凜ちゃん」

「へ？」

「ほれ、タオル変えるからじつとして」

人のよさそうな青年。初めて見る顔に不思議そうにしていると時雨澤が助言する。

「こいつは医務室の片倉 夜^{ヨル}。事務局側の人間だから知らないだろう」

「医務室……」

「そうそう。急に必死な顔で倒れこんで、そのまま意識なくすんだもんなあ、さすがに俺もびっくりさ」

白衣を揺らして隣のベッドに腰を下ろすと、夜はにっと白い歯を見せた。

「なんで……本っ!」

慌てて身体を起こそうとして、夜がすぐに強制的に寝かせた。

「ほれ」

夜の振り返った先の丸椅子の上に積み上げられた見覚えのある本。

「あ……ありがとうございます」

「イイエー」

白い歯がのぞき、夜はヘラヘラと笑った。

「凜」

今度は逆方向からの深い声に顔だけ向ける。時雨澤だ。眉間に皺を寄せ、鋭い視線を向けていた。

「いつからだ？」

「なんのことです」

「……確かに、嘘をつくときでも視線をずらすなと教えたのはわたしだし、どんなときでもポーカーフェイスでいると言ったのもわたしだ。お主がそのポーカーフェイスに無意味の笑みを選んだのも知っている。だが……ここはそれをするときではない」

「わたしには意味が分かりかねます、時雨澤さま」

無言で時雨澤は両手を組みなおした。

「高遠さまにもし危険が及んだらどうするつもりだ？」

首をゆっくり横に振った。

「これは、わたしだけです。高遠さまへの危険には成りえません」

その時点で、時雨澤は凜がその『イジメ』を肯定したものとみなす。凜もそれはわかっている。

「わたしは……かわいい弟子をみすみす殺されたくはない。いつからだ、凜」

「……約束を」

「なんのだ？」

「高遠さまにこのことは告げないと」

彼に迷惑をかけることになってはいけない。これ以上の。

「……わかっている」

渋々といったように、時雨澤は頷いた。

「任命式の後からです。今日のようなあからさまなのは初めてです」

「2週間前から！？そんなに回数があつたのか！？」

目を見開いた時雨澤の顔を見るのは2度目だ。前は凜の秘書官試験での結果をみたとき。

「たいしたことはありませんでしたので。それにわたしを目的としたものだとすぐにわかりましたので、言う必要もないと判断いたしました」

黙りこんだ時雨澤。

反対に後ろで動く気配。びくつと身体を反応させた凜に「わるいわるい」徐に謝り夜は時雨澤の肩越しに移動する。

「誰も勝てやしないのにさー」

時雨澤が夜を見上げる。

「もう勝てないだろ？高遠さまはご自分で凜ちゃんを選んだ。凜ち

やんは自分で高遠さまの隣を選んだ。幼稚なイジメには負けない覚悟を凜ちゃんはしている。一番はなに？凜ちゃん」

夜と時雨澤が凜を見つめた。

「高遠宗司さま。あのひとだけです」

満足そうに夜は微笑んだ。

「やっと高遠さまにもいい秘書官がついた」

「え？」

「高遠さまも昔、幼稚なイジメを受けてた口でねえ……懐かしい。ま、凜ちゃんほどひどいことはなかったけど。凜ちゃん、しばらく安静だから」

ビシッと指を差す。

「は！？」

「まあ、そういうことだ。凜、ここで勉学に励め。医療の勉強にはもってこいだ。片倉 夜になんでも聞け。こいつはこうみえてもすつつつつこい、頭がいい」

力がこもったところはさて置き、凜は顔を緩めた。

「はい」

どうやら、シーグル政府軍のトップに立つ人間たちは『変わり者』

らしい。

自分に自らかかわりをもってくるほどの。

「ひつどい言われよう……」

がつくりと肩を落とした夜のその肩越しで扉が勢い良く開いた。
自動ドアだというのに余計な力も加わり無理やり開けられ、ドアは
変な機械音を鳴り響かせた。

「凜！」

だから。

なぜ、このひとはひとが『窮地』のときばかり現れるのだ。

「空、さま」

夜を押し分け、そこには橘空の姿があった。

「夜！」

「うあ？大丈夫、処置済み！……おまえ、時雨澤さまのところはい
いのか？」

「構いません！」

（いいのか？）

その場の三人が同時に疑問に思ったのは言うまでもない。

時計の針の動く音だけがする。

空と時雨澤は夜に促され、渋々と自分の仕事へと戻っていった。夜は夜で、これから医師会の会合があると言って白い歯をのぞかせながら出て行った。

「凜ちゃんのお秘密はちゃんと守るから」

謎の言葉が『凜』女』のことだと知るのは耳元で囁かれた「見えないよ」による。

夜は部屋の鍵を掛けて出て行った。これ以上、凜を傷つけないために外部的処置をとったのだろう。

凜はしばらくぶりの安堵をかみ締めていた。

着任式の前、奴隷だと言われ泣いていた凜の目の前に高遠宗司がさも当たり前のように存在して以来のことだ。

目を瞑る。

浮かんだ色素の薄い銀色の髪、青い目の少年に胸を痛めた。

彼の声が聞きたい。

むしようにそんなことを思った。隣に立つことを許されていながら、それは叶わない。

「宗司、さま」

目の端から涙が零れた。

痛み止めが効いているのか、背中に無数に走っていた痛みはない。強い薬を投与されたのだろう。目をあけても薄暗い病室。そっと目を開けた。

「……え？」

冷たい視線。

扉を開け、ツカツカとそれは寄る。

身体を慌てて起こそうとして、あっという間に目の前に立っていた、大きいとは決していえない手に強制的に体勢を戻される。

「高遠さまっ」

「なぜ、言わない」

怒っている。

間違いなく。

「そんなに頼りないのか」

「ちっ、違います!」

銀色の髪、青い目の少年がベッドの横に置かれた丸椅子に無造作に座る。

「あ、あの、なぜっ、ここにっ……」

「空を締め上げた」

（ああ！空さまに口止めはしなかった……）

後悔と同時に、聞きなれぬ言葉に背筋に冷たい汗が滴った。

「ええと……締め？」

「だんまりを決め込もうとしたから、時雨澤さまにばらすと脅した」
そういえば、ここの鍵は外部侵入者を防ぐために、夜が締めていたはずだ。

「あの……もしかして夜さまは……」

「わたしがあいつのところに現れた時点で素直に鍵を渡した。利口だ」

（片倉 夜……世渡り上手。）
そうして凜の中で代名詞が決まった。

「……痛いかな」

黙ったことに、高遠は心配そうに顔を向けた。

「いえ、大丈夫です」

実際、今痛いところはこの胸の中くらいだ。

「空に」

「え？」

「前に空が、凜と話したことを嬉しそうに時雨澤さまに話していた。だから、頼んだ。わたしと凜は生死を共にするものだけれど、まだ共にいることはできない。すぐに助け合うことはできない。だから、凜が辛そうなことがあれば助けてくれと、頼んでいた。それもあって、空は申し訳なさそうに謝った」

「空さまのせいではありません！すべては、わたしがっ、わたしが起こしてしまったことです！」

高遠の手が凜の髪を梳く。

「わかってる。空のせいではない。空は時雨澤さまと共にあるもの、だから。凜」

「はい」

「隠し事はなしだ。すべて話すように。わたしはあまり他人とともにいたことがない。だから、わからない。だから」

「はい」

そつと手を伸ばした手に高遠が触れる。

「……ちゃんと食べる」

「はい」

彼の声だ。

何度も何度も、いつもいつも望んでいた声。

「24時にはなにがあっても部屋にいろ」

「契約、ですね」

「そうだ」

そう言って頭を下げた高遠の前髪がサラリと手に触れた。
くすぐったくて、だけど、それはとても心地よかった。

8・空即是色

「珍しい」

聞いたことのない唐突な声で顔を上げた。そこには知った顔があった。あまりに有名な男だ。凜は咄嗟に頭を下げ、廊下の壁際に寄る。

「いや、そこまで……」

そんな突っ込みが真顔のまま抑揚のない地に着くような声で発せられた後、今度こそ知った声が凜に降りかかった。

「時雨澤さま、凜が怯えています」

190cmを超える身長に短髪黒髪、精悍な顔つき。体格は祖父譲りにしっかりしていて、見下ろすように位置する顔から向けられた視線は、鋭い。

「奎、はっきり言いすぎだ」

顔を緩め、時雨澤忠徳は背後に隠れるようにしていた青年に振り返る。

「お久しぶりですね、凜」

「奎、さま。お久しぶりです」

眼鏡の奥の目が優しく微笑んだ。

「凜だったな…… 1年も経つのに言葉を交わすのは初めてだ。時雨澤だ」

「は、はい。凜です。よろしく願いします」
慌てて再度、頭を下げる。

「高遠はどうした？」
不思議そうに時雨澤がつなぐ。

「え？」

「いや……」

「いつも一緒にいらっしやいますから。凜と高遠さまは」

空が付け加え、時雨澤が無言で頷いた。

「部隊長会議に出席されておりますので」

「ああ…… そうだったな。実継がなんか言ってたような…… でも終わっただろう？ 実継がさっきエレベータに乗っていったぞ？」

「え！？ し、失礼しますっ！」

慌てて身を翻す。

週一回行われる軍会議には会議室まで高遠の供をしてやってくる。高遠が会議が始まるまで目を通し続けている資料やら本やらを持ち、会議終了後まで廊下で待つのが毎回の『契約』だった。凜は1時間ほどの時間を端に設置されたエレベーターのそばのガラス張りの壁

の外を眺めながら過ごす。

今日もまた同じように過ごしていて、あまりの天気の良いさに新緑に輝く街を見つめていたのだが……

「凜」

黒い制服を翻し、駆け出そうとした瞬間、身を凍らせた。

いや、普段呼ばればそれは心地よい声で名前を聞き、返事を返す。薄く青みがかった色素の薄い髪をサラリと動かし、青い目の少年が見つめていた。目が合った瞬間、少年は視線をずらした。

「凜になにか？」

高遠宗司は自分より上の立場にいる時雨澤忠徳を見上げ、そっけなく言い切った。とても上の立場の者へと紡ぐ言葉尻ではなく、まるで敵に言葉を向けるように。

「高遠さま」

呼んでみる、が、視線を戻す気配はない。

明らかな失敗を凜は感じていた。高遠はどう見ても不機嫌だ。他のひとからみれば毎回のごとく表情は変わらずわからないだろうけど。

できれば、時雨澤に地雷は踏んでほしくない。

「いや……」

背後で呟かれた二言に背中中に冷たい汗が流れた。なぜか、時雨澤を応援したくなる。

「たまたま通りかかったただけだ。いつも高遠の隣に立っているのに一度も言葉を交わしたことがなかったからな。引き止めた、悪かったな」

外の景色に見とれ、部屋に迎えに行くのを忘れていたことを排除してくれたようだ。

いや、謝りたいのはこちらの方だ。

「……そうですか。凜、こちらは警吏部の時雨澤忠徳さまだ。わたしの秘書の凜です」

五分五分、そんな程度で高遠は納得したのか不満げな声ながらも紹介する。

再度「凜と申します。よろしくお願いいたします」挨拶を交わした。

「空」

去っていく青と白の制服に目立つ色合いの髪をした少年と、その後ろを小走りに続く黒髪の華奢で小柄な少年を見つめ、時雨澤はさもおもしろいものをみたかのように口の端を上げた。

「はい？」

「凜の顔を見たか？」

「いえ？」

「高遠の顔は？」

「いえ。時雨澤さまが凜に不利益なことをおっしゃらないか心配で心配でそれどころではありませんでしたので、申し訳ございません」
臆せず微笑んで言った空に時雨澤は頭を抱える。

「いくら俺でも、それくらいは考えるぞ？あの冷酷完璧主義な高遠に反することは言わない」

「はい？」

「あいつは、高遠は知ってたさ、凜が微笑みながら街を見ていたことを。だけど俺にそれを口にさせることは望んでいなかった。あくまでも凜の不利益は望まないさ、高遠は。それに俺もな」

「それはよかったです。わたしの大切な凜になにかあってはいけませんから」

空の言葉に時雨澤は苦笑する。

「凜も高遠も同じものを望んでいるようなのに、遠いな」

それには空は真剣な表情で頷いた。

「高遠さまの隣には凜が必要です。同時に、凜の隣にも高遠さまが。お互いに無意識に欲している。まだ距離はとても遠い」

「高遠はいい秘書を見つけた」

満足そうに言い切った時雨澤の隣に空は立つ。

「無論、俺たちも共に立つものだ。青と白の」

「はい」

嬉しそくに返事をした空に、さらに満足そうな表情で時雨澤は高遠と凜が去った方向と逆へ向かった。

「わざわざ凜に会議終了を教えてあげるなんて、時雨澤さまも凜さんに一目ぼれですね」

「……高遠に殺されたくはないが……あれは補佐をしたくなるタイプだな、凜は」

「ええ、ですが外見とは反対に結構、しっかりしてますよ、凜は」

シーグル政府軍第一部隊長高遠宗司の秘書として契約してから1年。

最初の半年は高遠の隣に立つことさえも許されなかった。自分の未熟さが、出身から考えれば仕方のないことだとしても、ここに立ってしまえばそんなことは関係なく、容赦なく秘書としての自分が求められた。

言葉さえも読み書きできなかったが、今は本を読むことはできる。咄嗟に出てしまったアルファ訛りもやっと消え、自然のうちにシー

グルの発音で話すことができるようになった。

求められているのは膨大な知識と恐ろしいほど完璧な才。

『1年』

朝から晩まで、どんな書物を読み、知識を得ようともし、秘書としての立場にかかえない軍事訓練を受けようともしその不安は消えることはなかった。

老師が最初に言っていた言葉が身を刻むかのように刃となって身体に纏わりついていった。

高遠が部屋に入れば、呼ばれない限り凜はお茶を運ぶなど、事務作業しかない。それを早々に切り上げ同じ部屋の隅に設置された机で膨大な知識を取り入れるための作業に入った。

繰り返し返された作業の末、ほぼ寝る間もなく、ましてや街に出たことなど一度もない。

言ってみれば、執務室と会議室、そして自習室と図書館。時間があれば片倉夜のいる医務室へと、生活の場はそれだけで日々は過ぎていった。

いまだこの建物の外へ出たことはない。

ひとりで外へ出るのにも、どうしてか不安があった。

ここは生まれ育った国ではない。そんな恐怖があったのかもしれない。同時に新緑眩しい外の緑に囲まれた街を見るのは好きだった。思いは馳せるが、それだけだ。

「出かける」

広げた本に被る影と徐、ぶつきらばうもいいところで高遠は凜の目の前に立っていた。

「高遠さま、会議は夕方、4時からですが……」

言う最中に高遠の珍しい私服に気付く。いつもの青と白の制服も似合っているが、真っ白なシャツをラフに着こなす辺りが、さすがだ。

「外へお出かけですね。いつてらしゃいませ」

立ち上がり、机の外に出ると、高遠の前でにこやかに頭を下げた。しかし、目の前の高遠の靴は動く気配さえ見られず、不思議に顔を上げる。

「あの、高遠さま？」

少年は無然としない様子で見つめたまま手を伸ばす。

「は！？あ、あの」

手首を掴まれるとそのまま有無を言わず引き摺られるようにして廊下に出る。もちろん高遠は電子錠を部屋にしっかりとかけると、そのまま凜を引き摺り、凜の部屋の前に立つ。

何事もないように凜の部屋の扉の指紋認証式のロックを自分の指紋で外すと、部屋に凜を無造作に投げ込んだ。

（やつぱり、高遠さまの指紋認証でもこの扉、開くんだ……）

高遠に鍵を掛けて部屋を出ると命令されたので、部屋の中には何も貴重品などはないが、鍵は必ずかける。それが契約だから。

しかし、毎晩24時にこの部屋で一日、あったことを話すように決められてから、凜が戻ってくると、さも自分の部屋のようにベッドに腰掛けながら書類に目を通している高遠の姿に数度出くわして

いる。

「着替える」

扉を高遠が閉める。

「き、着替える……？」

一応、クローゼットの方向に目をやる。

高遠が扉を閉め「さてと」困ったように呟きながら廊下に足向けようとしたときだった。背後で、さっき閉めたはずの扉の開くシュツと切れるような音がし、振り返る。

「着替えると言ったが？」

扉の外に来て、部屋の鍵を掛けると、凜は高遠の隣に立つ。

「この制服ではいけないのでしょうか？鏡の前で一周してみました。特段……もしかしてなにか匂いますか？クリーニングから戻ってきたばかりのものなんです……」

困ったように凜は高遠を見上げた。

「天然ボケ少女、健在だな。凜」

呆れたように呟き、わざわざため息を落とす。

「私服に着替えると、言っている」

一瞬、はっとしたように目を見開き、すぐに考えるような仕草に戻り、結局、困った表情で凜は高遠を見上げていた。

「これでは駄目なのですか？」

「そんなに制服が気に入っているのか？」

「あの、これはこれで、とても上等な布でできていますし、縫製ももちろん立派ですし、着心地も良いです。そうではなくて……」

「制服だと目立つからな」

言い切られて、再度、クローゼットの中を思い巡らす。

「あの、これの他だと寝所用のものしか……それではもちろん……
だめですよね」

うなるように呟き、凜は自分の黒い制服を見つめる。

「凜」

「はい？」

「私服を持っていないのか？一枚も？」

「はい」

頷く。

「今まで一度も必要としませんでしたので」

「……来い」

そして結局、引き摺られながら凜は建物を後にした。

「あの、高遠さま」

「宗司」

「宗司、さま。どちらへ」

「食事だ」

「お食事ですか。それでは食堂の方へ連絡をいれておきましょう」

「もういれた。わたしと凜の分はいらないと言っておいた」

「え!？」

驚いた声に高遠が急に足を止め、振り返る。

「嫌なのか」

いつもより低い声に凜は首を何度も横に振る。

「宗司、さまとご一緒にお食事なんて……」

「凜とわたしが一緒に食事を摂ってはいけないという法律などない。」

それに外の空気が吸いたかった。あの建物の中にいる限りわたしには肩書きがついて回る。凜にも。たまにはいいだろう」

高遠は途中で凜の服（ブルーのシャツと柔らかい素材のパンツ。もちろん両方男物）を購入し、着替えさせ、広場の新緑の下に店を広げたオープンカフェで食事を摂った。

「たまにはいい」と、高遠はどこか満足そうに何度も呟く。

「紅茶が好きなのか」

高遠は草食だ。肉は好まないようで、いつもボウルに山盛りにされたサラダをひたすら食べ続ける。

「はい。シーグルの紅茶は美味しいです」

「……そうか、おいしいか」

そして高遠はグラスに注がれたコーヒーを飲み干し、近くのウエイトレスに二杯目を頼む。

「宗司さま」

ふとフォークを置き、サラダを頬張った（それでも仕草は優雅だ）高遠に声を掛ける。返事が無いのは続いているということだ。

「わたしは……」

高遠もまたフォークを置いた。

膝の上で握り締めた手にいつのまにかじつとりと汗を掻く。そんなに暑くはないのに。このシーグルでは気候さえもシステム管理されているから、汗ばむ陽気などという言葉は廃れてしまったと時雨澤が講義のときに笑いを含めながら教えてくれた。

「わたしは、宗司さま」

ブルーのシャツは肌触りも良く着心地がいい。秘書としての給料は貰っているから支払うと言ったのに、高遠はさっさと支払ってしまった。

高遠から貰うものはなにもかもが心地よい。

「凜？」

その声も。

だから、それを奪うものたちをわたしは絶対に許さない。

「伏せてください！高遠さまっ！」

咄嗟に目に入ったものを確認する間もなく、凜はテーブルクロスを一気に剥がし、宙に放る。そうして視界を対象者にとって不確かなものにしておきながら、テーブルを横に倒す。

地面にはその声に敏感に反応し、かがみこみ、振り返ろうとする

高遠の姿があつた。

視界にそれを捉え、凜は高遠の肩に両手を着き、一気に高遠の前へ飛び出る。背後にかがんだ高遠が凜の身体を引き戻そうと背中を引っ張る。

——パン！

軽く発せられた音。

「り……」

走る右腕の痛みに瞬間、眉間に皺を寄せ、それを睨みつける。

「大丈夫です。お借りいたします」

迷うことなく手を伸ばし、高遠の長めのシャツの下に隠された鉄の黒い塊をさつと抜き出すと、両手で

店の脇に逃げ去ろうとしている男の姿を捉える。

店の中は騒然とし、店員たちが客をすばやく店内へと誘導しているのが目の片隅に映る。ふっと息を出した瞬間、凜は突き刺さるような痛みを無視し、力を込め引き金を引いた。

男が蹲る。

「お店の方！警吏を呼んでください！」

凜は蹲る男の方に走りながら、エプロン姿の青年に向け叫ぶ。

太ももを抑えたまま蹲った男が再度、顔を上げる。今度はお互い

に表情さえ確認できるほどの距離だ。

「あなたは……」

脳裏の中に仕舞われた本を捲り、該当した答えに眩きを漏らす。
男の口元が上がる。

「なにが高遠宗司だ」

男の右腕が黒光りする短銃を向ける。

「凜！」

その声を奪うものをわたしは一生許さない。

どんなにわたしの血が流れようとも。

ああ、どうか。

「凜！」

新緑の中、風が吹くたびにサラサラと揺れた高遠の色素の薄い髪。
綺麗なひと。

月明かりの中で、彼の髪は月光で朧に輝いていたこともあった。

太陽の下で燦燦と輝いていた今日も。

「凜」

ああ、なんて素敵な声なのだろう。
どんなに苦しいことがあっても名を呼ばれば、わたしは立ち上がることができる。

「凜！」

高遠さま？宗司、さま？何を慌てているんだろう？

ああ、いつの間にこんなに暗くなってしまったのか……

「凜！」

ああ、なぜ。

ああ、なぜ？あなたの声は届くというのに、その綺麗な、ブルーアイスと呼ばれた幻の力を持った種族のその目が曇っていくのだろう。

あなたの気配はこんなにもするのに。

なぜ。

なぜ。

滴り落ちるのは涙。堕ちていくのは天国でも地獄でもない。

「宗司、さまのもとへ」

「凜」

目の前に曇り始めたと思っていた顔が朧に、そして徐々に輪郭を象っていた。

「……宗司、さま？」

青い目が射抜くように見つめていた。

なのに、いつもと違う、そこには迷うような感情がこもっている。

「凜」

これが現実だ、と感じた瞬間、再度涙が滴り落ちた。
それを高遠がそっとぬぐう。

「ここは……夜さまは？」

「ここにいるさー」

高遠の肩越しにいつもの片倉夜の顔が出現する。

医務室だ。何度もここにはお世話になりに来ている。怪我というよりも学びに。片倉夜という医務官は時雨澤が言った通り、確かに相当できる医者だった。

片倉夜はいつものように白い歯を見せては笑わなかった。

「高遠さま、お怪我は？」

「ない」

端的な回答にも心底ほっとした。彼を傷つけるようなことがあってはいけない。

「設楽さまは」

明らかに表情を強張らせ、高遠は口を開く。

「あいつが設楽少佐だと知っていたのか」

「遠目では確認できませんでした……少し痩せこけた感じはありましたが、政府軍の幹部名鑑にも写真がのってありましたので」

「時雨澤警吏長が取調べ中だ。それよりも身体は痛むか」

「いえ。少し重い気はしますが……夜さま、これは麻酔ですよね」

「そう。あと血液が急に流れたことによるショック症状も出てたし、輸血もしたからね。とりあえず少しは安静にするように。高遠さま、少しよろしいですか？」

「ああ」

片倉夜と高遠はそのまま連れ立って部屋の外へと出て行った。

再度、ほっとため息を着いた。

「よかった……高遠さまにお怪我がなくて」

高遠宗司を急襲した男は設楽元少佐。昨年度まで第1部隊長だった男だ。五人議会はほとんどの部隊を再編成した。もちろん政府軍のエリートと呼ばれる第1部隊もまた対象で、現在の部隊長は知らないものはいない、高遠宗司だ。自分より若い少年がその地位にいたのだ、反感はあつて当然。ただ。

「設楽さまも辛かっただろうな……部隊長から外され、一介の兵に戻されたんだから」

それでもほとんどの人間がそれを受け入れる。

すべてはこの国を統べる『MOTHER』というシステムの言葉通りに。

「それでも高遠さまを傷つけさせるわけにはいかない」

あのとき、紡げなかった言葉は。

「……わたしは、あなたとともに、なにがおころうとも。最後に残るのは高遠さま、あなただけでいい」

9・思想迷走

その日、片倉夜が高遠を伴い医務室を出てから、凜の視界に高遠が入ることはなかった。

「夜さま？」

机上で珍しくパソコンをいじっている夜に消えそうな声が掛かる。

「凜ちゃん？おはよー……っていっても、もう夕方だけだね。どう、具合は」

いつものように夜は白い歯をのぞかせニツと笑うと、大雑把に羽織っただけの白衣を揺らしながら、凜の元へ近付いた。

「まだ、あれから3日目ですね？」

そう言って揺らいだ凜の黒い目に、夜は「もちろん」笑顔を返す。

「一週間はいてもらうよー。今は大きな戦いもないしね」

つかれた小さなため息に、夜は凜の頭を撫でる。

「焦る必要はないさー」

「……わかってはいるのです。だけど」

設楽に至近距離から発砲された一発は見事、凜の右上腕部を突き抜けていた。凜もまた設楽へ向け高遠の銃で左肩を打ち抜いていたのだが、どうやら『腕の差』はあったらしい。設楽の銃撃の方が間違いない致命的に近いものだった。

その証拠に、ふたりとも二発ずつ互いに傷つけたが、設楽はその日のうちに時雨澤忠徳の尋問を通常通りの尋問室で受けている。片や、医務室から一步も外に出られない。

凜は目を開けていようとしても、いつのまにか眠ってしまったていた。目を覚ますたびに、意識は混濁し、どれくらい経ったのかがわからなくなってしまう。

「夜さま。麻酔を切ってもらえませんか？」

「凜ちゃん」

「……わからなくなるのです。どこが現実だか、だから何日経ってしまったのかも。痛みを伴うものだというのはわかっています。けれど、痛みを感じていたほうが、心が休まるのです。夜さま、お願いします」

黒い目でじっと見つめられ、夜は困ったというように曖昧な表情を返す。

「痛いよ？」

「はい。覚悟はしております」

夜の目にもその覚悟は見取れた。『頑固』なところは一年、共に過ごしてきてみればよくわかっている。彼女は言い出したら頑と

して曲げない。

高遠宗司とのことと同じように。

「わかった。だけど、今日はそのままね。これは医師命令」

「ご迷惑をおかけします」

「仕事だしね。もう少し、休んだほうがいい。今は、凜ちゃんにとって休息の時なんさ」

白い歯を見せ、やはりニツと笑う。凜もまた微笑み、そしてそのまま落ちかけた瞼を閉じた。

「……怖いのです。このまま眠ってしまったら、いままでやってきたことはすべてなくなってしまっているのではないかと」

夜が席を立ち、またカタカタとパソコンをいじる音が聞こえてきて、凜はそつと目を開けた。

目の前に見える天井はあまりに無機質な色をしている。ぼやけていく天井に「こわいのです」呟く。

「宗司、さま、ともにいない未来があることを実感するのが」

夜はキーボードの上を動かす手を止めず、意識を凜へと向けた。

狸寝入りから、しばらくして凜の背中がゆっくりとした上下移動に変わり、寝息が耳に届くと、夜は音を立てないようにそっと立ち上がる。そこに消え入りそうなくらい小さな背中があった。

「……どうにかなることと、どうにもならないことがある。凜ちゃんのままでは『無』。焦っても仕方のないことだと、自分ではわかってるのに」

「きみがそうだったように。それとも今もまだそうなのかな？」

夜はその声に振り返る。

「……空。いい加減、気配を消して近付くのをやめてくれ」

「あはは」乾いた笑いと「慣れだよ」答えにがつくりと肩を落とす。

「きみの腕は信用してるから凜の傷については聞かないことにするよ。それはきみと凜の問題だからね」

黒い上下の制服で現れた飄々とした青年、橘 空に苦笑いしながら夜は「時雨澤さまは？」聞く。

もちろんそれに、

「いいんだよ。時雨澤さまは」

笑顔で返ってくるのを見越しながら。

「いいのか……相変わらず変わってるなあ、空」

「きみもね、天才変人、片倉夜さん」

「そつくりそのまま返す。んで？なんか用つしょ？」

わざとらしく両手を軽く叩き合わせ、空は「きみが余計なことから始めるから忘れるところだったよ」呟きながら伝票を取り出す。

「痛み止め、お願いします。設楽元少佐7日分ね」

「あいよ。ちょっと座つといて。今、用意するから」

「……撃ちどころは完璧なんですよね、凜は。教本どおりの射撃なんて、実戦ですぐできるほど簡単なものじゃないのに。設楽元少佐なんてほとんど適当に撃ったら、凜に当たった、みたいな感じだし」

「そうなん？」

「ええ。これで避けられていたら、凜はここにご厄介になることはなかったでしょうね」

「そんなに設楽さんはいいとこ狙われてたの？」

薬品棚から錠剤の詰まった遮光性の瓶をいくつか取り出し、並べる。粒を数え、それぞれの瓶用のピンセットで取り出しては小分けの袋に詰め、瓶は元の位置に戻す。何度か同じ作業を繰り返す夜の手元を見つめながら「ええ。的を射た射撃でした」空は頷いた。

「教え方がいいんでしょうが」

小袋をひとつにまとめた錠剤の紙袋を差し出すと、空が夜にっこりと笑顔で振り返った。

「もちろんです。わたしが教えてるんですから」

「あ、そう。まあ、それはさて置き……凜ちゃんからは見えてたわけだ。少なくとも設楽さんの位置は。そしてもしかしたら銃口さえも確認できたのかもしれない」

「さて置かないください、まったく。照準はあってますからね。凜が狙い通りのところを撃ち抜いたとすれ、ば」

空の言葉に夜は頷き、続ける。

「二発目。設楽さんより先に撃つことも可能だったのに、わざわざ撃たれたわけか」

一瞬、考え込むような素振りを見せ、空は「ありがとうございます、薬」足早に扉に向かった。

「どういたしました。たまには凜ちゃんの起きてるときにきてな。こんな夜中を回った頃じゃなくて」

「日中は仕事なんですよ」

「……こっちも仕事……」

夜の眩き空しく、空はさっさと扉を開けると駆け出した。

「非常事態以外廊下を走るのは厳禁じゃなかったっけ？」

薄暗い廊下に消えていく、真っ黒な背中を見送りながら夜は呆れたように呟いた。

「ま、非常事態ではあるか。凜ちゃんが高遠さまに向けられた設楽さんの固執の恨みを少しでも和らげておくためだけに、わざわざタ

イミングをずらして撃たれたとすれば。高遠さまが気付いたら設楽さんは死直行……空………まさか、こっそり死体をここに持ち込まないだろうな………あいつならやりかねない………警吏の責任を取らせるようなこと時雨澤さまにはさせないだろうからな。なんだかんだで空は時雨澤さま一筋だからなあ………」

そのまま欠伸を漏らし、両手を天井に向かって伸ばす。

「今日も、高遠さまは来ない、か」

ひっそりと人の気配のしなくなった薄暗い非常灯がとるだけの廊下を見渡す。

「あいつも凜ちゃんのこととなると頑固不器用だからなあ………」

そっと苦笑いを零し、夜は医務室の鍵を閉めた。

次の日、凜の麻酔は本人の拒否のため、夜は麻酔を切った。激痛が襲っているだろう凜は歪めた顔を、必死に笑顔に引き戻していた。頑固な凜のために、睡眠誘導薬をこっそり投与。トロンと落ちかけた臉の先で凜は何か言いたそうに口を開いたが、夜はいつものように笑って強制的に会話を終了させ、眠らせた。

高遠の名さえ出さず、その日、凜はウトウトしたまま一日を結局すごすことになった。容態は安定しているものの、夜は凜が怪我をしてからずっと医務室で眠っていた。

「夜、さま？」

意識定かではない声が隣のベットから掛かり、夜は就寝前の癖の読書の手を止めた。

「ごめん。明るかった？」

「いいえ。大丈夫です。ただ、あまりに静かだったもので……」

朧な光の中で凜の真つ黒な目が潤んでいる。本を仕舞う。

「確かに静かだねえ。凜ちゃんが来る前は一年前以上の話だけど、ここも一日中慌しかったんだよ」

「そうなんですか？」

「そうさー。声の交代があるときは他国からの攻撃も強まるからー、臨海線だけじゃなく、ここも結構な人数を収容してたんだよ。しばらくはそうはならないから、落ち着いて研究もできるけど」

「あの……」

恥ずかしそうに下を向いた凜に優しい声が掛かる。

「凜ちゃん」

「は、はい」

凜は高遠の声が一番好きだ。触れるか、触れないかのように、壊れ物を扱うかのように、大切に大切に紡がれる『凜』その声が。

だけど、片倉夜も橘奎も、時雨澤喜三郎も忠徳も。凜に関わって
くるシーグル政府軍の人間たちはみな一様に優しい声で凜の名を呼
んだ。

まるで、母親か父親に呼ばれているかのように。

彼らは静かに、そつと優しく接してくれていた。それがくすぐつ
たく、そして涙が出そうになるほど切なかった。

「凜ちゃん」

そんな世界を失いたくないと思う。

「ひとりが寂しいときはね、ここにくるといいよ。何も持ってこな
くてもいいから。怪我なんて毛頭しなくてもいいから。お兄さんが
おやつを用意して待っていてあげるから」

凜と同じ黒い目はとても優しく見つめていた。

「凜ちゃん。俺ってさー、この国でも貧民街の方の出なわけ。シー
グルは中心に行けば行くほど裕福な人間もいるわけだけど……同時に、
やればやるだけ認めてもらえるところもあるわけ。元軍人の子
供だからとかいって優遇されるわけじゃなく、一個人として見られ
るわけだ。優遇はないけど、やつぱり軍人の子供は軍人を目指して
くるわけで、医者の子供も医者を目指してくるわけで……やつぱり
周りから見たら貧民の出の俺なんかは突き刺さるような視線で見ら
れるんだよね。ま、今はもうないけど。最初はさ、俺も焦って焦っ
て、これをやろう、あれもやろう、あれもやらなきゃ、これもやら
なきゃって、結局、やったこと以上に残ったのはちっぽけなものだ
った。ああ、俺は周りの視線なんか気にして何してるんだろう？俺
は軍の正規医師になるためだけに必死にここまできたのに、って。
あるとき思ってたわけさ」

「夜、さま？」

「ジタバタしたところで、終止符をズケツと打ったのは変人、橋空だった」

「……へ……んじん……空さまですか？」

緩んだ表情で笑い、夜は頷いた。

「空の手にはめられた政府軍公認の射撃手の証めたことあるっしょ？」

「はい」

「普通、選ぶのは秘書じゃないでしょ。しかも警吏って！っていうのが変人たる由縁。ああみえてもあいつの父親も軍関係者だし」

「以前、部隊長を務められていた方だと」

「そうそう。でも、空の選択肢は最初からひとつしかなかった。『時雨澤忠徳』の秘書になること。しかも、まだそのときは時雨澤さまは佐官じゃないから『秘書』なんていらないし。佐官になるとも限らないのに、勝手に空は自分の位置を決めて、そのときを待っていた。理由は言わないから聞かないけど……凜ちゃんにだったら空も教えてくれるかもしれないなあ……時がくれば」

「空さまは」

思いつめたような声色。

「なるべくして時雨澤さまの秘書になられたんですね」

凜の脳裏に初めて橘 空とであったときの光景が蘇っていた。

「そう。橘 空は俺にもそう言った」

楽しそうに言う夜に、はっとして凜は顔を上げる。

「ジタバタしなくても、来るときはきます。周りなど見なくても片倉 夜はなるべくして政府軍専属の医師になりますって。俺より年下のほとんど子供みたいな奴が微笑みながら言うんさー、あんどきはえらい驚いたけど……………だけど」

「……………なにかが吹っ切れましたか」

その言葉に驚いて顔を向けたのは夜だった。

「……………うん、そう……………なんだけど……………凜ちゃん？」

「わたしも、初めてお会いしたときに『なるべくしてなる』と」

「そなの？」

「はい。ですが、わたしは……………」

「ああ、そっかー」

その言葉に胸が痛んだ。

（わたしは……………ふさわしくないのです。）

しかし、続けられた夜の言葉は予想だにしていなかった。

「なら、余計な心配だったかも！」

「え？」

「実はさー。空、時雨澤さまにも同じこと言ったんだよね。『時雨澤さま、あなたは求めるなら副將軍の地位さえ手に入れることができます。でも、警吏へと進むのであれば、それはあなたのなすべき道なのです。あなたにはそれがふさわしいのです』……普通、言わないだろ」

「あの？」

「橘 空が凜ちゃんにそう言ったなら、それは信じるに値する。俺がそうのよう。時雨澤さまがそうのよう。凜ちゃんはつらくなったらその言葉を元に前へ進めばいい。信じていいと思うよ。高遠がいなくて寂しいときはここに来ればいい。迷いが生じることがあったら空に会いに行けばいい。知識が欲しくなったら時雨澤喜三郎さまに尋ねに行けばいい。だから――」

みな、優しく言葉をつなぐ。

「泣かないで、凜ちゃん」

優しい。どこまでも。

「……わたしは弱い人間です。たったひとつのことが足りなくなっただけで、こんなにもボロボロと崩れてしまうような」

「凜ちゃん」

涙がとどまることなく落ち続ける。けれども、それを止めようとは思わなかった。隠そうとも思わなかった。もし、それが滑稽だと、恥ずべきものだというなら、そう言ってくれればいい。

だけど、夜はそれが大切なことだと、言ったように聞こえた。

「夜、さま」

急かすように言葉を発する。

「どんなにわたしが、隣に立つことを望んでも、それを拒まれてしまえば、それが……すべてなのです。それが、こわくてこわくてたまらないのです。いまのこの場所をなくして言えば、わたしはたちまち立ってはいられなくなるでしょう！」

ひきつけを起こしたように息を吸い込んだ凜に、慌てて夜はベッドを抜け出すと、凜のベッドに移動し腰を下ろした。そつと凜の背中をさする。

「……決めるのは高遠さまだからね、俺は結局、何もしてあげられないけど。だけど、もし、万が一、立っていられなくなったら、ここに帰っておいで。きみの帰る場所くらい俺がこれから先、ずっとここに守っていてあげるから」

「夜、さま……」

「凜ちゃんの帰る場所はここだから」

みな、優しい。

凜を寝かしつかせた夜は薄暗い廊下を足早に、羽織った白衣をたなびかせながら歩いていった。

「ああ、もどかしい」

中空の建物に注ぎ込まれる朧な二つの月の光の中、足音が立つのを気にせず、目的地へと向かっていった。

「あいつが悪いんさー。凜ちゃん、泣かせやがって」

そして、ノックもなしに扉を開けた。

「どうせ、仕事してんだろが」

言い切り、案の定の状態にあったその顔を見て盛大にため息を落とした。

「高遠少佐さま」

「ノックくらいしたらどうだ、夜。それとお前に『様』付けされるのは気持ち悪い」

「知っててやってる」

「それも知っている。さっさと中へ入って扉を閉めろ」

扉を後ろ手にしめたところで、やっとのことで少年は顔を上げた。

色素の薄い青みがかった銀色の髪。青い目。夜中を回ったのに、いまだ青と白のシーグル軍の制服を着て、高遠宗司は書類に目を通していた。

「凜がどうかしたのか」

顔を上げ、開口一番のその言葉に、一瞬、拍子抜けし、次の瞬間、夜は噴出した。

「なんだ、用がなければ帰れ。うるさい」

「ちっ、ちがつ……あのさー、そんなに心配なら、来ればいいだろ」

「傷は心配いらなと言ったのはお前だ」

涙目になりながらも夜は高遠の目の前まで移動する。

「凜ちゃんの傷は確かに心配ない。俺がみてるんだから」

「ならいいだろう」

そう言って、書類に目を落とした高遠の書類を横に移動させた。

「よ……」

「凜ちゃんはきみに向けられた恨みを少しでも小さくするために、自分が撃たれたのはわかってる？」

真剣な表情の夜に、高遠はため息を落とし、椅子から立ち上がった。それでも背の高い夜を見上げる格好にはなったが。

「ああ、知っている。そうでなければ、あんな至近距離まで詰めていて凜がわざわざ撃たれるわけないだろう。仮にも凜の射撃は空が見ているのだから。言いたいことはそれだけか」

「……死体はこなそうだね、よかった」

「は？」

「こつちの話。じゃあ、凜ちゃんのところへあの日以来こないのはなぜ」

「別に」

「別に？じゃあ、来てもいいなら、来て」

「忙しい」

「仕事？これくらいならすぐ終わるはずでしょ。いつもの高遠宗司

なら」

机の端に少しの山を作った紙の束を捲る。

「夜。何が言いたい」

「いらないものは捨てて、いるものを守ってください」

高遠の睨むような目が夜に向けられた。

「わかってるでしょ？」

夜もまた挑戦的な視線を返す。

「簡単にできるものならそうしている」

「簡単なことだと、思うけど」

「なっ……夜、お前」

夜は睨むように高遠を見据えた。

「何がきみと凜の間にあるのかは知らないし、俺にはそれは必要のないことだ。だけど、中途半端はやめろ。凜が自分を犠牲にする回数が増えるだけだ」

「なんのことだ」

「『自分がいるから凜が傷つく』そんないっぱしなこと考えてるん

じゃないだろうね？」

「本当のことだ」

「『自分がいないから傷つく』とは考えられないの？」

高遠が次の言葉を口にする前に、夜は身を翻した。扉を開け、振り返ることなく、言う。

「高遠がいないこの場が現実なのか、それとも夢なのかわからないと。寝て起きてもその境がわからないと。凜は痛み止め、麻酔、全てを拒否した。痛みだけが自分を保てるんだよ、今」

扉を叩きつけるように夜は閉め、姿を消した。

「なっ……………」

高遠は力いっぱい机を叩きつけた。

「……………凜」

10・少年太陽（前編）

「お世話になりました。夜さま」

いつもの笑みでお辞儀をし、顔を上げると、なんともいえない曖昧な笑みを向けた夜が立っていた。

「凜ちゃん……」

「大丈夫です。夜さま」

再度向けた笑みに夜は「でも」零す。

退院。結局、最後まで、医務室を高遠宗司が訪れることはなかった。凜はそれでもいいと思っているのに、目の前に立つ夜の方が気にしているくらいだ。

「凜！」

ああ、やはり。

「退院おめでとう。夜に実験台にされたらどうしようかと思っていたよ」

「空……お前、何度も言うようだけど時雨澤さまはいいのか？ いいんだよね……」

相変わらずのタイミングで現れる空に凜もまた笑みを零しながら

「ありがとうございます、空さま」返す。

「夜。わたしたちはこれで失礼するよ」

「おつさ。凜ちゃん」

「はい」

「……いや、なんでもないさ。また来てね、お兄さんがおいしいお菓子を用意して待ってるから」

「ええ、もちろんです」

凜が答える前に、にこやかに空が答え、夜はがつくりと肩を落とした。黒い制服を着たデコボコの二人が静かに廊下を去っていくのを、医務室の扉で消えるまで見送っていた夜は、そつとため息を落とす。

そして、その真意を零すことなく、医務室の扉を閉めた。

廊下は静まり返っていた。

「あの、設楽さまの具合はいかがですか？」

エレベーターに乗り込み、空が階数を指定して振り返ると下を向いたままの凜が開口一番に発したのはそれだった。

「凜よりも傷はいいところにあつたからね。処置済みです。現在は

獄中ですよ」

返事に凜は「そうですか」端的に感情を殺したまま答える。

「凜」

顔を上げた凜の表情に、逆に空は翳りを見せた。

「ありがとうございました。わたしは一度、部屋に戻ってから執務室へ向かいますので」

「りっ……」

止まり、静かに開いたエレベーターの扉をさつさと抜け、凜は振り返る。

「ありがとうございます。空、さま」

頭を下げた凜に駆け寄ろうとして、空の顔寸前のところをエレベーターの扉が閉まる。

左手でエレベーターの扉を閉めるボタンを押す凜の姿を見つけ、ため息を落とした。階数を静かに上昇していくガラス張りのエレベーターの下方に小さく黒い背中が見えた。

「凜……遠いね、きみたちは。僕や夜から見たらもどかしくて仕方がない」

時雨澤喜三郎が『どんなときでも感情を表してはいけない。我々は影なのだ』と、そう凜に教え込んだのは時雨澤から聞いていた。無論、空もそう教え込まれている。

そしてそれには無表情というポーカークフェイスではなく、無意味の笑みを選んだこともすぐにわかった。

凜はずっとその笑みを空に向けていた。

「本当に決めたんだね、凜」

ずっと静かにエレベーターは止まり、『目的階です』機械的なアナウンスに顔を上げた。

「お前は凜の方が大事なのか？」

待ち構えていた目の前の慄然とした面持ちの青年に、首を横に振る。

「忠徳さま。わたしは忠徳さまがいてさえしてくれれば、それでいいのです。ところで、峰岸さまが探しておられましたがお会いになりましたか？」

「探していることも知らなかった」

笑顔で忠徳を見上げた。

「10分後にA会議室へお伺いしますとお伝えいたしました。多分、配置変更の件だと思いますが」

時雨澤忠徳はその返事に一瞬、豆鉄砲を食らったような顔をし、それから噴出した。

「オレもお前がいればそれでいいよ、空」

その言葉に柔らかな笑みを浮かべ、空は忠徳をのせ、再度、エレベーターを動かした。

毎日、毎日、毎日。

無機質な空間であのひとのことを思わなかったことはない。

薄く青みがかった銀色のサラサラの髪。青い目。

青と白のシーグル軍の制服を颯爽と翻しながら、彼は自分より年上の者たちの中を切り開きながら歩き続ける。

高遠宗司。

それが彼の名。

幾度、心の中でその名を呼んだかわからない。それでも、その名は遠い。何度呼んでも、彼が隣に存在していても。けれど、高遠宗司のまわりには誰もいない。

気がついたときにはまわりはただ真っ白か真っ黒の闇の空間で、その中を彼はそれでも颯爽と歩み続けていく。

何も臆することもないその態度に、いつか、目的があるのだということに気がついた。

四位実継、藤波元帥、そして時雨澤忠徳。彼の上に立つ男たちはみなこのシーグル政府軍の歴史においても類まれなる存在だ。四位が言ったように四位実継、時雨澤忠徳は少なくとも近いうちにシーグル政府軍の最高峰である五人議会に立つだろう。

そして、その四位が高遠宗司を引っ張り上げる。

きつと、その真意を知ることのないまま。

「わたしも同じだろうけど」

苦笑いをしながら慣れたものになった自分の部屋の指紋認証システムに指を翳す。

（間違いなく、高遠宗司はこのシーグルという国を動かす五人議会の立場に立つ。）

「きつとその日は近い」

初めて会った高遠宗司に自分が『このひとは大成しない』と、そう思ったのは浅はかゆえの大きな間違いであることに気がついた。自分のような敵国の孤児をたったひとりの自分の秘書として迎え入れる、そんなのはただの気まぐれだろう、気まぐれでそんなことをするくらいだ、まず大成はしないだろう、と。

自分の部屋に戻り、新しい制服を下ろし着替えると、執務室へ向かうべく部屋をさっさと後にする。

高遠宗司が自分の見舞いに来ないのは、確かに気落ちした。しかし、それも夜に言い麻酔や痛み止めを止めてもらうまでのあやふやな記憶を行き来していた時間だけだ。

現実に引き止められるほどの痛みに、高遠が自分に『契約破棄』を言い渡していないことに気がついた。

くだらない傷を負い、高遠の荷物持ちさえできない、はつきり言っただけの意味などないのに。

それでも高遠は何も言わず、自分を医務室に放置した。

(つまり。)

軽く扉をノックする。

返事がないのはいつものことだ。

来客があれば、この一年間、凜が対応してきた。彼があまりに無関心だったため、それが凜の仕事になっていた。ゴマすりにくる男たちを軽くあしらひ、面倒ごとを極端に嫌う高遠からどうてもいいことは遠ざける。

「凜です。失礼いたします」

その結果、時雨澤に教え込まれたことは否応なく使う機会があったし、高遠の考え方も大分わかってきたつもりだ。

大抵、高遠宗司は他人と接するとき、不機嫌だ。それもどうかと最初は思っていたが、どうやらそれでもこの世界は滞りなく動いていく。もちろん、高遠が望んだ方向に。

「不思議なものです」

凜は呟き、扉を開いた。

最初に目に飛び込んできたのは、薄暗く物静かな部屋の扉の真正面に設置された窓が開き、カーテンが風に揺れている光景だった。

窓の前に置かれた高遠の執務机は物抜けのからだ。

ひとの気配もしないが、それもいつものことだ。苦笑を漏らしつつ、歩みを進めた。

必ずかける部屋の鍵も開いていたから、高遠宗司が部屋の中にいるものだと思っていた。

ふいに感じた気配に進めていた歩みを止め、来客用のソファを覗き込む。

「たか、とお……さま？」

銀色の青みがかった髪が視界に入り、慌てて背もたれの方から体を乗りだし、向いていた背中に軽く手を当てる。

「……生きてる……っていうわたしバカ……」

まったく気配がないからその光景を悪い方にとっていた。悪い癖だと思いながらため息を落とす。

次の瞬間、体が浮くのを感じた。

「へ？——っ！」

トサリ。

軽い音がして、目を開く。

「え？あれ？」

「相変わらずの天然少女健在か？凜」

至極まじめに耳元で発せられたその声に、体中が急激に火照っていくのを感じた。

「た、高遠さまっ!」

目の前にある銀色の髪。青いふたつの目。

「あばれるな、落とすぞ」

だから、一度、聞いてみたい。

落ちるではなく、落とす? 気なのか。いや、彼はきつと自ら手をかけ落とすだろう。背中に回された両手にしっかりと抱かれながら凜は目を閉じ、そんな思いに耽る。

「凜、痛むのか」

ああ。

『凜』と――彼がわたしの唯一の名を呼ぶ。

そつと目を開ける。

見つめていた青い目が微かに揺れている。

医務室でひとりで寝ていて気付いたことがある。

高遠は空と同じように、夜を信頼し、だから自分は医務室に行く必要もないとそう思っているのではないかと。夜を信頼していると

表情にも出してないだろうが……。

ここシーグルに来てから、全くといって彼の役になどたっていないのに、高遠は契約を一度も取り消そうとしない。

冷酷さはよくわかつている。彼の部下たちは何度も入れ替わる。

彼はそれを躊躇も容赦もしない。使えなければ五人議會、そしてこの国を統べる『MOTHER』に問い、答えとともに容赦なく切り捨てる。

契約。

彼は忘れてなどいない。ことあるごとに契約を増やすのだから。

挙げた選択肢を排除していき、最終的にいきついた答えに、自分の珍しいポジティブさにも苦笑したが。そもそもこの高遠宗司が関わっているのだ。せめてでもポジティブにいききたい。

「また、食事をしなかったのか。あれほど食べると言っていたのに」

「点滴を」

「あれは栄養価は高いが、凜を健康的にするには程遠いものだ。今日からしっかり食事をしろ」

「はい」

なぜか、命令口調が嬉しい。

何度も呼ばれる『凜』その言葉が。

「凜」

ああ、ほら。

「高遠さま。おやすみになられていたんですね、起こしてしまい申し訳ございません」

「寝てなどいない、それと凜」

「はい。高遠さま？」

「……………」

最終的にいきついた答えは。

どうやら、契約が遂行されないことに不機嫌になりつつある。

「宗司さま」

「なんだ」

表情は大して変わらないが、満足そうだ。

「宗司さま。ただいま戻りました。長い間、おそばを離れてしまい申し訳ございません」

彼は無表情で冷酷で冷徹なひとだと、みんなが言う。

だけど。

「凜」

ああ。

高遠宗司が、そのひとが目の前にいる。

「凜」

恍惚とする声。

彼はその名を呼ぶとき――。

「宗司さま。お茶をお煎れいたしましょう。それと、宗司さま」

わざと名を呼んでみる。彼がわざとしたように。

「なんだ」

「この間はご馳走さまでした。あそこのマフィンはとても美味しかったです」

「――凜」

「はい」

「射撃の腕を上げたな」

高遠はそう言って凜をソファ―に座らせ、立ち上がる。顔は見えない。

「……ありがとうございます。お茶、お煎れいたします、宗司さま」

「ああ」

高遠宗司は空が、夜が時雨澤喜三郎がそうするように、大切にわたしの名を呼ぶ。

気のせいかもしれない。

だけど、わたしが『宗司さま』。

その名を呼ぶとき、彼は。

シーグル政府軍の少佐ではなくなる。

紅茶を用意しながら、思う。

いつまでも続くものではないと。

今回、怪我をし、自分のことをそして高遠宗司のことを見つめなおす時間があった。それは必然で。高遠宗司が目的をもってここにいる。いつか自分と高遠は違う道を行くことになるかもしれない。あつてほしくない、けれどもこれも近くに現れる恐ろしい事実なのだろう。

高遠宗司が存在すること。ただそれのみを求める。

わたしは――。

復讐でもなんでもない。

時雨澤喜三郎が一番先に聞いたこと。

今は気付かなくてもいいと。それは人間にとって一番大切なことなのだろうと。この国の人間が一番先に求めるはずだったものだ。

わたしは、初めてあったときから高遠宗司さまが好きだ。

11 少年太陽（後編）

高遠宗司は凜の周囲を流れる空気がその瞬間、変わったことを見逃してはいなかった。

理由はなんであれ、凜が何かを『一生』と位置づけてもいいくらいに決定した、そう思ったのは、凜がトレイにのせたお茶を目の前に運んできたときだった。

自分は我儘だと思っているし、態度は大きいとは思つ。すべて自覚した上でのこの人格だ。

だが、凜は違う。

高遠は自分の席に着く凜のいつもと変わらない行動を一瞥し、頭を抱えた。

「オレ以上に頑固だからな……」

苦笑せざるを得ない。

どちらかというと、頑な。

何事にも真つ直ぐで、頑な。

信じることと偽るということを知っていて、悲しみばかりを知っている。

自分が弱いことを知っていて、強くあるうとしている。

最初に会ったときよりも、ずっと芯が強いとを感じる。

どんなに愚かな行為だとしても、信用すべきものは知っている。

「だが、間違った解釈でもきつとそれを信じ続けるな……」

それが自分が無口な方であるからという解釈につながり「変えよ

うがない」自嘲気味に呟く。

再度、凜を窺う。まったく自分のことを審議されているとは思わず、黙々と書類に目を通してている。

「まったく、なにを決めたんだか……聞いてもはぐらかされそうだな」

凜の教育係の時雨澤喜三郎（警吏の忠徳の実祖父）は本物の秘書官だ。その一番弟子ともなれば、へたすれば高遠でも凜の思惑を読み取るに至らない。

「元々、溜め込む性格だしな」

ここまで呟いて、部屋に違和感のある低い着信音が鳴り響く。

高遠は凜がそれを取るのを見て、苦笑いし、そのまま自分の身につがるだろうことを予想して、最終的にため息を落とした。

「高遠さま、四位副將軍より内線です」

「ああ」

机の子機をとる。いつからか四位実継からの着信音だけ微妙に低い音に変わっていた。凜が真面目な顔をしながらそれを設定した光景を浮かべると可笑しいが、凜をそれだけ怯えさせる四位も四位だ。

「はい、高遠です」

『宗ちゃん？今、暇？』

けだるそうな声はいつもと変わらず、一応、言ってみる。

「大忙しです。用件はそれだけですか？」

『ひどいなあ……飯にも上司に対して』

「飯ならよろしいでしょう？それで、どちらに窺えばよろしいんですか」

電話越しに満足そうな表情をする四位が見えたようだった。こちらは一変、げっそりだ。

『五人議会が開かれる。天井の間に来るように。じゃ』

プツリと電話が切れた。

「……は？」

四位の言葉を反芻。今、聞きなれない言葉があった。

「五人……」

口には出してはいけないような気がして、それでもその意味を間違いない方に汲み取り、徐に席を立った。凜が合わせて、立ち上がる。

「四位さまに呼ばれた。行ってくる。もし、戻らないようなら、先に……いや、待機を。必ず帰ってくるから」

「はい？」

今生の別れでもないのに、思いつめた表情で言ったからなのか、

凜が疑問系で返事をした。

いつもは片時も離さず共にいた凜を、初めて部屋に残してきたことに気がついたのは、いつもは自分で回数を指示しないエレベーターに声をかけたときだった。

「高遠宗司第一部隊長。きみを明後日をもち、シーグル政府軍副將軍に任命する」

シーグルで一番高い建物の、一番天井の高い、薄暗い部屋で高遠はその告知を受けた。

無論、異論などない。

そこに、なにがなんでも最速で近付くために、手っ取り早くわざわざ好きでもない軍になど入り、一番、そこに近い人物に接触した。

四位実継。

彼は高遠にとって駒でしかない。

だが、実際、四位にとっても高遠は一種の駒のように考えてるのだろう。どっちもどっちだ。四位実継の性格がひねくれ、本人も自覚し、近い言葉で言えば『その姿を演じている』ことくらい最初からお見通しだ。

『そんなところで止めとくわけないでしょ？五人議会まで引つ張りあげるよ。』

以前、凜の前で言った四位のあの言葉は、珍しく真実だったに違いない。

「ふっ……」

ひとりきりになった帰りのエレベーターの中で口元を緩める。

「ふ、ははっ……あははははははっ」

エレベーターの壁越しに背を凭れ、乾いた声で腹を押さえ笑い出す。

「とうとう、とうとうここまで来たぞ」

低い声で言い、再度、口元を緩める。

嘲笑。

自分の意図を何も知らず、まんまと目的地まで引き上げる審議をかけた軍最高位の指揮官たち、五人議会。そして、それを受理したコンピュータ、エム。

嘲笑。

一番の敵であるシーグル政府軍を利用する自分。

「あとはカモフラージュする人間を探すだけだ」

最終目的を達するにはさらなる『駒』が必要だ。五人議会の一員となった今、人事を采配するのはエムを除けば一番、優位な立場だ。

立場を失わないまま、目的を達するのは不可能だ。いくら自分に優位だとは言え、身の引き際と境界線はわきまえている。まだ、時間はある。

そう考えて、ふと、漆黒の真っ直ぐな目を思い出した。

そして、二本の交差する地面から生えたような腕を。

あの日からそれを忘れることはない。

「凜」

真っ直ぐ射抜くような彼女の目。

負傷し、夜のところで療養しているだけのはずだった。なのに、戻ってきた彼女の目は揺るぎない。

「凜」

小さな空間に呟いた声が広がり、そして消えた。

両手を強く握り、そして開く。

「この手の中にはなにもない。凜、きみも。契約の名の元にわたしの前に存在しているだけなんだ」

契約、実存しない、ただの言葉のみの関係。

真実を告げたら、きっと目の前から姿を消すだろう。残る確率を計算するほうが難しい。

手を離すつもりなどまったくもないのに。

「高遠さま、遅い」

休んでいた間の書類をひととおり目を通し、問題がないものはフアイリング。そんな作業を黙々と続けること数時間。すでに退庁時間をすぎているのに、数時間前に出て行った高遠は執務室に戻ってこない。時間はあってもこの部屋ですることはたくさんあるから、凜としては待つのは苦痛ではない。どちらかといえば、いつもこの執務室を適当に切り上げ、先に出て行くのは高遠の方で、部屋に戻ってもこの執務室の作業とそんなに変わらない状態の凜は、夕食の時間まで大抵、ここですごす。

だから非難するつもりは毛頭ないが、心配ではある。多分、察するに相手は高遠も苦手とする四位さま、だ。壁に掛かった電波時計を見上げる。

「四位さまに呼ばれて……四位さまは秘書がいないから聞きにくいし」

困った、首を傾げ、夕焼けに染まった窓の外に気がつき、徐に立ち上がる。

「久しぶりかな……夕焼けなんて」

高遠の机が置かれた後ろの窓に近寄り、大きな太陽と小さく後方に存在する太陽ふたつを交互に見つめた。

「手前がシーグルが作り出した太陽。もうすぐ月も出てくるから……この時間は空が賑やか」

人工的に作られた『シーグルの太陽』。そして『太陽』。
人工的に作られた『シーグルの月』。そして『月』。

一年もいながらにして、この瞬間に窓の外を見るのは初めてのことだ。

「はあ……すごいなあ……高遠さまは4つの星が出てるの見たことあるのかなあ」

あの高遠のことだ。何食わぬ顔で見てるに違いない。
凜はその様子を思い浮かべて微笑んだ。

「高遠さま……早くお戻りにならないかな……」

結局、なにをしても最終的にはそこに辿りつく。

「空さまに時雨澤さまの予定をお聞きしてみようかな」

四位と時雨澤忠徳は幼馴染と聞いたことがある。もしかしたら時雨澤の秘書である空ならなにか知っているかもしれない、そう考え、受話器をとる。

「……大事になりそうかも」

空のことだ。その顔を思い浮かべ、凜は受話器を置き、自分の席に着く。

「……待つてるように言われた」

それは真剣な表情で、珍しく動揺した様子で。

棚から本を出し、開く。大分、進んだところで壁時計を見上げる。

「夕食の時間、終わっちゃうなあ……でも、行つてる間に戻られたら困るし」

カーテンを閉めずにいるのは締め切ったこの部屋がひとりで寂しかったからだ。

太陽と月の移り変わる様子を、高遠の席の背後にある大きな窓で感じながら、ため息をついた。いつの間にか部屋は薄暗くなっている。

「今日はお戻りにならないのかな……四位さまとご一緒かな……」

なんとなくしに、立ち上がり、扉へ向かう。どうも落ち着かない。

「高遠さま……」

呟き、扉を開ける。

薄暗い月明かりに照らされるのみの廊下が三方向に向かって伸びていた。いつものように目の前の中空の空間には月明かりが差し込んでいる。

ひとの気配がしないことに肩を落とし、扉を閉める。

開けた。

「高遠さまっ」

見なかった壁際に、寄りかかるように腕組みした銀色の髪の手グール政府軍の制服を着た少年がいた。

「ん？凜」

少年も今、気付いたように目を向ける。その距離１メートル以内。

「お、お戻りでしたか。お、お、おつかれさまです」

見事な動揺を含んでしまった言葉に、すぐに自分で採点し、肩を落とす。突然の事態に空のようにサラリと交わしきれない。それも、高遠と四位にのみ。

「ああ」

何かを考えているところだったのか、高遠は腕組みを解いた後も、部屋に入る様子がない。

いつからここにいたのか。高遠の様子に不機嫌さがないことには
っとしつつ、凜は「お入りにならないのですか？」聞く。

「そういえば」

高遠は腕時計に目をやり、今度こそ眉間に皺を寄せる。

「夕飯、食べ損なっただな」

「高遠さまですか？よろしければ何かおつくりいたしますが」

高遠の目が見開かれる。

逆に慌てたのは凜の方だった。

「え、えええと。あの……いえ、おなかがおすきのようでしたら」

「……くるのか？」

「へ？」

「凜、作れるのか？」

大きめに言った高遠の言葉にやっと理解した。

「奎さまにおそわれましたので、大丈夫ですよ。ただ、食材にもよ
りますから、聞いてまいります」

「……軽いものがいい」

「はい」

食堂を借り、ミルク粥を作る。これは杳も納得してくれる凜の料理のひとつだ。料理、の域ではないかもしれない。器の中にたゆたうほのかな甘い匂いの食べ物。

「お料理は夜さまがシェフ並にお得意だから、今度聞いてみよう……」

執務室に湯気のたつたまま持つて行くと、高遠は窓の外の月を見ながら、椅子に凭れていた。

「ありがとう」

青い目が微笑んだようだった。

「凜は食べないのか？」

「え？……自分の分は考えておりませんでした。あとでなにかいただいてきます」

「その棚に小皿が入っている。それと引き出しに匙も」

言われたとおりに出すと、凜はそれをもって高遠の元へ戻る。

いつの間にか高遠の近くに丸椅子が用意されていて、そこに高遠は座るように促し、小皿を受け取ると自分のレンゲで何杯か小皿にミルク粥をよそった。

「ひとりよりふたりで食べた方がおいしいと聞く」

「高遠さま？」

無造作に小皿が目の前に出される。

高遠の返事はない。

「宗司さま」

「いただきます」

湯気のたった小皿を一瞥し、凜も匙を手に持った。

「いただきます」

無言のままふたりは月明かりのみに照らされた高遠の執務机の上で食事を続けた。

食事が済み、凜が食後のお茶をトレイにのせ、高遠の元へ戻ると、やはり高遠はなにか考えている様子で腕を組んでいた。

無言のうちに再度、出された丸椅子に座る。

「シーグル政府軍副將軍を拝命した」

投げやりな感じで端的に言われ、凜は聞き取った言葉を脳裏で反芻する。第一部隊長から副將軍。確かに、それが普通の流れではある。

ただし、異例の若さだ。

目を上げると、すでに高遠の深い青い目が窺うようにこちらを見ていた。見透かされているようではずかしくなるくらい、沈静した視線。

「おめでとつございます」

言うことは、とりあえずそれくらいだ。

「あと、五人議会のメンバーになった」

やはり、サラリと言われ、反芻し。はっと顔を上げた。

「五人議会の！？」

確かに、五人議会という議会でありながら、現在は警吏長と政府軍の位置が空席ではあった。ただ、それは今までの経歴（戦争の）も求められる。

ああ、でもこの政府軍には高遠宗司以外の策士はいない、そう思い、もっともな選択であると頷く。

どうしても異例の若さの任命だ、またあちらこちらの批評が相次ぐことだろう。

「警吏長として時雨澤さまが五人議会のメンバーに選ばれた。これで空席は埋まったな」

それは高遠のひとりごとだ。

「ところで、凜」

向けられた青い目は幾分か柔らかかった。

「はい」

「これから」

珍しく、高遠が言葉に詰まる。

凜は即座に立ち上がる。

「たっ、たかとおさまっ！」

丸椅子にぶつかり、その勢いで椅子が床に倒れる。

（高遠さまが副將軍になる。そして、この国で一番の地位に就く。）

そこには、もちろん優秀な秘書が必要なわけで。

（それは、四位さまは秘書を携えていないけど、必要とするならば、孤児であり敵国から拾われてきたわたしなんかのような粗忽者じゃないはず。）

一気に血の気が引くのがわかった。

「……なにをそんなに慌てているんだ」

（まさか、まさか、まさか。）

震える手で丸椅子を元のように戻す。それでも高遠の方へ視線を

戻すことができない。

「凜？」

背を向けたままで、その声はいつものように響く。

（決めたばかりだというのに。）

「凜？」

二度目の呼びかけは訝しげな声。

（契約を破棄されるまで、わたしは高遠さまのそばを自分から離れないと。契約を破棄されるまで、わたしは高遠さまを守ると。高遠さまがいることを許してくれている間は。必ず。）

「凜、座れ」

それでも振り返ることはできなかった。

頬を流れる透明な雫は、意思に反して、留まることをしない。

（泣くな、泣くな、泣くな。）

（笑え、笑え、笑え。時雨澤さまに教えていただいたように、いつものように！）

「凜！」

手首を勢い良く引かれ、体勢を崩したまま高遠の方を見向く。

「……………なぜ、泣いているんだ」

呆れられたような呟きに、咄嗟に顔を下に向ける。

（笑え。）

瞬間、触れた冷たい感触に勢い良く顔を上げる。

目の前に青い目があった。

銀色の前髪がサラリと揺れる。

「今度は、笑うのか」

そう言った高遠は、そつと頬を伝っていた涙を拭った。

驚いて、一瞬のうちに止まらなかった涙は止まっていた。

「たぶん、その解釈は間違っているな」

「え……………」

「……………凜。これからわたしが言うことによって、ここから出て行き
たくなったら、契約を破棄することを許す」

揺らぐ視線。

トンと両肩を上から押され、その場に腰を落とした。椅子の上に腰掛けたのを確認して、高遠が自分の椅子に座りなおす。

「わたしにはシーグル政府軍に入らなければならなかった目的がある。そのために、お前に出会った。凜」

「……はい」

「ああ。五人議会にまで入り、それでも目的にはまだ遠く、時間が掛かる。わたしの目的は――」

「シーグルの次代の声として連れて行かれた『千世』の奪還だ」

高遠はそこで一旦区切り、そしてつなぐ。

「わたしの妹『ちせ』の奪還だけが、わたしの存在だ」

（ああ。）

不安そうに見つめる目。

「なぜ、泣くんだ」

わたしは、泣いているのだろうか。

「宗司、さま」

「ああ」

覚悟したような高遠の表情に思う。

「宗司、さまがここに在る限り、わたしはあなたとともに」

もし、高遠が妹、千世を奪還したとして――。

待ち受ける未来は極刑だ。

もし、高遠が妹、千世を奪還する計画を立てたことが漏れたとして、そして失敗したとして――。

そしてそれに待ち受ける未来もまた。

磔刑なのだろう。

12・真実の嘘

「なぜ……」

戸惑いをあらわにした声は凜ではなく高遠が上げたものだった。

「凜。もし、わたしがその目的を成就したとすれば、お前にも同じ罰がくだるだろう」

「はい」

動揺に揺らぎ続ける深い深い、青い目も美しい。

だけど、凜はいつもの堂々たる風格をした、あの少年が好きだ。誰よりも突き抜けた頭脳をもち、ひとり一步先を歩くことを全く恐れない、彼が。

「わたしは高遠宗司副將軍の秘書ですから、もちろんです」

高遠は両手を握り締め、目の前に座る少女を見つめていた。

「あなたが」

凜は一旦そこで区切り、フワリと微笑を浮かべた。

「宗司さま。宗司さまに助けていただいた命です。契約を宗司さまが破棄されない限り、わたしはあなたとともに。宗司さまのために」

「凜っ……ちがう……違うんだ」

「違います」

立ち上がり、凜は高遠の傍に跪く。

見上げるように高遠の顔を覗き込み、咄嗟に抱きついた。

「り……」

「はい」

押し返すように加わった高遠の力の意味を、自分のとった行動がわかっていないわけではない。仮にも彼の秘書とは言え、身分の違いは痛いほどわかっている。

「宗司さま。あなたとともに受ける刑なら、なにも恐れることはありません」

「凜、わかった。とりあえず、離れろ」

「はい」

素直に指示に従い、少し離れ跪く。

高遠がばつが悪そうにほのかに染まった頬を隠したが、凜はそれに気付かず、顔を上げた。

「宗司さま？どこか具合でも……」

「お前が急に抱きつくからだ」

「はい？」

「なんでもない」

「具合がよろしくないようでしたら夜さまのところ……」

「死んでもいいかい」

（相当、嫌われているな……夜さま。）

内心、苦笑をしながら高遠に「わかりました」答える。

「お前はなにもわかっていない。わたしに待ち受ける未来は『死』のみだ。五人議会の一員になることで、わたしの目的は開始された。明後日、その日が来れば後戻りはできない」

「はい」

即急に返事をしすぎたのか、高遠の眉間に皺が寄り、咎めるように言葉を続けた。

「凜。まだあるんだ」

今度は黙り込み思案を続ける凜に高遠は苦笑し、自分には嘲笑をおくりながら立ち上がった。

「ああ、月がふたつ出てるな。どうりで明るいと思った」

窓から空を見上げ呟く。

「今日は空がにぎやかだ」

ああ。

この少しの時間が切なさすぎるほど幸せだ。

このひとを失うのは嫌だ。

それがどんなに先のことだろうと。どんな近い未来になろうとも。

「凜？」

見上げると月明かりに照らされた高遠の薄く青みがかった銀色の髪が朧に光を放っていた。

この状況は似ている。

あのとときと。

初めて会った日。陣営に抱きかかえられて行き、腫れた足を手当てされ、一緒にベッドに横になり眠ったアルファでのあの日。簡単

に作られたテントの窓から差し込む月の光に照らされた高遠は儚く、綺麗だった。

「あのとき、わたしが凜の元へ訪れたのは偶然なんかじゃない」

高遠の言葉に、今、ふたりが同じときにいるのだと知る。

「お前を探していた、凜」

口を噤んでしまったのは、すでに思い当たる節があるから。

「お前の本当の名前はなんという?」

やはり。

知っている。

『凜』がわたしを存在させる名前でないことを。

驚くべきことではない、目の前でいつの間にか視線をずらすことをしなくなった高遠さま。初めてあったときからいわくつきの目で見ていたじゃないか、四位実継という人間は。

そして、名前を口にしただけで、態度を変えた、老師。藤波元帥。

みな、知っていたのだ。

なんらかの形で。

なんらかの意図を持って。

一年前のあの日、知らずに運命に導かれたのは、わたしだけだった。

「この国のエムシステムには必ず『声』がいる。わたしの妹『千世』は生まれてすぐ、声になるための施設へ連れて行かれてしまった。さっきまでこの腕の中で泣いていたのに……」

高遠は赤ん坊を抱く格好をし、懐かしそうにそれは愛おしそうに空虚の場所を見つめた。

「母は千世を生むとそのまま亡くなってしまったからね。父が亡くなったことで随分、衰弱していたから」

傷ついたのはきっと、高遠だけだったのだ。唯一の同じ血をひくものを目の前で奪われたのだから。

だから、高遠はここにいる。その目的を果たすための強い信念をもって。

「声。彼らは言葉の意味を知らず、知ることを知らず。エムのためだけに生き続ける人形。エムが『いらぬ』とはじき出すまでずっとその任務に就かなければいけない。『いらぬ』それは『声』の死を意味する。千世がつれていかれたのは今の声が就任するに伴いエムが千世を次の声として選定したからだ。今の声の前の代の死に伴う声の交代、そして次の候補として千世」

低い声で呟く「いやな連鎖だ」。

まったくだ。

きっとそのたびに、その時代に泣いてきたひとたちがいたのだらう。

そう。

きっと、あのひとたちも。

「代々の声の生い立ちや情報は公開されない。声としての役職がもつ特殊性によって、選定もなにもかも秘密裏に行われる。千世のときと同じように」

時々、彼の表情が曇るのは、きっと連れて行かれた妹のことを思っているのだろう。

「前代の声の名前を……」

「『凜』といった」

反論も、声さえあげることもできなかったのは、彼がしっかりと聞き取れる強さの声で言ったからだ。そしてそれに返事をする術を持ち合わせていなかったのも、然り、で。

「凜」

高遠が呼ぶその声はわたしへと向けられたものだ。

「あのとき、きみが『凜』と自分の名前を口にしたことで、少なからず五人議会は慌てて臨時議会を設けただろうね。四位さまの意図するように」

「……そこまではでしょうね。宗司さま」

一瞬、驚いた表情を向け、高遠は苦笑いする。

高遠さまは、わたしの前で表情を偽ることをしない。

『本物の秘書官にわたしのごときがポーカーフエイスを浮かべても、結局、すべてお見通しなんだよ。無駄な努力はしない』と。だとしたら、高遠はわたしを『本物の秘書官』として試みているのだろうか。

今も昔も、高遠は他の人間と接するようにはわたしに接しない。

それは。

ただ、契約者だからなのだろうか？それは。

ただの……

「きみはお兄さんのことを知っていたのか？」

目的へと導く駒のひとつだからなのだろうか？

「きみには兄が存在していた。その様子だと『りん』という名の「

『兄』その存在に首を左右に振る。

「前代の声は若くして亡くなった。施設に預けられたときから体が弱かったそうだ。アルファからさえも次代の声を選定し連れてくるとは……」

「いいえ」

きつぱりとした返事に高遠が見つめ返す。

「父と母は元々、この国の人間ですから」

「そうか」

高遠は兄とわたしの存在しか知らされていなかったのだろう。『声』のことについての情報は間違いなくしっかりと管理されている。

「兄のことは……本当にわたしは知りませんでした。あのとき、あなたたちが『シーグル』だとわたしの中に入ってくるまで、思い出しもしませんでした。兄のことは父と母が伏せてきたことです。たまたま、わたしが家の掃除をしていて仕舞い込まれた写真を見てしまっただけです。最初はわたしの子供の頃の写真かと……でも裏に『鈴』と。一番奥の隅に隠すように置かれていたのに、それは大切に、大切に木箱に包まれて……」

両親に問えなかったのは、それが重く彼らを支配しているのだと様相で察しがいったからだ。

「『鈴』」。

あれが実の兄だと、そう臆には思っていたものの、処遇は尋ねることができなかった。安易に口にできる名前ではなく、両親が死んだと知って、そして目の前の青年や取り巻く環境が『シーグル』という国になって初めて、やっと自分の中に存在が明らかになってきた。

「『鈴』」

不意に高遠が呟く。

同じ発音なのに、いつも呼ばれる自分の『仮の名』とは違うように聞こえる。

高遠がわかってやっていようと、わからなくてやっていようと、

凜はそれが嬉しかった。

『凜』。

それが高遠の中に存在する唯一の『リン』であるようだ。ただ。

「兄は……亡くなったんですね」

「ああ」

「兄は……父と母は、やっと会えたのでしょうか？」

自嘲気味に言い、視界がぼやけていくのを感じた。それでも口を開くことを止めなかった。

わたしは何も知らない。

兄のことを。父と母が兄をどれだけ思い、そして隠してきたかを。貧乏ながら、日々の生活の穏やかさに隠されていた痛みを。

わたしは、なにも知らず生きてきた。

「……っ……兄は亡くなったんですね……」

目の前に現れた二本の交差する腕。

新しく現れたもうひとつの小さな手、青白い腕。

いつの間に、わたしは父さんと母さんの顔を、あの光景でしか思

い出せなくなっていたのだろうか。

「……ック……ウッ……ヒック……」

また、高遠に呆れられてしまう。泣いているのか、と。

フワリと触れた少し冷たい両頬の感触。

「……つまつ、のっ」

（ちっ、近い！）

「……宗司さまっ！」

困ったような表情が目の前にあった。

「まだ、宗司と呼んでくれるのか？」

「……っ？」

「天然少女は健在なのか……凜と呼ぶぞ、凜」

「え？」

「お前は本当の名をわたしに明かす気はないのか」

それには首を立てに振った。高遠が見事に頂垂れた。

「では、凜。わかっていない状況を教えてやろう。四位さまの意図を利用してさらにわたしは次の目的を得るべく行動した。つまり、

お前を利用したのはこのわたしだ」

(……偉そうに、言われても……。)

「はい」

「凜、お前を利用したんだぞ？」

高遠さまは本当は。

「凜」

優しい。

自分からは突き放せない。だから、嫌ならば消えてくれ、と言
う。

「凜？」

人とのつながりが、代償のないものだ、怖くてしかたがないひ
と。だからこそ『契約』。

「宗司さま」

だから、きつと無償の『ことば』はただの『言葉』でしかなく、
あなたはそのつながりがいつ切れるのか、怖くて仕方がない。それ
に気がつかなかったわたしのように。

「凜？」

自信満々で、自己中心的で。誰よりも前を向いて歩き、臨機応変に従わせ、静かに目的へと着々と近づく策略家で。

ならば、しばらくの『嘘』を。

それが高遠さま、あなたの不安を少しでもなくすことになるならば、これは誰も痛くない、嘘。

「わたしは兄の復讐のために、高遠さま。あなたのもとに」

深い深い青い目が真実の嘘に静かに微笑んだ。

13・振り向くとき

「空さま！」

わかつていた事態なのに、すでに心細い。目の前の壁のような人間が動いたと同時に突如、現れた空に嬉々とした声を上げた。

空もまたさわやかな笑顔で手を振り返す。

「凜。早かったんですね」

足早に近付いた空は、あっという間に凜の両手を取り、笑顔を見た。

「はい。五人議会の任命式に遅れては大変ですから」

「そうですね、わたしもいつもより早く起きて時雨澤さまを起こしてきたところです。あの方は朝が極端に苦手なんですよ」

空は嬉しそうに微笑む。

凜以外の人間が見ても、その仕草は優雅だ。先ほどから数名の給仕の女性たちが頬を染めて空を横目で見ていくのを空は知ってか知らずか。

「わたしも凜も、とうとうこの国のトップに立ってしまいますね」

曖昧な笑顔を返した。

空はいい。

元々、誰も近づけないほど卓越した認められた秘書だ。

（高遠さまが目的に近付くのは非常に喜ばしいことだし、自分がそばにいられることも願ったり叶ったりだ。が……）

「わたしは不安で昨日は一睡もできなかったんです。ですので、朝一番で時雨澤さまを起こしに行って差し上げたら相当嫌な顔をされましたよ」

「え、空さまでも？」

「もちろんです」

偉そうに返された。

「これからもよろしくお願いいたしますね、凜」

「はっ、はい！こちらこそっ」

颯爽と背中を向け、歩き出した空の行き着く先に青と白のシーグールの制服を着た背格好の大きな男。空を待っていたように、小柄な空が隣に立ち、穏やかな表情を向けると男も緊張を解かれた表情になる。

「時雨澤さまも緊張……してるんだ」

「時雨澤さまがどうかしたのか」

背後から急に声が降りかかり、慌てて振り返る。

「高遠さまっ」

そこには一年で急に背が伸びたのか、それでも年頃の青年たちよりも少し小柄で華奢な、しかし横柄な態度を改めようとはしない高遠宗司が立っていた。

「時雨澤さまのこの空と話していたのか」

（あれ？なぜだ……）

「はい。わたしが不安そうな表情をしていたので、声を掛けてくださったのです」

「空とは仲がよさそうだな」

（気のせいかな……）

「はい。色々、お気遣いいただいております。それに学ばせていただくことも多いので」

「……わたしに聞けばいいだろう。何が不安なのだ」

「はい？」

呟かれた言葉が聞き取れず、思わず一歩、歩み出る。

「いや。行くぞ」

「はい。あ、高遠さま」

（どこか不機嫌になっている。朝はそうではなかったのに）
いつの間に不機嫌になったのか、首をかしげながら、高遠の右胸に差したシーグルの紋を手で直す。

「はい。行きましょう」

（あれ？）

「高遠さま？具合でも……夜さまの」

「死んでもいいかない。いくぞ」

（機嫌が直ったなあ……何かいいことでも思い出したのかな。）

結局、凜は「いいか……」呟き、前を歩く青と白の制服に遅れをとらないように、小走りに歩を進めた。

怒涛のような公務が待ち受けていた。

前もって公務の予定がわかっていたから調べようもあつたものの、全く意味がわからないのではしゃれにならないほど知らない単語が組み込まれている。

公務を『単語』と訳すしかないほど、凜は項垂れていた。

合間を縫っては、時雨澤喜三郎に聞いた書物を探しに図書室へ向かう日々が続いている。

もはや、凜の格好はこの建物内のちょっとした名物になり始めているが、凜はそれを知らない。

そんなある日。

「ちょっと、そのアナタ！」

ありえない。幻聴だ。小さな女の子の声が聞こえる。

「夜さまに相談しようかな」

「ちょっと！無視する気！？」

「はっ……」

黒い制服の裾を引っ張られた気がして慌てて振り返る。その拍子に脇に抱えていた本の内、一冊が廊下に落ちた。すでに両手、数十冊がのっているのに、この体勢からしゃがみ、持ち直すのは不可能に近い。

しかし、そこに見えた光景に「錯覚……」呟いた。

「あなた、その紋はシーグル軍の秘書官でしょ？ そんなにぼーぼー……としてて大丈夫なの！？」

栗色の緩いウェーブのかかった長い髪を抑えながら、廊下に落ちた本を取り上げ、凜の両手に積まれた数十冊の本の一番上に背伸びをしながらのせた。

「ず、随分、若いね。あなた」

背伸びをした拍子に隠れた本の間から見たのか、少女は驚いたように言う。

「あ……ありがとうございます」

ちなみにこれは、本をのせてくれたお礼だ。凜はいつものように笑顔で返す。

「……っ……」

なぜか少女は真つ赤になって閉口した。それはさておき、ここはこの国の中枢の軍事部隊専用の建物だ。凜は考えを巡らせる。

この少女がここにいることはすでに緊急事態だ。

なにが、どうあれ。研修のため、若い秘書官やまだ少女と違うない年頃の子供も出入りすることはある。が、みなそれ相応の制服とIDカードを所持し、検査を受けた上でしか入れない。

凜は、目の前に仁王立ちをしたままの少女に再度、目を向けた。

「あなた名前は！」

今度は偉そうに指を指された。

「凜です」

「わたしは沙羅よ。沙羅って呼んでちょうだい、凜」

栗色の髪 of 少女は首を傾げる。

「高遠さまのところの秘書ね！」

待つこと数十秒、少女、沙羅はきらきらとした視線を向けた。

（御幣がある……これは……）

「高遠さまはお綺麗な方だわ！昔から、孤高の鷲のように気高く素敵な方」

周りからの視線が奇異なものであるとは思っていた。その性格と性質と。能力は誰もが認めざるをえないものだったけれど。

高遠宗司は誰よりも上に立つものだ。

それ故に彼の周りは歩けば歩くほど敵だらけだ。

一蹴するならまだしも、高遠はそれを省みず、関係ないとばかりに見ない。だから余計に敵を作っていく。

だから、彼女のような存在は稀だ。

「あの、高遠さまのことを知っていらっしやるんですか？」

「もちろんよ！あの方を知らないなんて軍事部のモグリよ！」

言い切られ、苦笑いするしかない。

誰だかわからないがこの少女は高遠宗司に好意を抱いているらしい。それも、たぶん、自分と同じ種の。

そう思っ、胸がチクリと痛んだ。

「凜？どうかしたの？」

「いいえ。あの、沙羅さま？」

少女、沙羅はきつと良いところの出身なのだろう。身に纏うシックだが、彼女を引き立てるベージュのワンピースは布地もデザインも、凜が一目見ただけでもわかるほどしっかりしたものだった。

小さなレディーだな、と凜は思う。

「何かをお探しですか？」

沙羅はその一言にほっとしたように顔を綻ばせる。

女の子。

（一生、戻れないことに安堵し、一生戻れないことに残念がるなんて。）

いつか高遠の隣に立つだろう、自分とは違う『女性』の存在。

「わたしね、ひとを探していたのよ」

そう。たとえば、彼女のような。

「そうですか。それでは、わたしも一緒にお探ししましょう。少しなら時間がありますので」

「ほんとう!？」その表情に再度、心が痛む。

「お名前はなんと言うのですか？」

「素敵な方なの、……たぶん」

「沙羅さまっ」

聞き覚えのあるさわやかな声に、折角なので振り返る。もしかしたら、彼ならすぐに沙羅の……

「聞き違いではなければ、今……」

「その書物に埋まっているのは凜？本当にこんな格好でいたんだね。わたしに言ってくれば手伝ったのに。警吏局にもきみの噂が。ああ、こんなに手に持って。ほら、かしてごらん」

「奎さまっ！」

ああ、さらなる誤解なのかもしれない。

彼女の探し人は間違いなく、この政府軍内の女性の半数を虜にしているだろう『素敵』な人だ。

この少女の目はまるで……

『恋する少女』そのものだ。

「奎さま、おもたくはないのですか？沙羅も持ちましようか？」オロオロする恋する少女に奎はいつものように「沙羅さまは女性なのですから、こんな重いものをもたせるわけには参りませんよ」答え、少女は真っ赤に頬を染めて閉口した。

（それでは、わたしが『女』のようなんだけど……高遠さま以外に唯一、知っているのは夜さまくらいだと思うけど。それは、あとで考えよう。）

凜は遠い目をして頷いた。

「空さま、今日はどうしてこちらに？」

数十冊の本を引き受け、空はそんなに体格がよくはないのに軽が
ると歩いている。その先に沙羅が真っ赤な顔をしたまま可愛い
姿で空をひたすら見つめている。

「夜に時雨澤さまの薬を頼んでいたので、取りに来たんですよ」

「時雨澤さまはどこかお加減が悪いんですか？」

あのがっちりとした体格の時雨澤忠徳がベッドで熱にうなされて
いる姿など想像がつかない。

「いえ、睡眠薬なんですよ。近頃、よくお眠りにはなられていない
ようですから」

それこそ想像がつかない。不眠、なんて。

「あのバカ兄貴ったら、空さまにそんなことまでさせて信じられな
いわ」

目に入った沙羅の口をすばませて言う姿は可愛らしかった。

「あはは。これも仕事ですから。沙羅さま、時雨澤さまを怒らない
でやってくださいね」

凜が立ち止まり、それに併せて空と沙羅が立ち止まった。

「あにき？」

呟いた言葉に、沙羅が首を傾げる。そういえば、この切れ長の目は。

「あなたのことはおじいさまからもよくお聞きしていてよ、凜」

「あの、おじいさま？とは……」

「あら。喜三郎おじいさまよ？あなたでしょ？喜三郎おじいさまの一番弟子って。確か、凜って言うってたわ」

「そうですよ」不思議そうな沙羅に代わりに空が柔らかな笑みを向け、やはり沙羅は真っ赤になる。

「時雨澤さまの妹さまっ！？」

「沙羅よ。妹なんかじゃないわ」

切れ長の目は言い切る。

「わたしの空さまを横取りして、あんなの兄貴じゃないわ」

世の中はよくできている。

「凜」

どんな状況に陥ろうとも、その声だけは判別する自信がある。

「高遠さま」

果たして、わたしはこの言葉を紡ぐときにどんな表情をしているのだろうか？

栗色の髪の可憐な少女のように、頬を染めて、きらきらと目を輝かせて……

そうでなければいい、と思う。

それが高遠さまにわかってしまえば、今の位置にいることはできなくなる。

小さく息を吸い込み、顔を上げる。

自分は高遠宗司の隣にいる手段をひとつしか持っていない。

「図書室へ行つたと聞いていたが」

「はい。お呼びでしたか？申し訳ございません」

女の子に戻ることは許されない。

それが彼の隣に立つ唯一の方法の中の条件。

『契約』

空の背後から現れた銀色の髪、青色の目のシーグル政府軍初の若干、16歳の副將軍は訝しげな表情で空を一瞥した。

「わたしが持つていこう。お前にはお前の用務があるだろう、橘」

さつさと空の手から本をとり、凜へ顔を向けた。

「もういいのか」

「は、はいっ。あのっ、もちますので！」

慌てて駆け寄るが、高遠はそのまま身を翻し、すたすたと歩き始めってしまう。

「空さま、ありがとうございます。沙羅さまも、本を拾ってください
あってありがとうございます。失礼いたします」

ふたりに頭を下げ、凜は小走りで高遠を追った。

「嵐のような……ふっ……」

表情を崩した空は声を殺して笑う。

「空さま？」

「いいえ。わたしたちも戻りましょう。それにしても、沙羅さま」

「なに？」

「だめですよ、凜は」

今度こそ、驚いたように沙羅は茹蛸のように真っ赤に顔を染める。
全身が真っ赤になったかのように一色。それは綺麗に。

空は再度、振り返る。

青と白の制服を着た、軍隊にはそぐわないような綺麗な容姿をした青年。

その後ろを小走りについていく華奢な、まるで少女のような少年。

「凜、はだめです。あのひとでないと」

「あのひと？」

「夜にでも聞いてもらいなさい」

空はこの少女が自分に兄的視線を向けていることを知っている。
どんなに忠徳を悪く言おうが、それは尊敬に値するものへの意思を
ごまかしているにすぎない。沙羅は近寄りがたい兄に近付くために、
兄に一番近い、一番近寄りやすいものとして自分を選んだのを空は
わかっている。

「夜は苦手だわ」

「知ってます」

「……時々、空さまが意地悪に見えるわ」

「そうですか？それは失礼いたしました。ああ、早く戻らないと時
雨澤さまとの食事に遅れてしまいますね」

「いいのよ、兄貴なんて……ごまかしたわね、空さま」

勘がいいのは祖父譲り。

「あはは。でもこれは本当ですよ。急ぎましょう」

「凜」

後ろ髪を惹かれるように沙羅が呟いたのを、打ち消すように背中
を押し、空は「急ぎましょう」言う。

「それにしてもあんなに睨まなくても」

奎は少し呆れたような視線を送り、沙羅とともにふたりとは逆方向に歩き始めた。

14・蝶々遊戯（静）

華やかな服を着た栗色の髪の少女が駆け込んできた。

凜は何事かを判別する前に席に座った高遠の前に飛び出た。自分の使命は高遠と共に立ち、守ることだと思っていた。それ以上を望まず、それ以下になることもできない。

胸元から、あの事件以来携帯している銃を出そうとして、その声に我を取り戻した。いつの間にか隣に立った高遠は訝しげな表情のまま、凜を取り出そうとして掴んだ銃を片手で止めていた。

「……すみません」

「いや」

小さな声で交わした会話は目の前の嬉々とした表情をした少女には聞き取れなかっただろう。

「凜！食事に行きましょう！」

「凜は職務中だ」

即答したのは訝しげな表情のままの高遠だった。

「高遠さまにはお聞きしていないわ。それにもうお昼を回っていいよ？凜、行きましょう」

「凜は今、わたしと職務中だ」

「それならば高遠さまもご一緒すればいいことでしょう？」

「お前はいつも強引だ」

「嬉しいわ、覚えていただいて。高遠宗司さま」

優雅に笑みを見せた。

凜には頭痛の種でしかない。そして、決まって始まる吐き気。

「……風邪かな……」

どちらも全く引く気配もなく、凜の目の前ではリスミカルな毒舌が繰り広げられている。もちろん、凜の呟きに気を向ける気配はない。

なぜだか、栗色の髪の少女、時雨澤沙羅は昼時になると必ずノックもなく、駆け込んできた。そして、なぜだかわからないが高遠宗司と火花を散らす。まるでライバルのように。

尊敬する兄とともに五人議会に立つ高遠宗司をライバルと見るのはわからないでもないが。沙羅が空に恋心を抱いているのではないかと、密かに思っていたところ、思っていただけなのに橘 空に沙羅が自分の兄に対する尊敬の意味を込めて空に近付くのだと説明をされた。

空にはどんな手段を使っても見透かされることに、若干、閉口しながらも頷いた。

そうになると、今度は高遠宗司だ。

凜の心配も虚しく、彼女はあれから毎日昼時になるとどうしてかここに来た。

学校が休みの間、続くこのわけのわからない引き合いを見続けなければならいとなると、さすがの凜も夜になると別の疲労が溜まっていることに気付いた。

（沙羅さまは高遠宗司さまに近付くためにわたしに近付いてる。）

意味のない言い争いを続ける中、高遠の隣に閉口したまま立った凜は腕時計を確認してため息をついた。

（そろそろ頼みの綱が来る。）

「沙羅さまっ！」

「ほら、迎えが来たぞ」

「空さまっ」

頬を染めた沙羅に、凜はやはり空の解釈が間違っているのではないかと感じることもある。

いつものようにさわやかな笑顔を振りまきながら空は沙羅を半ば引き摺るようにして戻っていった。引き摺られていくときでさえ満面の笑みを忘れない。さすがお嬢様だ、凜は感心しながら光景を送る。

「凜」

「は、はい」

「昼にしていぞ」

今日の昼用務をしつかり終えたばかりに、高遠は端的に言い、自分の仕事へ戻るべく席に座り直し、四位から朝手渡された分厚い資料に目を落とした。

「少しはずします」

言われたら行かなければいけない。凜の華奢な体を毎回、相当気にしている高遠は、なにがなんでも凜に三食、きっちり摂らせる。一回でも外そうものなら、一日中、機嫌が悪い。凜は机に戻り、自分の本とコートを手にとると部屋を後にした。

「……高遠さまは沙羅さまのことどう思っているのだろう」

ひんやりと冷え込んだ廊下を歩きながら、コートを羽織る。

真昼の月が白く浮かんだ空に感嘆の吐息を吐きながら、建物の中
空の窓からそれを見上げた。

「白い月だぁ……」

高遠はこの月を知っているのだろうか？

二つの太陽。二つの月が同時に出て『空がにぎやかだ』そう言っ

た高遠を思い出す。

きつと、この世界中で高遠がそんなことを言ったのを聞いた人間はいないに違いない。

沙羅の顔を忘れ、凜はそつと微笑む。

「高遠さまはこの月を見てなんておっしゃるんだろう」

ふと、自分たちの間には私的な会話がほとんどなされないことに気がつく。

「沙羅さまとだったら……」

ひどい吐き気がした。胸の痛みは尋常ではない。眩暈を起こしかけ、中空の硝子に手をつき、寄りかかる。

ここはまだ政府軍内だ。誰に見られているか知れない。弱った姿を見せるのは、高遠にも、そして自分にも不利だ。

「まだ、時間……一度、部屋に戻ろう……」

静かに深呼吸を繰り返し、徐々に戻った血の気にほつと息を吐く。体を引き摺るようにして自室に戻り、タイマーを掛けてベッドに横になる。冷や汗が背中に流れたが、気にする隙間もなく倒れこんだ。

部屋からもまた白い月が見えた。

コンピューターに制御されたドームの中に建った国、シーグル。

今日の空は人工的に作られた空だ。日の光は全くないのに、雲に覆われた空は白く、そして昇ったままの月も白い。

「エムの点検日……今日だったっけ……」

再度、大きくついた息に安堵した。

少し眠ろう、静かだから。

そんな考えが脳裏に浮かび、目を閉じる。

沙羅が現れてから眠れなくなった凜の頭は、久しぶりに押し寄せる極度の睡魔に勝てるはずもなく、薄暗い部屋の中、すぐに静かな寝息が聞こえ始めた。

「——凜」

心配そうな呼び声。

そつと額に当てられる冷たい感触は気持ちがいい。このままこうしていたいと、徐に額に手を伸ばした記憶がある。

「凜」

ああ。

なんて素敵な声なのだろう。

いつの間にか呼吸が楽になる。

さっきまで見ていたあの二本の交差する腕と、その手をしっかりと握るように新しく加わった小さな手は見えなくなっていた。

変わりに風にそよぐ銀色の長い髪が見えた。

「凜」

白い月を見上げ、そして高遠はベッドに横たわる黒い制服の華奢な少女に目を移す。眉間に寄った皺は普段の高遠だったら現すことなく、目の前の事情を処理しているところだが、高遠はそれを隠そ

うともせず少女のそばに座っていた。

凜のそばで表情を隠してもなぜかいつもお見通しだ。たまに解釈を間違うこともあるが、それは間違ってくれたままでいい。

「なにが、苦しいのか」

凜は起きる様子はない。

すでに時刻は退庁時間を回っていた。高遠は昼休みを過ぎても戻らない凜に、わずかに焦って部屋を出た。

運悪くすぐに四位からの呼び出しをくらい、後ろ髪を引かれる思いで四位の用務へと向かった。部屋に戻ってきたら凜がにこやかにお茶を差し出してくれるのを期待して。

胸騒ぎは大きく膨らむばかりで、早々に切り上げ、四位に若干の文句を言われながらも無視して五人議会后にした。

しかし、悪い予感は的中した。

薄暗い部屋の窓から見た白い月。

「……あれほど恐ろしいものはない」

静か過ぎて。

なにもかもが捨てられてしまった廃墟の未来のようで。

凜が行く場所はどこにもない。

この国には身よりもなく、行くとすれば馴染みになってしまった
医務官、片倉 夜のところくらいだ。

あとは……

「橘 空には渡さない」

この状況を空に察しられるのは嫌だった。夜のところに行けば、
ついでに空のところに凜がいるかどうかくらいはわかるだろうと慌
てた素振りを隠し、夜のところへ向かった。

医務室は鍵が掛かっていた。

そういえば、と、考えを巡らす。

シーグルの最後の砦と言われる臨海線での常駐医務官たちの健康
診断と、技術向上のための研修へ1週間ほど出かけると凜に言われ
たことを思い出した。

自嘲する。

「情けない」

凜のことになるとこうも取り乱してしまうのか……夜のところに
いなければ、あとは一箇所しかない。

彼女が唯一、休めるだろうところ。

あの笑顔を向けたところ。

凜の部屋から見た白い月が、死んでいるのではないかと思わせるようなベッドにうつぶせで倒れこんだままの凜を青白く浮かび上がらせていた。

恐ろしかった。

廃墟どころの話ではない。

駆け寄り息があるのに安堵した瞬間、凜は何かにうなされ始める。

慌てて凜の細い手を握り、長めの漆黒の前髪を掻き揚げてやる。何度か名前を呼んでいくうちに、安らかになった寝息に、やっとのことで高遠は安堵した。

「——なにが不安なんだ、凜」

悔しいことに、凜の窮地を救うのはいつも橘 空だった。凜が随分、空を頼っているのは目に見て分かる。

「白い月は嫌いだ」

「いつもなにかをなくすときは白い月が出ていた」

「だが、凜を渡すつもりはない。エム」

睨み付けるように白い月を見つめた。手を握り返され、高遠は凜に目を向けた。

「凜」

この声は夢の中にいる凜に届いているのか。

「凜」

『凜』それは最初から彼女のための名前ではないことはわかっていた。わかっていて、彼女をそう呼び続けた。そのうちそれは彼女の存在そのものをなしえていくようになった。

どこにいても、『凜』その名が漏れれば聞き耳を立てる。

『凜』は彼女そのものだ。

高遠は思う。

自分は『凜』以外の彼女を知らないし、これから先、知る必要がないのなら『凜』は『凜』であればいいと。

何度も呼ぶ。

それは『凜』を自分の隣につなぎとめる為。

『宗司』。

『凜』にそう呼ばせるのは、自分を保つため。そして彼女の中に印象的に自分を焼き付けるため。

すべては、彼女を自分の元につなぎとめるため。

それでも。

すべてが終わったとき、凜が自分の隣にいつものように佇んでいる保障などない。

「白い月は嫌いだ」

「綺麗だが、儚い。白昼夢を見ているように。そう……凜と初めて会ったあの焼け野原で、きみが生きていることと同等のように」

高遠はそつと凜の頬を撫ぜた。

「——凜」

それはどこまでも甘い響きを持った声。

15・蝶々遊戯(動)

「今日は休んだらどうだ」

部屋に入るなり、高遠から容赦ない一撃が加わった。

昨日、目を覚ました時間にも、チェストに置かれた高遠の書置きも驚いたが、今の一撃は実際、凜の体中をずっしりずきずきと突き刺した。

凜は唇を噛み、一瞬ひるんだものの、いつもの笑顔を向けた。

「昨日は勝手に早退してしまい、申し訳ございません。ご配慮、感謝いたします」

「ああ」

怒っているわけではない。しかし、高遠は一度も顔を上げなかった。

「おはようございます、高遠さま。紅茶をお入れいたしますね」
多分、それは逃げるように見えただろう。高遠の顔も返事も聞くことなく給湯に向かった。

「昨日の書置きも、今日の様子も見er限り解雇はなさそう……」

今現在、それだけが凜にとっての救いだった。そんな小さな背中を高遠が横目で見てるなど、凜は知る由もない。そして、今日もやってきた。

誰の都合もない。彼女は、ただ素直にここにきたくて、来るだけだ。咎めることなどできない。

「凜！お昼を食べに行きましょう！」

つい一週間前まで『可愛らしい』と思っていた顔を見るたびに胃が痛くなる。

「凜は忙しい」

やはり、即答したのは高遠だった。

「高遠さま、おつかれさまです。今日は良い天気ですの。高遠さまも一緒にいたしましょう？この間、兄と行ったお店はとてもおいしかったです。ランチもやってるそうですわ、高遠さまもぜひ」

「わたしも忙しいんだ。学生に付き合ってる暇などない」

「でも、お昼は摂るのでしょうか？」

「いつかはな」

「あら、だから高遠さまはそんなに細いのよ」

「お前に言われたくない」

「凜が倒れたらどうするのよ」

高遠の視線が怪訝に見る。

「凜もいいでしょう？ね？」

薄紅色の頬。

栗色ウェーブの女の子らしい女の子。今日もシックでいて上等な

布地の服を着ている。

ふと感じた視線に顔を上げる。

（高遠さま。）

交わった視線。今日はもう言い返さないのだろうか？視線をそつと高遠から外し、沙羅に向く。沙羅は笑顔で喋っている。

（ああ、また……今日は空さま、遅いな……）

そつと服を握り締める。背中に冷や汗が流れ、あつという間に沙羅の声は聞こえなくなる。それでも彼女は楽しそうに話し続けている。

「凜」

その笑顔は誰に向けたもの？

「ね？いいでしょう？高遠さまもっ」

「凜は何も返事をしていないだろう。まったく、自分勝手な奴だな」

「あら、高遠さまには負けれると思うわ」

楽しそうに笑う。「ふふ」少女のように。

わたしにはないもの。

わたしがしてはいけないこと。

「さ、行きましょう！早くしないとお昼休みが終わってしまつわ」

伸ばされた手。

細く白い指。

温かい感触。

「い」

「え？」

高遠の声が最後に聞こえた。

「やつ！」

撥ね退けた手に、瞬間、気付く。

「あ、沙羅さまっ！あのっ……」

「凜？」

慌てるこちらとは打って変わって、沙羅の不思議そうな顔。撥ね退けられた手に視線を移し、やはり不思議そうに沙羅は首を傾げる。

「あ、の……」

謝るのだ。

すべきことはひとつ。なのに、言葉が続かない。

痛い。

高遠の顔を見ることはできなかった。

痛い。崩れていく。

目の前に現れたのは時雨澤喜三郎だった。呆れたように表情を崩す。そんな顔を見たのはいつのことだったか。

「……んで」

止まって。感情を止めなければ。『止まれ』。

脳裏に刻み込んだ『三文字』は脆くあっという間に消え去った。

「わたしは……」

「沙羅さ……凜！」

視界に入ってきた人影に、若干の苦笑いを含みながらも、それでも押し寄せてくる『嫌なもの』に飲み込まれなかったことに安堵する。

「……っそいですよ……」

沙羅の手を引く橘。空の姿が視界に入る。無理やりだ。かなり強引に部屋の外へと引き摺っていく。

橘 空にはこの感情がわかるのだろうか？わかってしまうのか。

（とりあえず、どうでもいい。）

同時に流れる安堵に、胃がかき回されたように気分が落ち込む。

部屋の中へと戻ってきたのは空だけだった。

「高遠さま、凜を」

「橘」

憎々しいとばかりの高遠の声。

全身から抜けていく力に加わる一筋の強い力。遠のいていく意識の中で引き上げるように片腕に加わる、冷たい力。

それでも安心するのは。

（高遠さま。）

「いけないで」

意識のずっと奥で涙が流れ落ちた。

ああ。

これは、この沙羅に一方的に向けるこの感情は。

『嫉妬』。

いつか、高遠の隣には自分よりもっと身近な人間が立つ。永遠を、喜怒哀楽をとにもするものが。それは紛れもない現実になるのだろう。

それに気がついたとき、それならば、秘書という、彼の仕事において隣に立つことができる場所にずっと立っていようと思った。

だけど。

いつからだろう。

それさえも許せなくなってしまったのは。

自分以外の人間と話す高遠宗司の姿に、こんなにも拒否反応を起こしているなんて。時雨澤沙羅は、わたしが本当は欲しているものをもっていた。

いつか、手を伸ばしても、今以上に線をひかれてしまうときがきてしまうのだろうか？

「宗司、さま」

ああ。

そう呼ぶわたしの顔はどんな表情なのだろう。

どうか、恋焦がれる少女のような表情はしていないで。

わたしは一生、二本の腕と、小さな手の兄を背負って生きていくから。

だから。

「いかないでください」

冷たい感触にそつと目を開けた。

「え」

「だから言っただろう、今日は休めと。どうみても寝不足だろう、凜。言うことを聞かないからだ」

青い目、銀色の髪。

目の前で動く口元が微笑む。

「こんな状態なのは、そうだな。凜をアルファで発見したとき以来だな」

いつもより弱々しい声で高遠は言う。

「あ、すみません！」

高遠の膝枕。

恐れ多いことに気がつき、勢い良く顔を上げると、逆に高遠によって押し戻された。

「寝ておけ。それより、わたしに言うことがあるだろう」
やはり高遠の膝枕に戻され、それ以上、抵抗はできない。

「え？」

「そんなに寝不足になるまでにを考えている。貧血じゃないだろう？あれだけ血になるものを無理矢理食べさせているんだ。これ以上、貧血になるわけがない。凜、言え」

「……」

口を開こうとして、言葉が浮かばず、口を閉じた。

「言いかけるな」
頬を抓まれる。

この調子だと言つまで離してくれそうにない。だが、話すわけにもいかない。

「うまく喋ろうとするから、わからなくなるんだ」
サラリと黒髪を冷たい指が梳いていく。

「ひとつひとつ、言えがいい。お前の不安はなんなんだ」

（原因があなたです。とは、いえない……）

「……あの」

「なんだ」

「わたしはなぜ高遠さまの膝に……」
高遠が顔を顰める。

「あの女が来て、お前が具合悪いというのにまくしたてるから目を回したのだろう」

「あ、沙羅さまっ。わたし……手を」

「あれはお前は悪くない。あの女が悪いんだ。気にするな」

はたいてしまった光景が再度、目の前に浮かぶ。

（沙羅さまは悪くないのに。）

あれはただの八つ当たりだ。

「……沙羅さまに謝罪に」

「行くな。あいつらに近づくな」

(……『ら?聞きたいが、聞いてはいけない気もする……)

「凜」

「は、はい」

「お前は」

言いかけて止めたのは高遠だった。険しい表情で青い目が見つめている。

「凜」

「お前は橘のことが好きなのか」

「へ?」

高遠の言葉が浸透するまでに数十秒とかかる。高遠の口はもう

それ以上開く様子はない。

「あの？高遠さま？」

（高遠は今なんと言った？わたしが……『橘 空を好きなのか？
それは……』）

慌てて上半身を起き上がらせる。高遠が素早く覗き込んでいた頭を後ろにずらす。

「空さまは秘書官として尊敬しております。あの、そういう意味でしたら好きですが……あの、高遠さま？」

「……とことして」

「へ？あの、もう一度……」

「男として好きなのかと聞いている！結婚するほど好きかと」

「はっ！？けっ……いや、あのっ」

「あの女を迎えに来る橘をいつも待っているだろう」

（わかっていたのか……）

「いつもお前の隣には橘がいる」

（確かに。困っていればいつも現れるのは空さまだ。）

「あの女が現れてから、お前はおかしい。凜」

「は、はい」

「そんなに橘が好きなのか、結婚したいか？それならばお前の望む……」

「高遠さまっ、わたしはそんなことは望んでおりません！実は……沙羅さまが少し苦手です……空さまが迎えにきてくださるのを待っておりまして。あの、秘書官としてはどうかと思いますが、すみません」

「……ああ、なるほど」

「あの、高遠さま？」

「宗司」

「宗司さま」

そつと見上げた青い目は静かに揺れていた。その目に映る自分はまだ幼くあどけない。いつになったらこの場所に相應しい人間になれるのだろう。

「宗司さまは沙羅さまのことが好きですか」
揺れていた。だから尋ねることができた。

「ふん。嫌いに決まってるだろう」
が、高遠の即答はこちらを慌てさせるものでしかなかった。相変わらず、潔い。

（決まってるって……それも上に立つものとしてはどうかと思っけど。確かに、あの様子では『好き』だとは思えない。）

「凜？何を気にしているのだ」

「あの、宗司さま。沙羅さまはきっと宗司さまのことが……」

「え？」

「あの、ですから……」

数秒後。

「くっ……あはははははっ。やっぱり天然少女健在だな」

高遠の珍しい大きな笑いが響き渡った。

「宗司さまっ」

「いや、悪い。ふっ……それにしてもお前らしいというか」

「ひゃっ」

咄嗟に出してしまった声に自分自身で驚いて、両手で口を塞いだ。

（なにをしているのだ。わたしは……）

高遠が髪に顔を埋めている。

「凜」

その声はいつも以上に恍惚としている。

「わたしには凜がいてくれればいい」

「凜」

高遠には耳まで真っ赤になった自分の様子がばれだろう。小刻みに肩が震えているのは、まだ笑い続けているからだ。

「凜。だから、そんな心配は一生する必要はない。そんなことで倒れないでくれ」

高遠が髪をそつと撫ぜる。

ああ。

「宗司、さま。わたしも宗司さまがいてくれさえすれば何も恐れることはないのです」

ある意味、それが他のどんなことよりも殺し文句に近いと思ったのは、その夜、やっと眠れるようになってからだった。

16・片羽揚舞

「沙羅さま。昨日は申し訳ございませんでした」

高遠には言われていたが、気になったものは放っておくことができない。久しぶりにいつもいる軍事局とは別棟の事務局にやってきた。受付で沙羅を呼び出してもらつと、思ったとおり、沙羅は時雨澤の部屋にいて、ひとりで降りてきた。

「謝るのはわたしの方よ。体調が優れないとは聞いていたの、もう大丈夫なの？」

昨日、今日だけなのに、沙羅は一回りも小さくなってしまったかのような。

いつもの威勢の良さがなくなれば彼女もまた凜とは年の変わらない少女だ。

「はい。ご心配をおかけしてしまったようですね。この頃、寝不足でしたので……でも、昨日は結構、寝ましたから大丈夫ですよ」

微笑む。

現金なものだ、そう思う。

高遠に昨日、言われた一言だけで、こんなにも落ち着いていられる。

「凜、あの……」

頬を染め、下を向いた少女に「そうだ」思い出して、小さな袋を差し出した。

「え？凜？」

「ご心配をおかけしてしまいましたし、せっかく何度も誘っていたのに、わたしはお昼は一緒にできませんでしたから」

「……いただいていいの？」

「ええ、沙羅さまに」

沙羅は目の前に出されたりボンのついた袋をおずおずと受け取る。

「……あけてもよろしいのかしら」

「大したものではありませんけど」

沙羅はそつとりボンを解く。

「……アールグレイ」

「お兄さまとご一緒にどうぞ」

「……凜」

切れ長の目が見つめる。

「あ、お嫌いですか？」

少しは優しい目を向けられているといい。そつと微笑む。

それは彼女の祖父からしっかり習ったものだ。表情を忘れてしま

った凜に彼はそう教えた。

もうこの心が迷うことはない。

だから、昨日のようなパニックに陥ることはない。

「好きよ、凜」

意を決した言葉が少女の口から発せられる。

「よかったです」

即答した。

頬を染めた少女が驚いたように目を見開く。次の言葉を慌てて発しようとする少女の口を綺麗な手が塞いだ。

「空さま」

にこやかに空が沙羅の背後に立つ。にわかにはわめき立つフロアに、空はそつと凜に向かってめぐばせる。

「……そろそろ休み時間が終わってしまいますので失礼いたしますね。沙羅さま」

「りっ……」

「また。今度の学校のお休みの時にはお食事、一緒に一緒にできるようにがんばって仕事をしておきましょう」

「凜、早く行かなければ」

「はい。それでは沙羅さま。次に会うときまでお元気で」

「りっ……んっ！ありがとうっ！」

背後で少女の本心からの声が聞こえた。

「まさか……」

反対に、口を押さえ、足早に事務局棟を後にする。コートを着ることなく、凜はそのうち走り出していた。

「まさか、沙羅さまが好きなひとって……」
心臓が、いつもより数段早く打つ。

「間違いなく……空さまは最初から気付いてたんだ」

隣に立つ軍事局棟に駆け込む。息が上がり、人影のない階段へ向かった。半階分降りたところで、壁に背を付けズルズルと身を崩した。

そうして、真っ赤な顔を隠すように顔を埋めた。

「まさか……わたしだなんて……」

さっきのあの頬の染め方。そして真っ直ぐとみた少女の目。

『好きよ、凜』。

体中を血気が勢い良く駆け巡っていく。

「そ、そ、そうか。そうだよね……他人の目で見ればわたしは男なんだ」

当たり前前の現実。

高遠と夜。ふたりは自分のことを知っていて、ふたりのそばでほとんどをすごしてきたから、他人の目からみた自分のことなどすっかり忘れていた。

「女の子に好きになれるなんて」

わからなかったことにして、逃げ出した。答え方などわからない。

「違う。女の子だからとかじゃない……」

自分の両親以外にそんなことを言われたことはなかった。

ふと、毎回同じ時間に現れる空の焦った様子を思い出した。いつも飄々としている彼が珍しく息を切らせながらも走りこんでくる。沙羅が勝手に歩き回っているからだと思っていたが。

「空さまは沙羅さまが傷つかないように、いつも助けに来ていたんだ。なのにわたしたら……」

『好きよ』。

真っ直ぐな視線。

高遠に向けられた『好意』だと信じて疑わなかった。

『嫉妬』。

それに気付いてしまうほど。

「好き……？」

肌寒い、そんな季節がやってきたのだと時雨澤喜三郎にこの間、

教えられた。

暑い。

彼女は自分が同姓だとは知らないけれど、だけど、この胸の高鳴りは、高揚感は、きつと『好き』。

それは――。

嫌われることに慣れてしまった自分がいた。元々、父親と母親とふたりだけにたくさん愛されて生きてきた。それをあるとき、全てが奪い去り、残ったのはすでに温もりよりも冷たく薄暗い空間に風の中に晒された二本の交差する腕だけの残像になってしまっていた。

「ああ、そっか……」

久しぶりに言葉で伝えられたこの世で一番大好きなもの。

『好きよ』。

涙が流れ落ちた。

『凜』。

久しぶりに体中が『嬉しい』――そう叫んでいる。

膝を抱え、顔を埋めた。きつと喜びに満ち溢れてしまっている表情を全面に現している顔を。

『凜』。

「ただいま戻りました、高遠さま」

ノックをし、一礼し顔を上げると、そこには見慣れない光景が広がっていた。

「ああ」

端的な反応を返した高遠に、それはハツとして振り返る。

青と白のシーグル軍の制服。

まだあどけなさが残る顔。

咄嗟に悟られないように顔を引き締める。

「わたくしは高遠宗司部隊長の秘書の凜です。 笹原龍太郎さまですね、どうぞよろしくお願いいたします」

漆黒の目。

漆黒の髪。

軍隊にそぐわない色白のきめ細やかな肌。

けれども、その青と白のシーグル軍の制服は彼に馴染んでいた。

昨日今日着たばかりとは思えないほど。

「あ、わたしの名前を…… あーぼっ、えっと…… わたしはシーグル

政府軍事部研修生の笹原龍太郎ですつ。よろしくおねがいますつ。
凜さまっ」

勢いよく、深々と頭を下げる。

「凜、で構いませんよ、笹原さま」

「でっでもっ。わたしはまだ研修生の身ですしっ、それに凜さまの方が年上で……」

少年はあたふたと表情を変える。

「『さま』なんて大したものではありませんよ。高遠さま、お茶をおいれいたしますか？」

高遠宗司は笑っていた。

多分、笹原龍太郎にはただの無表情にしか見えないだろう。

まだ。

「いや」

声色だって、いつもより楽しそうだ。

（なんていったって、不機嫌オーラが全くない。）

高遠と目の前でくると表情を変える小さな子供に秘書官としての笑顔を向けた。

「そっといえば、笹原さま。そろそろ研修のお時間では？」

その言葉に笹原龍太郎は顔を上げ、壁に掛かっている唯一のアナ

ロゲ式の時計に目を遣る。

「あつ！すみませんっ。失礼いたします！」

走り出そうとし、規律を思い出したのか一度止まると、歩いて扉へと向かう。

「ありがとうございますっ」

混ざり気のない一色素の漆黒の目が高遠を映し、少し力を弱めた目が今度は凛へと向く。

「またいらしてくださいね、笹原さま」

「はいっ。失礼いたしますっ」

音を立てないように扉を閉めると、笹原龍太郎は部屋を去っていった。

「ふっ……」

息を漏らしたのは高遠だった。

「しっかりされた方ですね、笹原さまは」

「ああ」

『無論』、そんな言葉を付け足されたような単音を手短に発し、高遠は何事もなかったように席に着いた。

「凜。あいつのことを知っていたのか」

お昼後の一杯は、高遠はアールグレイのミルクティー、砂糖なしと決まっている。しっかり蒸らしていると背後から声がかかる。

普段だったら、こんなに興味深そうな声は出さない。

（まったく。本当にひとの好き嫌いの激しいひとだ……）

「笹原さまの代の研修生たちは数名、その上の代よりも抜き出た方々がいらつしゃると聞いております。それにすでに笹原さまを狙っている部隊もごいますから」

ミルクティーを運び、微笑む。

相変わらず機嫌のよさそうな高遠はミルクティーをすぐに口に付けた。

「ん……」

コクリコクリと紅茶は減っていく。

（人肌にしておいてよかった……機嫌の良いときとすつごく悪いときは猫舌温度を確かめないですぐに口付けちゃうからな。紅茶をいれてくれるひとを信用しすぎだ、高遠さまは。）

そう思うが、無論、口には出さず、顔にも毛頭出さない。

「笹原の話だが」

そう言いながら高遠は詳細に書かれた書類を目の前に差し出した。

「うちの部隊にくるから」

差し出された書類は『笹原龍太郎』に関する身上調書だった。

「はい」

「……凜、驚かないのか？」

この場合、まだ研修生である笹原龍太郎を1年の研修生活のうちに部隊に率いれることを言っているのだろう。

しかも、どの部隊にも現在、引手数多の少年を『すでに部隊の一員と決めた』。『必ず入る』。そういう意味でのことだろう。多少、残念そうに高遠は視線を合わせた。

「高遠さまがそうおっしゃるならそうなのでしょう」

「ものわかりがよすぎるぞ、凜」

そう言いながらも満足そうな表情を向ける。

「そうでしょうか？」

「そうだ。まだ1年も先の話だ。あいつはそれまでに脱落するかもしれないだろう？」

高遠はそんなこと思ってもいない。

なぜなら、彼は見つけてしまったからだ。

「高遠さま」

無言は肯定。

とうとう、見つけてしまった。

そう感じた。

何事にもゆるぎない漆黒の両目を持った少年。

笹原龍太郎は今期のシーグル政府軍の研修生の中でも1、2位を争うほどの力の持ち主だ。もちろんその力を欲する部隊はたくさんあるが。

（笹原さまのあの目は。）

少年もまた、見つけてしまったのだろう。

互いの片羽を。

「笹原さまなのですな」
呟くように、しかし断定的に言葉をつなぐ。

「……ああ」

真剣に、そして高遠宗司は頷いた。

真実の嘘は芽を出さなければいけない。

笹原が丁寧に閉めた扉を見つめた。

「わかりました。片羽を用意いたしましょう」

丁寧、丁寧に。まだ蛹の中の彼を無理に起こさないように。そして誰に気付かれることなくひっそりと。そして、誰の手も届かない確定の中へと。

始駒がわたしなら、まだあどけなさを残す小さな少年、笹原龍太郎が全てを決める、駒だ。

慎重に。

ただ、わたしは鬼になつたとしても、誰を見殺しにしようとも、高遠宗司を守るだけに。興味を引かれた。まだそんな程度の思いいれしかもっていないあの少年に、確実な決定打を加える。

一年後は高遠の目に見えたままに。

高遠が望むなら。

片羽を彼の手に。

17・海のあお

漆黒の髪。

漆黒の目。

暗黙のうちにわたしは笹原龍太郎を守り、育てることを確実にこなすようになっていた。彼は優秀で、日に日に強く優しい眼差しを向けるようになると、反対に心が痛んだ。

毎日、毎晩。ふたつの月に祈った。

笹原龍太郎が現れてからだ。彼は何も知らない。だけど、確実にその日々は、着実に目的の執着地へと向かっている。

それでも祈るのは、高遠のその目がずっとこの世界にあり続けることだけだ。

その日は朝から嫌な予感がしていた。急に降り出した『計画にない雨』にもそうだが、現在の状況は、果てしなく憂鬱に近い状況だ。

「凜！」

高遠とともに歩いているときは絶対、そんな喧々した話方などしないだろうに。振り返り、いつものように笑顔で挨拶をすると、その表情はさらに深い皺を伴った。そもそも、この人物はわたしのことが嫌いなのだ。仕方がない。

「王さま。御用ですか？」

目の前の女性は『王桜花』。れっきとした秘書官だ。

シーグル政府軍始まって以来の『女性の秘書官』。高遠が第一部隊なので、第二部隊長の秘書官だったはずだ。彼女は。

前回の間違いは、人の感情を読み取る良い機会となった。

「高遠さまでしたら、ただいま五人議会に呼ばれております。王さま」

睨むように向けられた眼差し。

今度こそ、王桜花は高遠に好意を抱いている。

ここが公の場でなければため息でも吐きたい感じた。あからさまな嫌悪を表し、彼女は悪態をつく。時雨澤だったら、彼女はすでに秘書官などという立場にはいられないだろう。

（できるだけ早く、切り上げよう。）

と、脳裏に決意を浮かべたところで、体面の彼女の表情が明るくなった。彼女は、甘夏色の長い髪を揺らし、白いシーグル軍の制服を揺らして脇を通り過ぎた。

甘い香り。

「高遠さまっ」

甘い声。

（五人議会の方が早く切り上げられちゃったか……。）

振り返ると、すでに嬉しそうな表情で高遠の前に立ち、話をする桜花の姿とそれに応じる高遠の姿があった。みていないだろうとは思いながらも、高遠に一礼し、ふたりから間合いを取って、廊下の端に立った。次のスケジュール確認のために大きなファイルを開き、目を向ける。

極度な人嫌いの高遠が、それでも必要に応じて話すのは『片倉夜』だ。表面上は邪険に扱いながらも互いに信頼をしているのはわかる。五人議会のメンバーとは当たり障りのない会話しかない。まるで狸の化かしあいをみているようだ。特に四位と老師。それに高遠の3人の様子は全く持って他人には意を介することが難しい。

そして。

彼女、だ。

高遠より2、3歳年上の彼女は、政府軍の共通育成所で同期だったらしい。成績も1、2位を争う中だと、悲しいかな、高遠に聞く

までもなく、宣言するようにわざわざ告げに来たのは桜花だった。そんな積極的な彼女の存在をつい最近まで知らなかったのは、彼女の部隊長が敵国ベータへ内々の視察に行き、もちろん『身代わり』としても成り立つ秘書官はそれに同行していたからだ。

右耳でふたりの話を軽く聞き流しながら、次のスケジュールを目で追う。

「……今年もMOTHER'S DAYの時期か」

この国の全てを支えるコンピュータ、MOTHER。それに祈りを捧げる習慣。

初めてそれに遭遇したときは驚いたが、何度かその儀式を目の当たりにしていたらすっかり慣れてしまった。

儀式自体には。ただ。

高遠宗司は、毎年、その時期になると一層、強く思うのだろう。

『妹奪還』を。

皮肉なものだ。MOTHER（「エム」）が求めるものは高遠が求めるものと同じなのだから。

一生、それは平行線のまま。

「笹原くんが動くまでは、かな」
呟いて、次の週の予定に目を向ける。

（それもきつと近い未来に。）

すでに五人議会で、笹原龍太郎が『声用務』担当となることは決

定している。笹原龍太郎の祖父が『声』の研究施設の研究所長だったのは過大要素だった。

『声』。

高遠千世。

（すべては必然？）

まるで取り決められていたかのようにその道筋に。

「……ん」

「は？」

顔を上げる。

そこに整った顔があつて、一步、退いた。

「凜」

薄い青の両目。

「すみません。ぼうつとしていました」

視線をずらすと、高遠の後方に桜花はしっかりスタンバイしていた。

「秘書官たるもの、いつでも凜としているものよ」

「はい。わたくしの不注意です」

いつの間にか二人の会話は終了していたらしい。確かに桜花の言

うとおりだ。もし、こんなときに襲撃がありでもしたら大変だ。

「凜。四位さまからの伝達があるから、この後、2部隊長のところへ一度向かう。王、金森は」

「執務室で待機中です。こちらに何うように連絡を取りますが」

「それなら行った方が早い。凜」

「承知いたしました。先に執務室へ戻っております」

一礼し、高遠と目を合わせることなくいつものように笑顔で二人が去っていく様子を見つめた。

「沙羅さま以上に王さまは苦手だな……やっぱり、同じ仕事だからかな」

桜花が高遠の横で勝ち誇ったように笑った。

「……それともあのひと自体かな……」

「ふう」やっと小さく区切りを入れる。

中空の窓の外は、システムエラーを必死に直したのだろう、こちらの気分とは裏腹に快晴だった。

「……ちゃん」

頬に感触を覚えて顔を上げる。

「夜さま」

いつの間にか片倉夜の姿があった。

「何、書いて……って、これ……高遠はまた欠席なんさ!？」

『欠席事由』。かれこれここを考え出して10分以上は経っている。

「はい」

「いい加減、あいつも祭礼くらい顔をパパッと出せばいいんさー」

「あはは」

とはいえ、高遠がMOTHER'S DAYの礼拝に、しかもエムを崇める儀式に出席することはないだろう。毎年、彼はその日になるとこの政府軍内から姿を消す。

(妹さまのこともあるから、これくらいは。)

そう、思う。

実際、内情を知っている凜くらいしかそうは思わないのだろうが、五人議会の一員となつての礼拝出席はどうするのかと思っていたが、去年は見事、欠席した。こうなつてくると一生、出ることはないだろう。

「ま、オレも欠席だしねえ」

「そうなんですか」

「そ。臨海線への出向命令が1週間出てるからね」

「『波』ですか」

ふと驚いた表情をして、夜は真剣な表情で「そ」端的に返した。

このシーグル国を守る最初で最後の砦。臨海線。

人を狂わすほどの強い『波』に守られた国。その波もまた『エム』の力で保たれている。

敵国に舞う金色の蝶々。

「宮前さまですか」

「うーん……凜ちゃん、悟りすぎ」

「すみません。ですが、確か宮前さまがこの間、臨海線の実験に参加されていると秘書官会議で」

「ああ。そこまではオープンなんだ」

「精神世界ですから、夜さまくらいでしょう？ここの医務官の中で対応できるのは」

「その通り。ま、そんなにたいしたことはいらないから、今日の夜、行くつもり。連絡もとれてるし、今回はそんなにかからないと思うけど。だから、凜ちゃんに会いにきたんさ！」

「ありがとうございます。紅茶おいれたいでしょう」

「お。来たかいがあつたさー」

嬉しそうに言い、夜は凜の隣の席に座った。

「で」

「え？」

紅茶を蒸らし始めると夜が首を傾げる。

「なにをそんなに考えてるんさ」

「……高遠さまの欠席理由を」

眉間に夜の人差し指が伸びる。

「ココ、寄ってた」

慌てて眉間を触る。

（やられた。）

楽しそうに笑う夜に、肩を落とし、蒸らし終えた紅茶を注いだ。

「昔ね、高遠の姿を見たことがあって」

「へ？」

微笑む。懐かしそうに夜は目を細める。

「たまに凜ちゃんと同じような姿をしているから、思い出すんさー」

「わたし、ですか？」

「中空の硝子の外に白い二つの月が綺麗に昇っていてね。それを高遠が、まだ研修生から部隊に上がりたてのころだったな……見ていたんだ。銀色の髪、ブルーアイズ。すぐにそれが噂の『高遠宗司』」

だとわかったよ。空が日々、高遠の噂を言いに来てたし」

「空さまが？」

「空は人間観察が趣味だから」

「そ、……」

危うく、返事するところだった。

「高遠宗司はね、寂しさに縛り付けられたような顔でそれを見ていた。後悔したよ、しばらくその顔が頭から離れなかったからね」

（きつと、千世さまのことを。白い月。MOTHER'S DAYの週は毎日、白い月を昇らせるから。）

「わたしは寂しくなんてありませんよ、夜さま」
ふと呟く。

「でも」

「夜さまもこうして来てくれるし、空さまにもよくしていただいてあります。時雨澤さまにもいまだにご指導いただいておりますし、沙羅さまとも昼食をこの間、一緒にとりました。ですから」

「高遠さまは？」

「夜さま」

「高遠さまはいつもわたしの隣に。それだけでいいのです」

そうだ。

「凜ちゃん、それ以上を求めるのは、罪ではないよ？」

「罪でなくても、していいこととして悪いことぐらいの判別はつきますよ」

「それでも」

「それでも」

そうだ。

「わたしは『高遠さまの秘書官』の立場を誰にも譲るつもりはありません」

笑う。

笑え。

「生きている限り、何があるうとも」

王桜花にも、簡単にこの場所は渡さない。たとえ、それが高遠の望むことであろうとも。

「ふふ……我儘ですか、わたし」

一瞬、驚いたような表情を夜はして、そして表情を崩した。

「いいや。もっと求めてもいいくらいでしょ」

「紅茶、冷める前にどうぞ。今日は時雨澤忠徳さまのお好きな『アイルグレイ』です。先日、沙羅さまに美味しい紅茶があると、いただいたので」

「ほんとにあの兄妹は紅茶好きだねー」

「奎さまがありとあらゆる紅茶を時雨澤さまにおいれたそうですよ」

「あいつ、紅茶嫌いなんだけどね」

「ブラックのコーヒーしか飲めませんからね」

「「時雨澤さまは知らないから」」

ふたりで声を合わせてしまい、噴出した。

「そうそう、あいつ、帰ってきてるでしょ」

「あいつ、ですか？」

「そぞ。一応、フェアな情報をいれておこうかと思って来たのもあ

るんさ」

苦笑いしながら告げる。

「王桜花」

一瞬にして、脳裏に勝ち誇るバラの花のような彼女の姿が浮かんだ。

「あ、もしかして、もう会った？」

「帰国されてすぐに、ご挨拶にいらっしやいましたので」

「あはは、やっぱりね。昔から高遠さま、高遠さまって付きまとってたから。王桜花はね、杳までとは行かなくても第一部隊の一員になれるほどの技術は持ってたから、そのころの部隊長はみな『高遠宗司』『王桜花』を狙ってたんだけど……それを簡単に、秘書官に変えてしまったんさ」

「高遠宗司の秘書になるために」

「でも」

「凜ちゃんが、そういうなら大丈夫さ」

「え？」

「高遠さまの秘書官を渡すつもりはない、って。お兄さんは安心してさー。王桜花が何か言って来たんじゃないかと思ってさあ……」

片倉夜は優しい。

橘空もだけれど。

片倉夜の優しさの裏にはなにもない。

「ありがとうございます」

その声と表情を見て、夜は笑った。

「よかった。こちらこそ。さてと、高遠さまがそろそろ帰ってくるかもしれないから……」

「わたしがなんだ。退散か、片倉」
低い、声。

不機嫌ではないけれど、どちらかというとこれから『苛めて楽しめます』的な……

「残念さ！高遠さまをMOTHER'S DAYに連れて行かなけ

ればと思つてわざわざ来てみたけれど、もう欠席届けだすつもりらしいし！わたしが代わりに祈つておいてあげますね」

「余計なお世話だ」

「んじゃ、凜ちゃん。紅茶、ごちそうさま」

「はい」

そそくさと退散して、あつという間に片倉夜の姿はなくなつていた。

「お飲み物お持ちいたしましょう。本日のご予定は……高遠さま？」

「MOTHER'S DAY欠席届けつていうのは」

「あ、すみません。そろそろ提出しないとでしたので、勝手に作成させていただきました」

「理由、『エム指示によるノース地区制圧のため』だ。その週、ノース地区へ向かう」

とうとう、来たのか。

むしろ、遅いくらいだ。

実戦。

「はい」

「凜、共に来てもらう」

「はい」

高遠がそつと手を伸ばす。頬に触れ、丁寧に手をのせた。

「高遠さま？」

「——いや……綺麗な目をしている、凜の目は」

「え！？あのっ、高遠さまの目の方がお綺麗です！海の色をしています！」

高遠の目が揺らいだ。

「海？」

「はい、海……って、シーガルにはないですね。アルファには『海』がありました。とても綺麗で、太陽の光と月の光に水面が反射して美しく沈静に輝くのです。高遠さまの目は海の色をしています」

「この目が……」

「わたしは海の色が一番好きなんです」

揺れる青。

「海」

呟かれた恍惚とする声に、甘みを感じたのはきつとわたしだけ。

茅嶋 海。

それが本当のわたしの名前。

18・青と白

「まさか、あんたと一緒になるとは思わなかったけど……だけど、チャンスは活かすためにあるの。恨まないでちょうだい？ま、初めっから、あんたなんて高遠さまの隣には相応しくないのよ。聞いたわ、あんた、敵国のただの孤児だったそうじゃない？凜」

残念だ。まさかもう捕まるとは。ノース地区に移動し、滞留してまだ一日も経っていない。

辟易しながら、それでも努めて表情には出さず目の前の女性を見上げた。

王 桜花は相変わらず顔を見るたび突っかかってくる。

「はい」

即答したのが悪かったのか、それとも飄々といつもの笑顔で答えてしまったのが悪かったのか、王桜花はムツとした表情をさらに顰めた。

「なによ、その顔」

「地顔です」

美人も台無しだ。

「開き直っちゃって。あーあ、高遠さまもこんなのお慈悲なんてかけてる場合じゃないのに」

「ええ」

どうやら彼女の機嫌を損ねたのは両方だったらしい。
桜花は今にも掴みかかりそうな勢いだ。

「それでも、今はわたしが高遠さまの秘書官ですので」

その言葉に桜花は閉口し、唇をかみ締めた。

「失礼いたします」軽く言葉を残し、桜花からやっとな離れることに成功した。

「……空さまや夜さまじゃ、逃げられなかったな……考えるだけでも寒気がする」

相手になるはずもない、二人の顔を思い浮かべため息を落とした。

王桜花は確かに実力は優秀なのだろう。だが、自分の敵とみなしたものに對して、どうも表面に出しすぎる気がする。まだ。

（表情に出してくれている間は、どうにかかわせる。）

凜が対峙しながらも、まだ逃げられているのは彼女が本気で口を挟んでこないからだ。そもそも、桜花がそんなに簡単にあきらめるとは思っていない。

（わたしの力を計ってる。）

それが凜の考える正直なところだ。

「ふう……」

どう考えても気が重い。

が、ため息とともに気持ち切り替えると、黒い制服をヒラリと

翻し高遠の司令室へと向かった。

すっかり用を足しに外へ出てしまったところ、図ったように彼女は目の前に現れた。

「図ったんだろうな。しばらくは気が抜けない」

これが一時の間なのか、それとも永遠に続くのか。どれも高遠の匙次第なのかもしれない。

ノース地区制圧のためにエムは政府軍2部隊を送ることを通達した。たかが、反乱軍の制圧までに政府軍内で実力部隊1、2を同時に送るのにはわけがあった。

反乱軍の人間が元政府軍の人間だったから。

この国を統べる『MOTHER』は確かに揺ぎ無い信頼と力を誇っている。

けれど、結局、それはコンピュータでしかない。

演算の結果は、すべてが上手くいくとは限らないのだ。

例えば、さっきの桜花のように。

敵意むき出しにできるのも、それは相手が『人間』だからで、政府軍は幹部になればなるほどそれを否応なしに知ることになる。切り捨てるのは簡単なことだけだ。

桜花は高遠の隣に立つ自分の姿しか想像できないのだろう。それと同じことが起きる。

高遠の前の部隊長が簡単に切り捨てられ、それを根に持って高遠に銃を向けたように。

そういう人間がこの国のシステムに反対を唱えることはわかりきった事実だ。

「凜さん」

執務室に入ろうとしたところで背後から声がかかり、指紋認証式の扉のロックを外す手を下ろした。

振り返ると、そこにいたのは初めて言葉を交わす人物だった。

「金森部隊長さま」

柔らかな金髪に青と白のシーグル政府軍の制服。背の高い彼を見上げるように立ち、挨拶を交わす。他の部隊長に比べれば、ずっと華奢で細い体を少しかがめ微笑んだ。

「初めてですね、こうして話すのは。あなたの噂は聞いていたんですけど、ずっとベータに行っていたものでご挨拶が遅れて申し訳ない」

「いえ、こちらこそ。ご挨拶に伺うべきでした。第一部隊長付秘書官、凜です。よろしく願いいたします」

「わたしは第二部隊長、金森蒼です。よろしく願いいたします」
金森はそう言って柔らかな笑みを向け、続けた。

「うちの桜花がすでに伺っているようですけど」

「え？」

口元を押さえ、金森は苦笑する。

「昔から『高遠さま』ばかりでしたから、あの口が紡ぎだすのは」

意外だった。

直属の上司がそれを知っているのは。

が、それを感じ取ったのか、金森は言葉を続けた。

「わからなくもないですからね。秘書官試験は部隊員試験より先に行われます。もちろんあのプライドですから、桜花は秘書官試験にトップ合格し、ちょうどわたしが第四部隊長を拝命するときでしたから、秘書官に就いてもらったんですが……高遠さんは部隊長に就くとともにあなたをアルファから連れて帰り、異例の秘書官採用を決めてしまっていた。桜花が迷惑をおかけすると思いますが、ご配慮いただけるとありがたい」

軽く頭を下げられて、慌てて深々と頭を下げた。

「いえ。わたしにとって王さまもまた大切な先輩秘書官です。たくさん学ばせていただくことがありますので」

「そうですね、それはよかったです」

フワリと差し出された手を握り返した。

力強い大きな手だった。

「凜さんは実戦は初めてですか」

「はい。足を引つ張らないようにいたします」

「あまり力みすぎずにね。何かわからないことがあったらわたしに聞くといい」

「ありがとうございます」

「お、桜花からの呼び出しだ……」

胸から連絡のために使うベルを取り出し、そこに表示された文字を読み、若干、顔色を変えた。

「高遠さんはいるかな」

「はい」

真剣な眼差しに、凜は指紋認証でさっさとロックを外し「戻りました」声をかけながら扉を開ける。

目の前に今までの報告書を薄暗い部屋の中で目を通す、銀色の髪の青年の姿があった。

「動いたか、金森」

「ええ」

報告書から目を上げずに言い、金森が足早に近付くとやっと視線を向ける。

金森の後ろに立つ凜と視線が合う。

高遠はその視線を外すことなく、金森の説明を聞いている。

（ふっ、不機嫌だな……なんかあったのかな。）

そう感じながらも、凜は視線が合ったままの高遠に一礼し、自分の席へと向かった。

（ノース地区の反政府軍のリーダーは、確か元臨海線部隊の部隊長だったな。）

一応は調べてきていたものの、実戦はこの数年のうちにも初めての経験だ。少し緊張を伴いながら、出てくる前に空に聞いたことを復唱した。

「わかった」

高遠の声が聞こえ、足音が聞こえ、凜は立ち上がった。

用件の済んだ金森のため扉を開く。

「また。凜さん」

さわやかな、柔らかな声に頭を下げた。

「凜」

「はい」

扉にロックを掛け、席へ戻る途中、呼ばれる。

「金森と知り合いか」

「いえ、さきほど扉の外でお会いいたしました。実は、金森さまの秘書官にはご挨拶をしていたんですが」

「桜花か」

「はい」

（気にするな。）

普通に高遠の口から紡がれた親しみを込めたような『桜花』名前に、危うく表情を崩しそうになる。

「金森部隊長のところへご挨拶へ伺うのを失念しておりました」

「ああ、そうか」

なにを納得したのか、高遠は表情を和らげた。

「凜、携帯しておけ」

「はい」

高遠を急襲された設楽少佐の事件以来、凜は黒い制服の下に銃を常に携帯していた。高遠がそれを確認することは今までなかったが、金森から受けた報告はあまり良いものではなかったのだろう。

「金森を出す」

緊張したような、張り詰めた声。高遠がそんな声を出すのを久しぶりに聞いた。彼の一挙一動は覚えているつもりだったが、それさえも思い出せないのは自分もまた緊張しているからかもしれない。

脳裏に浮かんだ金森の柔らかな微笑み。

それが。

もしかしたら、もうここに戻ってくることはないかもしれない。

そう思ったとき――。

「了解いたしました」

そんなとき、どうやっていいのかわからない。

空ならばどう対処するのか、時雨澤ならどう答えるのか。声が震えないように、それだけが精一杯だ。

久しぶりにそこに現れたのは、二本の干からびた交差する腕。

顔を少し下向きにし、唇をかみ締め、震えを堪えた。

「金森の状況を見て、わたしも出る」

「はい」

「金森の部隊は反政府軍などに負けはしないだろうが、そもそも、桜花もいるからな」

「——はい」

（もし。ベータから王さまがわたしと高遠さまが会おう前に戻ってきていたら。）

「あっ……」

耳を突き刺すような『キン』そんな音。
咄嗟に高遠へ向かい走る。

「宗司さまっ」

凜の体に比べれば、大きなその体を抱えるようにして高遠を押し倒す。

部屋を切り裂くような閃光。
そして、同時に爆音と振動が走った。

「……わたしだ」

凜の体の下から低い声が聞こえる。

高遠が携帯の無線を使っていることを察し、覆いかぶさった自分の体を退けようとして、その力に気付く。声を出すわけにもいかず、慌てて視線を合わせる。

高遠はこの状況にも笑っていた。

「状況報告」

相手の鬼気迫る状況報告が聞こえる。

「わかった。第一部隊をすぐに出せるように第二翼に待機させておけ」

「はい！」叫び声に似たそんな声が聞こえ通話が切れた。

「今の攻撃は第一翼へですか」

「ああ。第二翼に一部隊を待機させている」

（金森さまの部隊は第一翼で準備をしていたはず。）

「桜花もいる、金森のことは考えるな」

「……はい」

「凜」

青い目がそつと、優しく見つめている。

「あの、高遠さま？」

「宗司」

「宗司、さま。あの……誰かが走ってきます」

「そのようだな。仕方ない」

（……敵の急襲に合いながら『仕方ない』。しかもこの余裕はどこから。）

背中に回された高遠の手が外され、高遠の手によってあつという間に体勢を戻される。

「怪我はないか、凜」

「はい。高遠さまはどこか傷むところはありませんか」

「あつたら、凜に手当てを頼むから、大丈夫だ。行くぞ」

扉が強く叩かれる。

「高遠さまっ！」

「王……さま!？」

慌てて扉を開けると、桜花は隙間から飛び込んできた。そして凜に見向きもせずに立ち上がったばかりの高遠のそばに駆け寄る。その状況に驚いたのは高遠も同じようだった。

「桜……」

小さな眩きのあと、高遠より少し小さな体が飛びついた。

「高遠さまっ！」

「おま……」

（なぜ、王さまがここに。）

はっとして扉を押さえつけるように手で退けると部屋を飛び出した。

「凜！」

（さっきの揺れはここよりドックの方が強かったはず。というより、さっきの爆撃は……）

「間違いなく直撃だったはず」

瞬間、走り出したスピードが落ちない理由を思い出した。

「……申し訳ないけど、誰かに体当たりして止めるしかないな」

高遠を守るために設楽少佐の銃撃を受けた。

夜にも言われている。

自分でも自覚している。

この足はあまり言うことを聞かなくなっている。多分、本気で走り出したら自力でスピードを弱めるのは不可能だ。

途中で廊下に蹲る高遠の部下たちを目にした。とりあえず負傷というわけではないらしい、凜は声も掛けずに走り抜ける。止まることはできない。

急がなければいけない。

ドックに入りその状況を目の当たりにした。

「負傷者を確認してください！」

壁に体を凭れた青年に声を上げ、近場の手すりを身軽に飛び越えた。

「金森部隊長！」

左右を確認し、その姿がないことにさらに走り続ける。

「止まってから走れるかな……」

同時の判断で、凜は近場の元気そうな青年に突っ込んだ。

「すみません！」

ふたりで床に思いっきり倒れこむ。

「なにするっ……高遠さまとこの凜さん！どうなさったんですか
！」

少しその物言いに笑みを向けながら足に力を入れる。

（大丈夫そうだ。）

「金森部隊長はどちらです」

青年の顔が翳った。

「こちらです」

それでも凜として言う。凜が立ち上がるのをさっと手助けし、青年はそこへと案内した。

「医療班は」

「呼びました」

「……凜、さん？」

少し弱々しい声が聞こえ、凜は振り返る。
壁に寄りかかるようにして、凜と視線が合うと金髪の青年は微笑んだ。

腹部に滲む深紅の血を片手で抑える。

「なぜっ！部隊長！」

そばに慌てた様子で金森の治療をする青年の姿に目を留め、そして状況を悟った。

（あの子を守ったんだ。）

凜は黒い制服を脱ぐと、勢い良く裂いた。

高遠から『制服は脱ぐな』と言われているが、緊急を要する。

（あとでなんとか言いくるめてみよう……）

「どきなさい。あなたは金森さまの補佐官ですね？」

「は、はい」

「第一部隊秘書官の凜です。ここはわたしが引き受けます。負傷者の確認と指示を金森さまの変わりに頼みます」

補佐官である青年が金森に返事を乞う。もちろん金森は頷き、補佐官は走って消えた。

「すみません、本来ならわたしが口出すべきところではないのでし
ようが」

桜花の行動は凜にとって嫌悪に値するものだった。

（秘書官としては最低だ。）

初めて感じるひとに対しての嫌悪感。

「凜さん」

「黙ってください、金森さま。応急処置をします」

凜は緊急無線をつなぐ。

「秘書官の凜です。医務官の片倉さまはお戻りですか。はい、はい
……わかりました」

金森は驚いた表情を見せ、だが、次の瞬間、凜が思いっきり力を
込めた止血の作業に呻いた。

「秘書官の凜です。そちらのシップに政府軍医務官、片倉夜が乗船
していると伺って……すみません、緊急です。つないでください」

「……凜、さん……高遠さんは」

「大丈夫です」

「高遠さんについていなければいけないだろう。行きなさい」

一瞬、手を止めた。

脳裏にちらついた王桜花の様子に首を振る。

なぜ、彼女は。

そこまで彼女を変えてしまうのか。

彼女は、忠実にこなしてきたその用務さえ忘れて。

「高遠さまは大丈夫です。もうすぐこちらに向かってくるはずですよ」

「それでも！」

「今はあなたの止血が第一です。黙ってください、金森さま」

王桜花は彼女のたったひとりの今の主である金森を投げ出して、高遠の元へと駆け込んできたのだ。血相を変えて部屋に駆け込んできた彼女の姿を見たとき、反対に血の気が引いたのはこっちだった。

彼女がここにいるなら、ならば……

『金森』は。

タイミング良く、電話越しに夜の抜けた声が聞こえた。

「夜さまっ」

『凜ちゃん。ん？今、ノースっしょ？……なんかあったんさ』
すぐに状況を察してくれる辺りが心強い。

「臨海線の仕事後すぐで申し訳ございません。ノース地区二部隊が

急襲にあい、負傷者が多数出ております」

『わかった。すぐに向かう。凜ちゃんと高遠は』

「大丈夫です。これからノース制圧に向かいます」

目の前の金森が「ノース制圧……」驚いて目を丸めた。

『わかった』

端的な返事とともに夜が通話を切った。

「凜」

抑揚のない低い声。

締めくくるように、金森の止血を終え、立ち上がる。
そして、振り返ると同時に一步横にずれた。

「金森」

銀色の髪、そして青い目。シーグル軍の制服を冷ややかに着こなし、高遠は金森を一瞥する。息を飲む音を発したのは彼ではない。背後にその影を認め、凜は音もなく瞬時に移動した。

「王桜花、齒を強くかみしめなさい」

「凜さっ」

金森の声と割れるような音がドック内に響いた。
少し背の高い桜花の両目が揺れる。彼女はすでにこの状況に後悔している。

だからこそ。

だからこそ悔しかった。

右頬を押さえ、桜花は動揺した瞳を凜に向けた。

「秘書官として、あなたは最低です」

「あんに……」

勢い良く降り降りてきたその手を交わし、凜は桜花をにらみ付けた。

「あなたはご自分のなさったことの意味を深く考えるべきです。あなたは女である前に秘書官であるはずです」

「あんた男なんかになにが」

「わかります」

目を伏せた。

だからこそ苦しいのだ。

自分が『本当は女』であるからこそ。

そして『今は男』でもあるからこそ。

「申し訳ございません、高遠さま。手を挙げたことに対する処分に
つきましては、金森部隊長と高遠さまよりあとでお受けいたします」
返事はなかった。

無線が揺れ、凜は構わず受けた。

「はい。よろしく願いいたします」

平然と言い、高遠に顔を上げた。

「高遠さま、医務官の片倉さまを臨海線任務が終了したとのことでお呼びしました。あと30分程度で軍機で到着とのこと。副官を出迎えに向かわせます」

無言は肯定だ。携帯で高遠の副官に指令を出す。

「それと、王さま」

「わたしは、一生、高遠さまから離れるつもりはございません。片時も、秘書官として。わたしはここにいるべくしているのです」

誰も何も言わなかった。

桜花も、金森も。

ただ。

「当たり前だ」

静かに紡がれたその声は、あっという間に凜に『いつもの凜』を取り戻させた。

「凜、待機中の第一部隊を出す」

いつものように言い、青と白のシーグル政府軍の制服を優雅に翻し高遠は歩き始める。高遠を見上げた桜花に視線を一度も合わせることなく。

「はい」

無言のまま司令室へと向かった高遠は、凜に聞こえないように静かに一言、呟いた。

「わたしの海の青と絶え間なく注ぐ白い光はすべて凜のものだ」

「なにがあっても」

19・水葬

急襲には急襲を。

誰が言ったわけでもないが、戦線を完璧なまでに立て直すとは思っていないかったのだろう、ノース地区の制圧は一日もかからずに高遠の指示により終結した。

拘束者、多数。

「……空に文句言われるなあ……オレのせいじゃないのにさー」

取調べをするのは警吏局である、時雨澤忠徳の管轄だ。臨海線から駆けつけ、自分の仕事をあつという間にこなした片倉 夜は、連行したシップからずらすると政府軍基地へ降りていくノース反政府軍の面々を見ながら、心底嫌そうに呟いた。

「あ、凜ちゃん」

高遠の後ろに沈んだ表情で降り立った華奢な黒服の凜の姿を見つけて、夜は思わず声をかける。

「夜さま」

それに気がついた凜が顔を上げる。いつものような笑顔で夜を見返し、頭を下げた。

「お呼びだてしてしまい申し訳ございません」

「いいさー、凜ちゃんのためだしねー」

「それが仕事だろ」

ばっさりと低い声。

「……他に言い方はないんさ……」

もちろん高遠の冷たい一言が入る。凜はその様子に軽く笑い、言葉が続けた。

「金森さまのご容態はいかがですか」

「応急処置しかできなかったから医務局にさっき連絡して集中治療室に入れたけど……そーだなあ……致命傷ではないから、復帰は出来るだろうね」

「そうですか、よかったです」

夜は、安心しきった様子の凜に半ば、曖昧な笑みを向ける。

「あとは高遠さま次第っしょ」

「え？」

夜と凜、ふたりして高遠に見向く。が、それを察知していたかのよつに高遠は背を向け歩き出していた。

「凜、五人議会とエムに報告に行ってくる。今日は部屋へ戻ってい

いから」

抑揚の含まない声で背中越しに告げられ、凜は慌てて「はい、承知いたしました」返事をし、高遠の背中に向かって頭を下げた。

「……今日はお兄さんとご飯にしようか」

「え？」

「オレも臨海線帰りで、このまま直帰予定だからねー」

「夜さまは報告は……」

「もちろん、明日する」

自信満々に言い切り、夜は笑った。

「……峰岸さまに怒られますよ……」

その前に、峰岸が行方をくらました夜を探すために空を使い、あつという間に引き摺られて行くのだろうことは安易に想像がつく。

「腹が減っては戦は出来ぬっていうつしょ」

案の定、夜は簡単に探し出され、空によって政府軍に引き摺られていった。

白い月。

見上げた空に白い月。凜は肌寒さを感じながら、政府軍の建物を目指して歩いていた。

「今年のMOTHER'S DAYは今日までだなあ……」

数日の間に起こったことをかみ締める。そして、右手を押さえた。

「ひとを叩いてしまった」

左頬を押さえ、睨む王桜花の目がいまだに消えない。

ひとを叩いて自分が痛みを覚えた。

『王桜花、齒を強くかみしめなさい』

紛れもない自分の声。

金森がそれを制しようとしたのを上げてたのもわかっていた。だが、どうしてもその衝動は止められなかったのだ。

なぜ。

『秘書官として、あなたは最低です』

そう。

そんなことが言えたのか。しかも、先輩の秘書官に対して。

そして、その言葉には高遠とは無関係だ。
ただ、単にそれは王桜花を責めたもの。

「それはわたしが、王さまと同じ秘書官だから……？」

声に出してみても、ひとりで曖昧に微笑んだ。

（わたしはこの、シーグルの人間なんだ。）

そして。

「わたしはシーグル政府軍の秘書官なんだ」

秘書官になるのがどれだけ大変なことかわかっている。実力だけ
みたら、自分より遥かに知識を身につけた秘書官になれない秘書た
ちはたくさんいる。

自分は異例だ。

あとにも先にも同じ境遇の者は現れないだろう。
すべては、高遠に導かれたもの。
すべては、この世界に導かれたから。

「奇跡はひとつもない」

最終的に行き着く先は決められている。それもわかっている。

「目的を達成する」

そして、最終的な場所は『死』だ。

「それでもいい。すでにわたしは死んでいるのだから」

この政府軍の秘書官たちは、それぞれ自分の佐官のために、それだけのために生きている。高遠と凜、ふたりだけの目的の最果ては、柰などの秘書官たちの最悪の最果てと同じだ。経緯がどうであれ、秘書官とはそういうもの。

桜花もまた、それをわかっていたはずだ。

いままで、彼女は金森の秘書官として数々の生死の場面に直面してきただろう。桜花はそれだけを感じさせるほどの強い目をしていた。

金森も、優しい声と雰囲気とは裏腹に、力強い芯のこもった視線を投げかけた。なのに、今までのすべてを彼女は一瞬にして投げ出してしまった。音もなく。

「誇りを」

すべての秘書官たちの『誇り』を彼女が『女だから』、そう自分で決め付けてさっさと穢してしまったことに無性に怒りが込み上げた。

やはり、桜花の頬を叩いた手が痛んだ。

「わたしにもこんな感情、あつたんだ……」

ふっとため息を吐く。

わずかに白い吹き溜まりができ、すぐに闇の中に霧散していった。

「失礼いたします」

扉が開いた先に久しぶりのその顔が現れ、凜は走るようにして出迎えた。

「金森さま」

「凜さん、その節はありがとう」

「お体の具合はいかがですか？」

「今日退院だったんですよ。その報告と……」

金色の髪がサラリと揺れ、姿勢を正した。

「高遠部隊長、お話がございます」

リン、とした張り詰めた声が部屋に響き渡る。

「ああ」

端的な返事。

いつもの優しげな雰囲気はまったくなく、金森は軍独特の敬礼を済ますと、高遠の席まで怯むことなく歩いて行った。凜はそつと扉を閉める。

「なんだ」

高遠は書類を閉じると、座ったままで目の前に立つ金森を見上げた。

「第二部隊長の解任をお願いします」

「非がないのに解任の要求は受け付けられないな」

サラリと言い、高遠は「それだけだったら話すことはない」付け加え、書類に手をかける。

「待つてください!」

開きかけた書類を再度、とじる。

「部下の管理不行きにより、実戦の最中に混乱をもたらしました。それは指揮官として許されるべきことではないはず」

「その傷は副官を守るための傷だろう。確かに指揮官としてはその行為は、間違っているといえは間違っている。お前の体ひとつで軍隊はどうにでもなる。戦線離脱は『ありえない』」

青い両目が、冷やかな視線を向ける。

「王桜花は秘書官から追放した」

「なっ!？」

「すでに今回の自分の行動に対して、自分を見失い、とても秘書官として復帰できる見込みはなかった。尤も、あの行動からすれば、解任は免れなかっただろうが」

「……ですが、あれは、高遠さん、あなたを案じて」

低い声は金森のものだった。

うつむき、表情を無くした金森にいつもの柔らかさは全くない。

空気が張り詰め、そんなに近くにいない凜でも息苦しささえ感じた。

無音のその空間を打破したのは、その声だった。

「お前はもつと賢い奴だと思っていた」

「ふう」そんな息を漏らしながら高遠は言う。

「凜」

突然、声が掛けられ、慌てて高遠に走り寄る。

「はい」

そつと背中に添えられた手はいつのまにか大人のものだった。

小さくトン、と触れられ、姿勢を正すと高遠と同じように金森を見上げた。

「わたしには凜がいる。後にも先にも凜だけで充分だ。みなが知っているだろう、高遠の隣にはいつも凜がいると。わたしはそれでいいのだ、最初に同じことをお前に言った」

「……………はい」

どこか苦痛に歪む表情で金森は頷いた。凜にはそもそも、この二人の間にそんな会話があったことすら初耳だ。

「わたしは王のことも言っただけだ」

「……………はい。ですがっ」

顔を上げた金森を見つめていたのは冷たい青い両目だった。どこもみていない、そんな両目に金森は自分の情けない表情が映っているのに気付き、目を逸らした。

「……………王桜花はあなたと共にいるためだけに、政府軍に残ったのです」

「わたしは王とともにいることは出来ないと、王にも言った。王には凜がわたしの元へ来る前にも言った。わたしは王やお前が望むほどのモノではない」

徐々に冷たさの混じる声。

どこか泣き声に聞こえるのは、凜がその事情を知っているからなのか。

高遠の目的を思い、凜はそつと視線を落とした。

「王が今回のような行動に出ることは少なからず、お前は前から予想していたはずだ」

「……え？」

「王のことを一番良く知っているお前だから、知らないはずなどないだろう」

断言し、高遠は銀色の前髪を掻き揚げた。

「お前が知らないことなどありえない」

「たっ……」

慌てた金森に、高遠は不敵に笑った。

「金森、それでも王を離したくなかったんだろ。お前は王のことが好きだからだ」

（え？金森さま？）

真っ赤になって俯いた金色の青年は口元を押さえた。

「わたしが気付かないとでも思ったのか？馬鹿者。だから、お前もつと賢い奴だと思っていた、と言った。なぜ、こうなる前にそれを王に言わなかった。自分の秘書官だからか？関係ないだろう。私事と仕事の区別くらい二人ともつくだろうが。王の気持ちを優先したのか？わたしは言ったはずだ、王の気持ちには絶対、答えられないと。絶対だ。わたしは何もいらない」

胸が痛い。

『なにもいらない』。

高遠宗司は何も求められない。

だからこそ、『なにもいらない』。

わたしでさえもいらない？

高遠は金森が下を向いている隙に凜の頬をそつと撫ぜ、そして微笑んだ。誰が見ても、その微笑みは微笑みとは捉えられないだろうけれど。

「凜」

徐に呼ばれた声に見向くと、高遠は再度「凜」そう言つ。

それは違う。

と。

そう言つように。

「いるべくしているもの以外、わたしは何もいない」

「凜」

苦しい。

「自分のものくらい自分でつかまえておけ。お前にはそれが許されているんだから」

このひとは何も許されていない？

高遠宗司は優しいのだ。優しすぎるから、周りにいる者たちを自

分の目的に巻き込ませないように、必死なのだ。

自分に善であろうと悪であろうと関わりうとしてくる人間たちを、ことごとく蹴散らすのではなく、全く見向きもしないのは、そのためだ。巻き込み、傷つけないため。

『離れて』

『離れないで』

高遠宗司の心は常に痛がっている。

「高遠さん？」

「王は療養に出した。自分の行動にあまりにもショックを受けていたからな、医務官の片倉の判断だ。政府軍付属病院に入院させてもよかったんだが、王は政府軍内だと顔が知られているからな。変な噂の的にさせるわけにはいかないから、サウス地区の病院に入院させている。詳細は片倉にでも聞いてさっさと行ってやれ。で、お前の話はこれだけか」

「え、あ、あのっ。わたしは部隊長を……」

「初めに言っただろう。解任要求は受け付けられないと」

「ですがっ」

「私事と仕事は別だ」

「え……」

「わたしは第二部隊長はお前でなければいけないと、そう思っている。金森蒼、わたしは政府軍の部隊長にはなるべくしてなる者達を配している。それだけのことだ。今回のエムの指示は滞りなく終わっている。だったら何も問題はない」

金森は青い両目をしっかりと見つめ返した。

「金森蒼。引き続き第二部隊長を任命する」

「はい」

金森はしっかりとした視線を向け、そして政府軍独特の敬礼をすると部屋を後にした。

高遠宗司は最後まで『桜花』と昔のようには呼ばなかった。

扉が閉まり、高遠は「ふう」大きなため息をついた。

「鍵、閉める。今日は無駄な時間をこれ以上作りたくない。来訪者はすべて無視だ」

凜はあまりの態度の違いに、苦笑を零しながら返事をする。

「コーヒーがいいな」

「はい、ただいまお持ちいたします」

「凜」

コーヒーを煎れている最中に掛かった声に振り向く。

「凜」

相変わらず、恍惚とする声だ。

「はい」

確かめるように高遠は名を呼ぶ。

「宗司さま」

満足そうに微笑む。

まるで。

浮いたり、沈んだり。

「そうだ、凜」

「海」

どきつとした。

唐突なその言葉に。高遠は知らないはずの、その言葉の意味を。

「アルファには海があると聞く」

一瞬、間をおいて、その言葉の意味に頷いた。

「あ、は、はい。ございます」

「左の青い頭には雄大な海を。右の白い頭には絶え間なく注ぐ光を。シーグルの紋章を象る双頭の鷹にはそういう意味があるのだが、シーグルは砂漠に囲まれた国だ。誰も海など見たことないだろうに。海とはどういうものだ。凜は見たことがあるか？」

「わたしもございません」

「そうなのか、そうか」

何かを納得し、高遠は頷く。

「いつか共に海を見にいけるといいな」

泣きそつだ。

「はい」

待ち受ける未来の選択肢が『死』しかない、そう思っていた。

高遠宗司は考えていたのだろうか。

「よし、海を見に行こう。契約条件に加えておく」

楽しそつに高遠は呟く。

「はい、宗司さま」

沈んでいく。

この想いは、どこへも行かないと思っていたのに。

行き先はすべて高遠宗司の下へ。

わたしは『海』という名のもとに、海へと沈んでいく。

雄大な、沈静の海へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676l/>

一色素のブルー

2011年5月27日12時02分発行